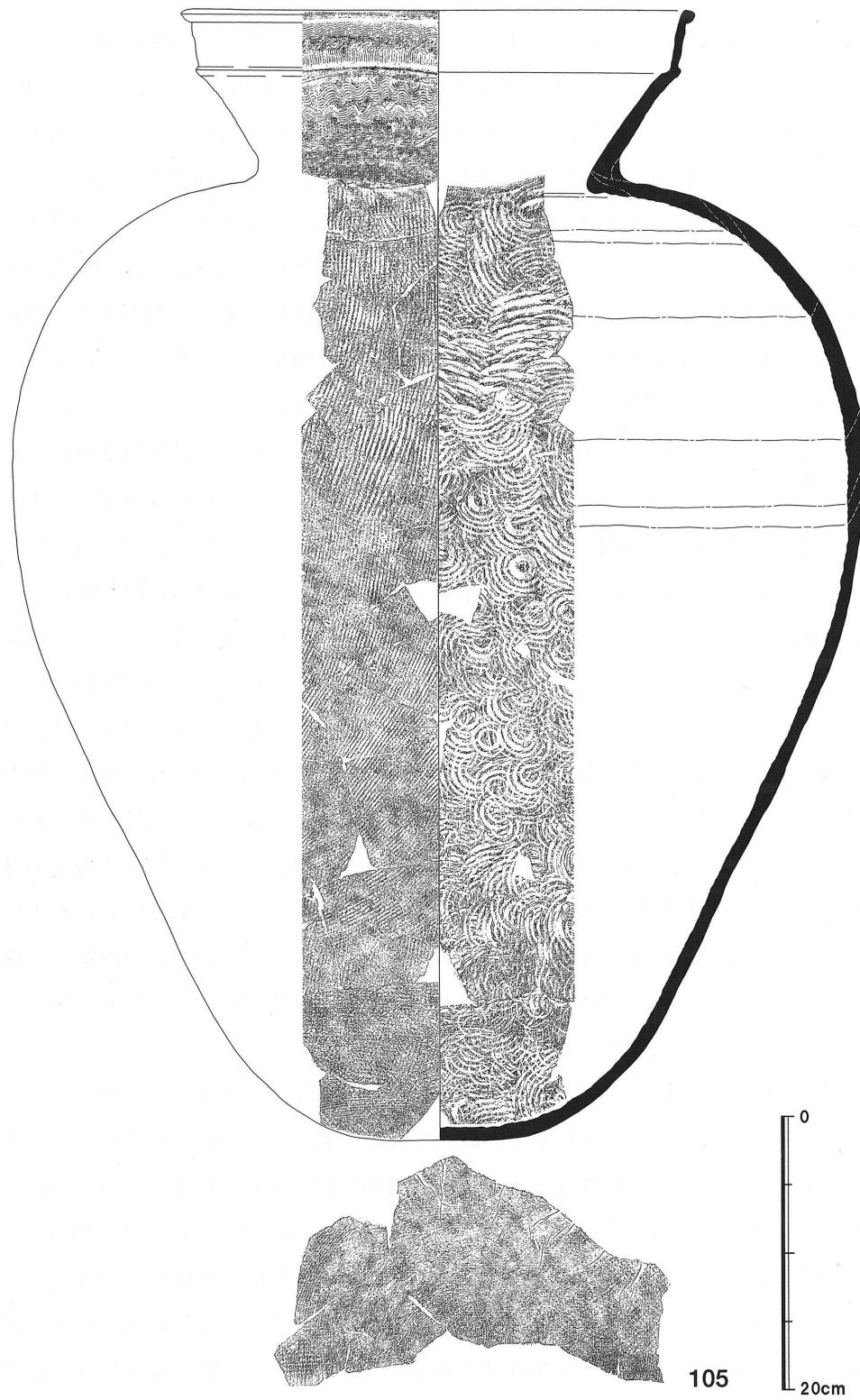


第33図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡S Y01出土須恵器実測図（8）



第34図 陣ヶ平西遺跡 1号須恵器焼成窯跡 S Y01出土須恵器実測図（9）

やや外反し、外側に折り返したり、粘土紐を貼り付けて肥厚させている。外面は上半と下半を文様帶として、それぞれに1段もしくは2段の櫛描き波状文を施している。101の口縁部下半は播鉢状を呈しており、上半への屈曲も弱い。肥厚部断面はカマボコ状を呈している。薄く延ばした粘土紐を外に貼り付けて肥厚させている。外面上半の文様は8～9本一単位の櫛描き波状文、下半は、同櫛描き波状文が1周以上施されている。櫛描きの端部は、連続烈点文状のとぎれとぎれになった櫛描き文が見られる。102は二重口縁状の上半部の器壁は下半部の半分程度まで薄くなっている。口唇部は折り返して肥厚させ、断面は丸みを帯びた三角形状を呈する。上段には櫛描き波状文を1単位、下段には3単位施す。櫛状工具の歯は10本一単位である。上段の波状文のピッチはほかと比べタイトである。103の口縁部下半と上半の器壁は一様である。上半と下半の境は、わずかに傾斜変換はするものの、折り曲げることで内面に段を、外面に稜を形成させている。口唇部外面に粘土を薄く貼付けて肥厚させ、明瞭な稜線を呈すようにヨコナデ調整している。外面の波状文は上段、下段ともに1段ずつで、櫛状工具の歯は10本一単位である。105はほぼ完形の大甕である。器高82.4cm、口径36.2cm、最大胴部径62.4cmである。口縁部は中ほどで「く」の字に折り曲げて成形した二重口縁状を呈する。口縁端部は外側への折り返し成形で断面は方形に近い。外面は屈曲部が突堤状になっており、その上下段を文様帶としている。上段には、上から櫛描き波状文・刺突文・縦位の櫛描文を施し、下段には櫛描き波状文を2段に施す。刺突文は全周せず、途中でやめている。櫛状工具の歯は一単位9本である。施文は粗雑な感を受ける。頸部は粘土紐を幾重にも使用し、補強のためか頸部外側にも粘土紐を重ねて貼付けて成形している。胴部は板状の粘土紐を内接しながら成形しており、部分的には胎土の色が異なる粘土紐が交互に使用されているのが観察できる。胴部下半部で若干内側に湾曲している。タタキ痕の方向もこの部位で上下に方向が異なる。底部の中央は平底気味になっており、外面には同心円状に搔き目痕が残る。

横瓶（第32図100、第33図104） 100の頸部は強く湾曲し、口縁部は途中で上方へ傾きをえる。そのため口縁部内面はやや内湾している。肥厚部は外面が垂直に整えられ、口縁端部は丸く收めている。肩部は大きく開き、胴部は張り出している。肩部～胴部は外面が平行タタキ目調整後搔き目調整を施しており、内面は青海波状文の当て具痕が見られる。104は横瓶の胴部である。ほぼ球形を呈していることから長軸の側面と思われる。外面は格子目状のタタキ目、内面は青海波文の当て具痕が見られる。外面には2条の平行沈線が縦にめぐり、その間に「井」の字状沈線が施される。「井」は横位の沈線2本、縦位の沈線2本の順で施文されている。

（槇林啓介）

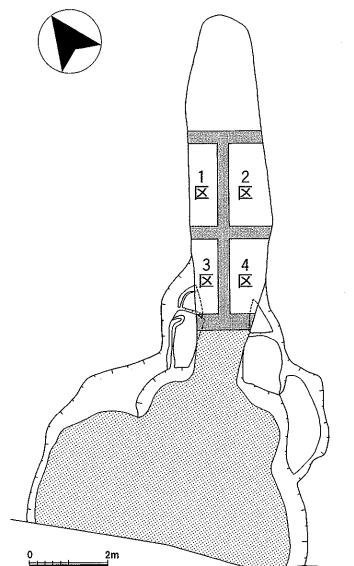
2. 3号須恵器焼成窯跡 S Y03

1) 窯体と付属施設

1号焼成窯跡に先行して構築されたもので、斜面下方のC4・D4区南半～C5・D5区に位置する。1号須恵器焼成窯跡同様に検出プランの主軸を基線として8区画に区分して調査を進めた（第35図）。意図的に埋積されたため、窯体がよく保存されており、窯体北半部は天井が一部残存していた。窯体の掘り方は認められず、地下式と考えられる。本焼成窯跡は窯体部、前庭部、灰原部などからなるが、遺構は調査区外へ広がっており、灰原は調査区外に位置しているものと思われる。焚口部や前庭部に作業平坦面、土坑などが構築されている。1号焼成窯跡同様に、細長い窯体部に、平面円形状の前庭部が連続しており（第36図）、さらに斜面下方に灰原が連続するものと思われる。前庭部中央には2条の溝（S D03・04）が平行して構築されており、前庭部西半は広く平坦面を形成している。前庭部北西部の掘り方に接して2号土坑SK02が構築されている。

操業期間についてはかなり短期間であったものと推定される。燃焼部床面の還元部分は基本的に1枚であるが、燃焼部から焚口部にかけては固く焼けしまった面が還元部分の上に焼土層・灰層などを間に挟んで形成されており、操業期間は短期間にせよ、少なくとも2回の操業がなされたものと推定される。前庭部に堆積した木炭層の堆積状態や出土須恵器の量などから見ても操業期間の短さが推定できる。複数回の操業を想定できるにせよ、基本的に操業期は1時期でその期間も短期間であったと思われる。

次に、3号焼成窯跡の各部の内容について少し詳しく述べてみたい。窯体部平面は中央部がやや胴張りになっており、燃焼部と焼成部の境界付近がもっとも幅広で、窯尻、焚口に向かってそれぞれ緩やかに幅を減じている（第36図）。燃焼部平面は非対称形で、窯体の主軸と焚口部の主軸が一致せず、焚口部の主軸が西側にずれている。床平面を見ると、西側縁辺は焼成部北部から燃焼部、焚口部までほぼ直線であるが、東側縁辺は焼成部の燃焼部との境界付近で緩やかに屈曲し、燃焼部の中央部付近でさらに屈曲



第35図 陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03調査区設定図

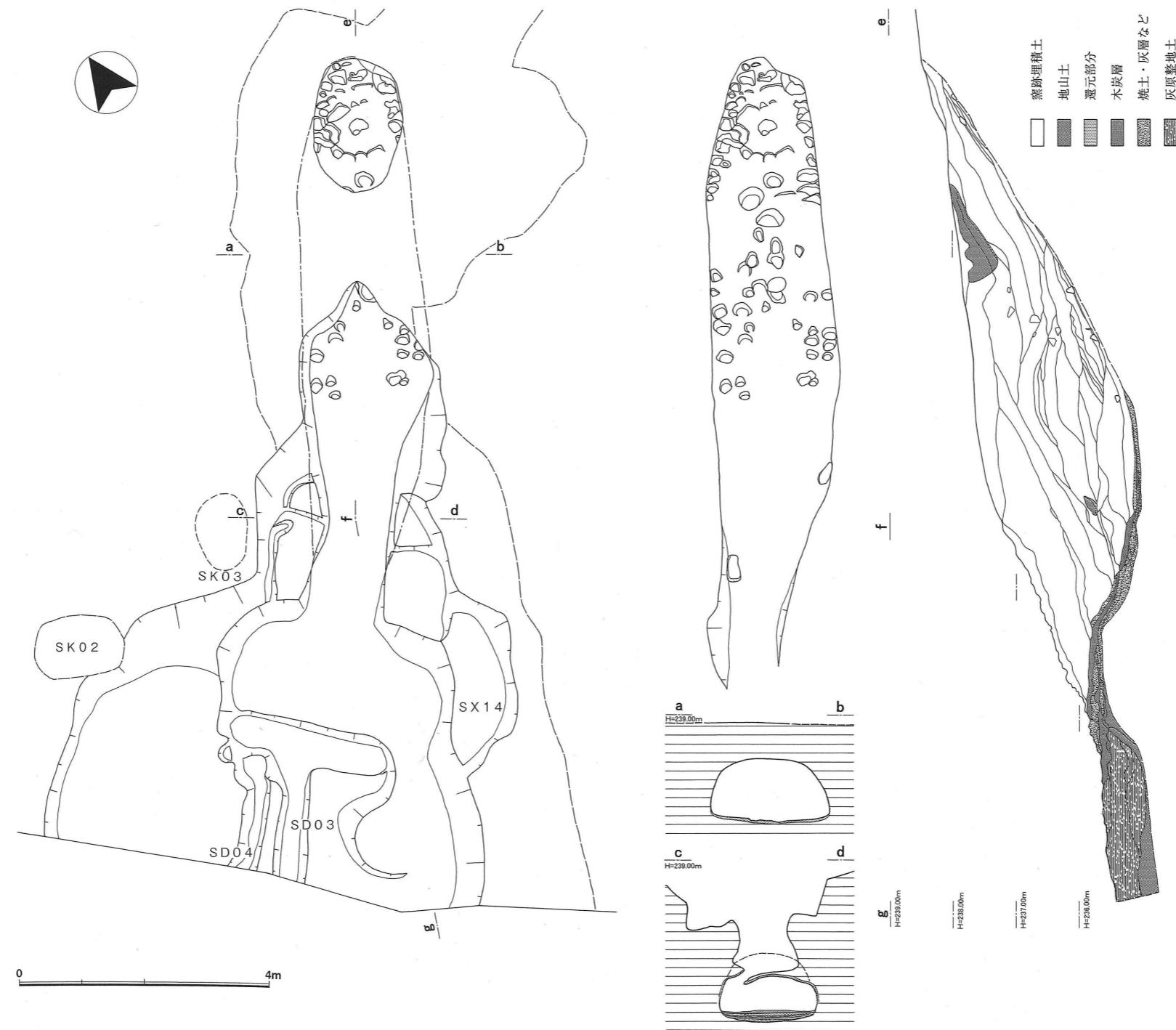
(濃い網目は土層観察用セクションベルト、薄い網目は百分割グリットによる遺物取り上げ部分を示す。)

して急速に幅を狭めて焚口部に移行している。焼成部は燃焼部との境界から煙道部に向かって幅が次第に狭くなっているが、幅の遞減率はきわめて緩やかであり、煙道側の手前1m付近で西側縁辺がわずかに屈曲してやや急に幅を減じている。窯尻平面はU字状を呈している。窯体の規模は、長さ約9.0m、幅は窯尻で約1.2m、中央部で約2.0m、焚口部で約1.0mである。高さは天井部の残存している部分で約1.0mである。その他の部分は、窯尻で約80cm、焚口部で約90cmと推定される。主軸はN33°Eで、焼成部床面の傾斜は北半がやや急で約31°、南半が約27°である。煙道は残存していないが、北端で床面の傾斜が一層急になっており、煙道北壁の始まり部分と推定される。

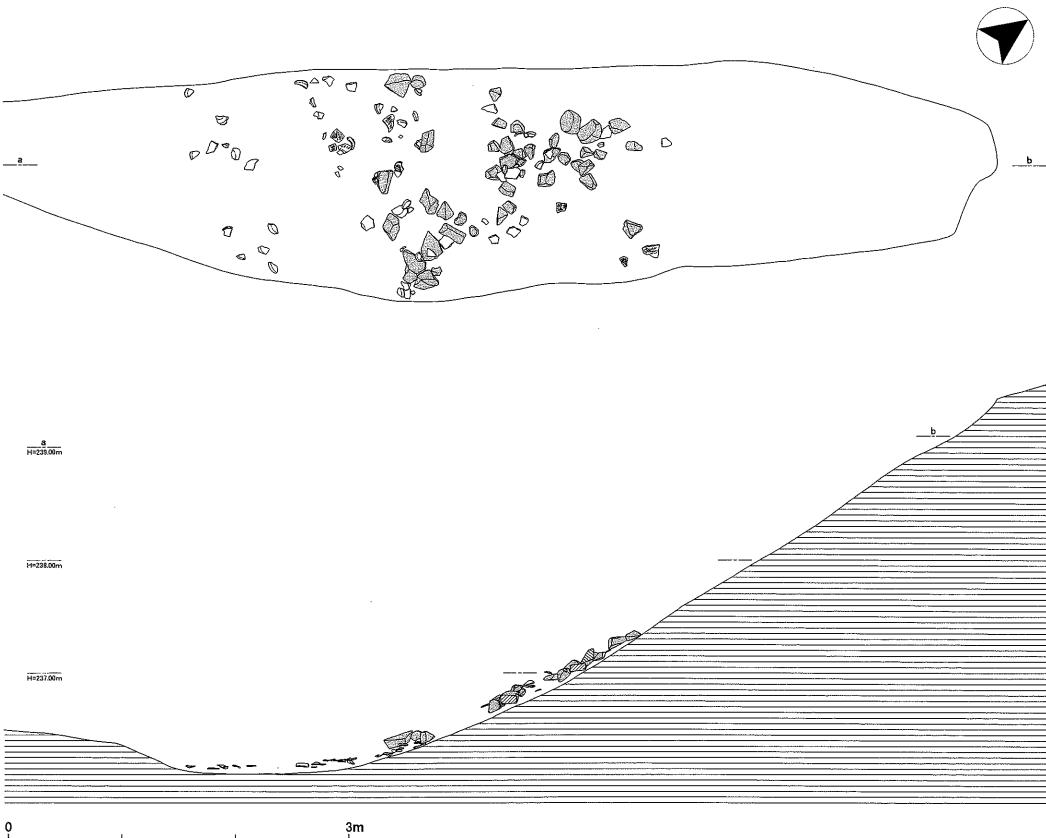
焼成床面には、1号焼成窯跡と同様に、幅20~30cmの半円形あるいは円形の小平坦面が多数作り出されている。中央部はやや希薄で、上部および下部に密集している。下部の平坦面の分布は中央部に空白部を有するが、上端部は横一列に並んでおり、全体として逆U字状の分布を示す。左右壁沿いの平坦面の分布について見ると、ほぼ2列縦隊に配列されている。中央部の分布は中央に集中しており、壁面側では掘削が認められない。幅40cm程度のやや大型の平坦面を混じえている。上部の平坦面の分布は両側の壁面沿いに集中しており、同時に主軸に直交して直線的に配置された部分も3列程度認められる。この平坦面にはめ込まれるように長さ10~15cmの礫が置かれた状態を2ヶ所で検出しており、礫は上面が水平であった。主軸に直交して直線的に配置されている平坦面については棚状の施設が設けられていた可能性が高い。

燃焼部床面は主軸方向にわずかに湾曲しているが、ほぼ水平である。1号焼成窯跡と異なり、焚口部の作り出しが明確ではないため、焼成部と焚口部の境界を見定めにくいか、床面縦断面を見ると、焚口に向かって次第に傾斜を増し、焚口の約1.6m手前付近から傾斜を増して焚口へと至っている。床面縦断面を詳細に見ると、前述した床面の傾斜が変化する部分の奥側（焼成部側）にわずかな高まりが認められ、この高まり付近から徐々に焚口に向かって傾斜を増している。この床面のわずかな高まりは焚口両側に構築された作業平坦面の2段目と1段目の境界にほぼ一致しており、この高まりを燃焼部と焚口部の境界と見ておきたい。この想定に基づくと、各部の長さは焼成部5.4m、燃焼部2.4m、焚口部1.2mの規模である。

窯体の最終操業面上には、須恵器片、礫が多数残されていた（第37図）。須恵器片は焼成部下半部～燃焼部を中心に分布している。蓋坏、高坏など小型器種を主体としており、甕、壺などの破片は焼成部側を中心に分布していた。礫は焼成部下部に集中的に分布しており、原位置を大きく移動していないものと思われる。長さ20~30cm程度の角礫、亜角礫を主体



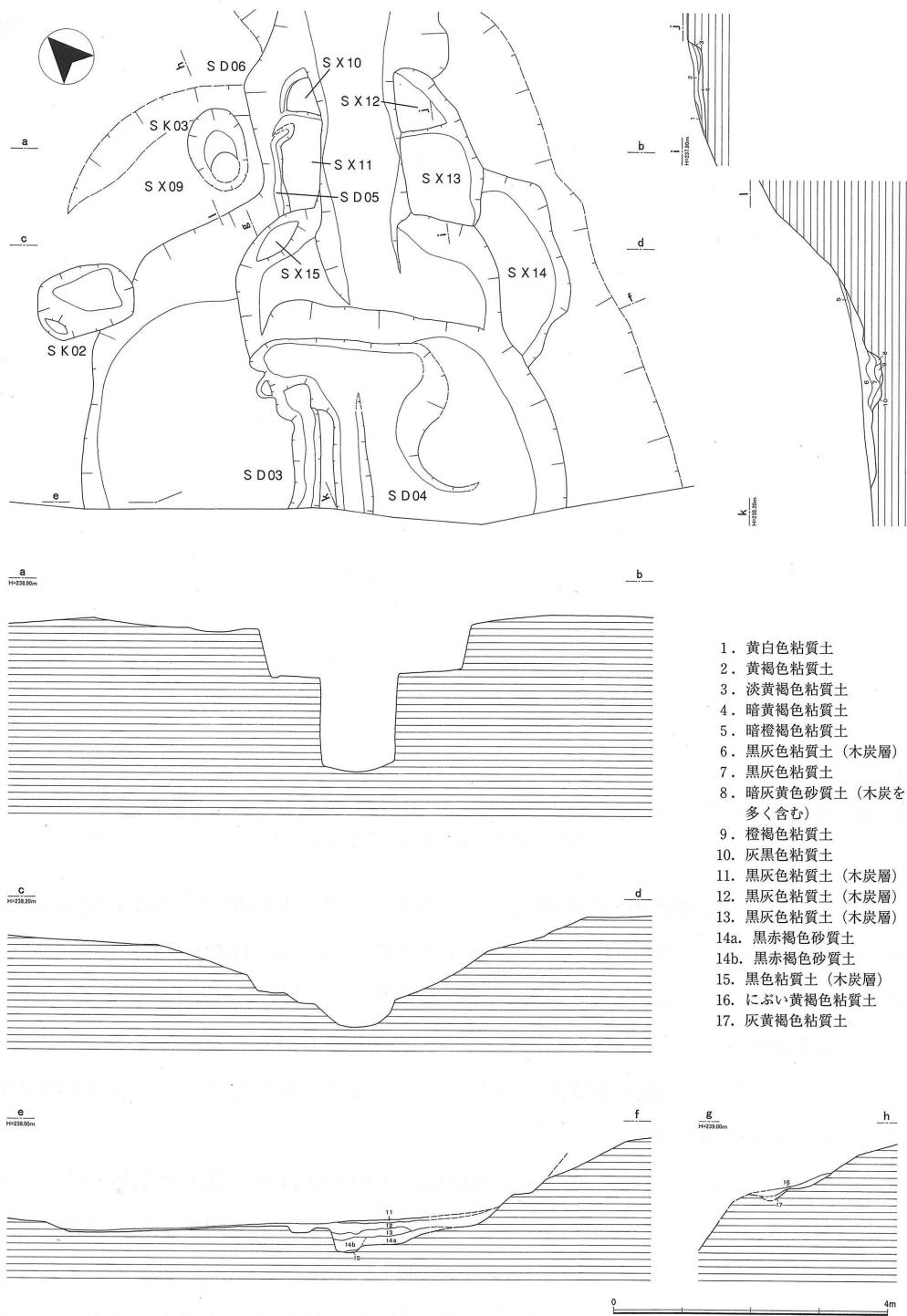
第36図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03実測図
(平面図は調査終了時の状態を示す。)



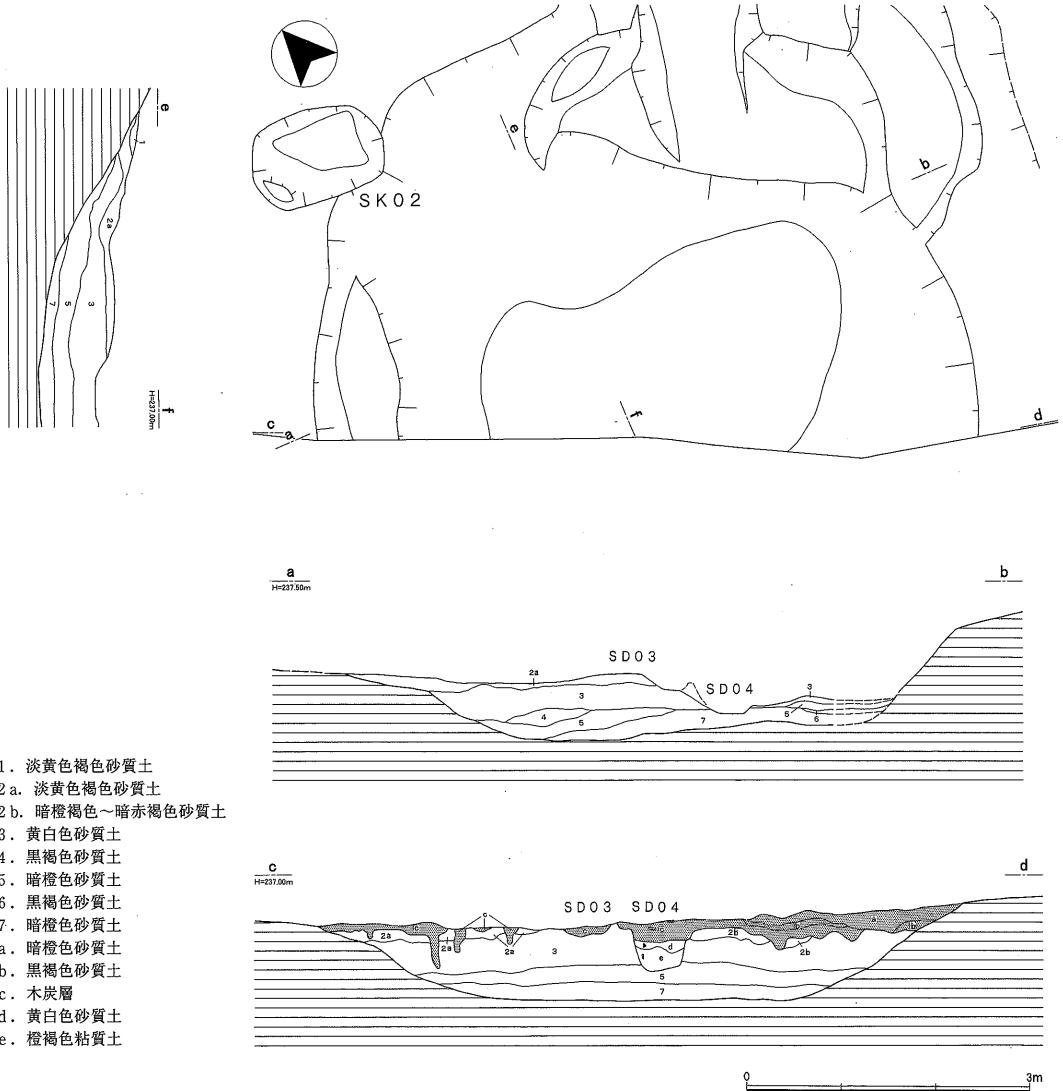
第37図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03焼成部・燃焼部最終操業面遺物出土状況実測図
(白抜きは須恵器、網目は礫を示す。)

としており、長さ10cm前後の小型の礫も一定量含んでいる。平面的な分布から見ると大きく3群に区分できそうで、下段のグループは窯体を横切るようにはほぼ直線的に位置している。中央のグループは長さ15cm前後のやや小型品を主体としており、窯体の西側約2/3程度のあたりに直線的に分布している。上段のグループは中央のグループに接するように窯体中央付近に固まっている。前2者は半月形小平坦面の項でも述べたように、棚状の平坦面を形成していた可能性がある。

窯体の概要で述べたように、焚口部～燃焼部の平面形状は焚口部との境界付近の燃焼部から急速に狭まっており、床面両端のラインは平行ではない。焚口部から前庭部の床面は連続しているが、焚口に接する長さ1.4m分は周囲より低く、溝状を呈している。床面両端はほぼ平行しており、幅約80cmである。焚口部床面にはスサ入りの青灰色粘土の堆積が認められ、焚口部の封鎖などに利用された可能性がある。

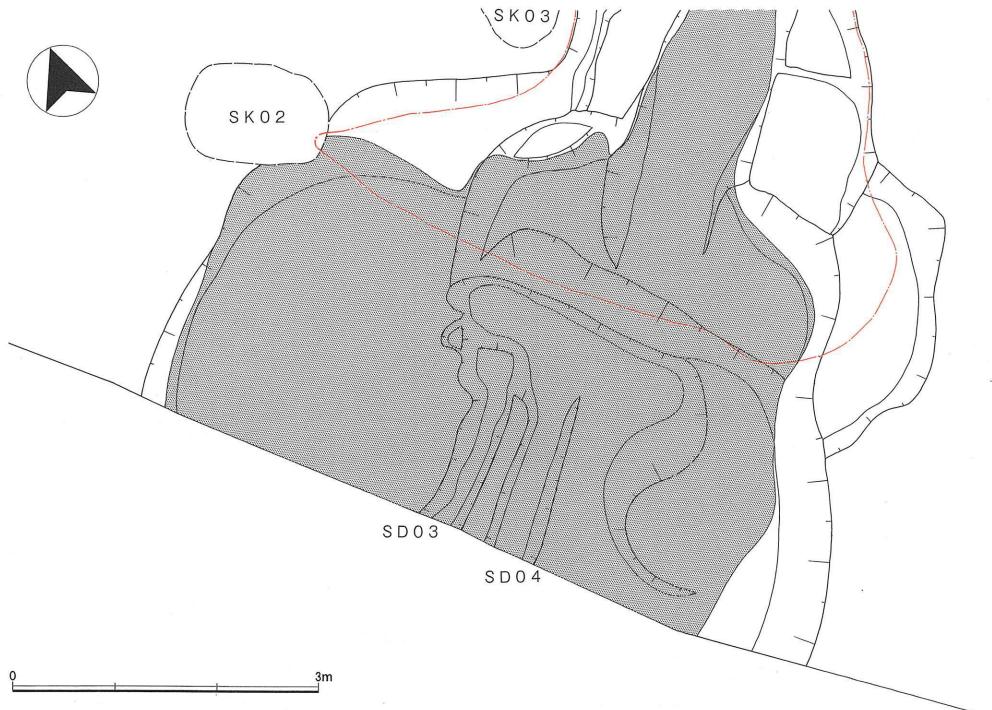


第38図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03 焚口部・前庭部実測図



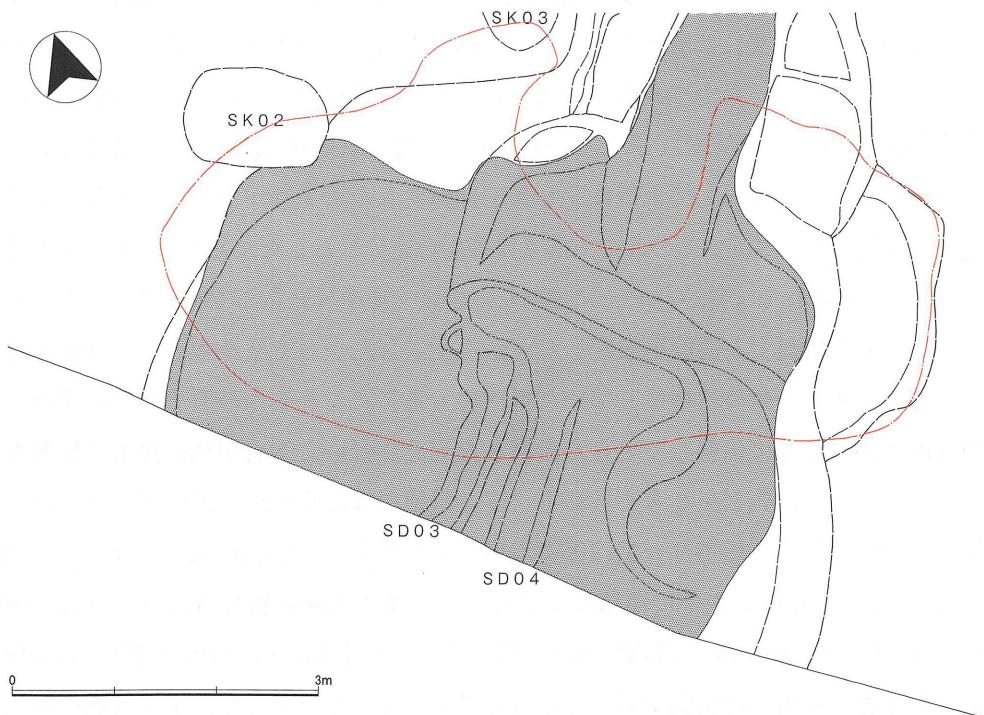
第39図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03 前庭部堀り方実測図

焚口部の左右に作業平坦面（以下、平坦面と略す）が付設されている（第38図 S X10～13）。左右の平坦面が連続していた可能性もあるが、天井部が残存していないため、確認できない（強度の問題から平坦面が連続していた可能性は低いと思われる）。両作業平坦面は地表から掘り込まれており、ほぼ左右対称形で、それぞれ上下2段の構造となっており、上段は1/4円形状である。平面は外側（壁側）が緩やかに弧を描いており、内側は直線的であったものと推定される。東平坦面S X12・13は全長約2.3m、上段S X12の長さ約85



第40図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03 焚口部・前庭部木炭層堆積範囲実測図
(網目は木炭層、赤一点鎖線は3号焼成窯跡埋積土の範囲を示す。)

cm, 幅約60cm, 下段 S X13は長さ約1.4m, 幅約1.0mの規模で, 上下の段差は約15cmである。西平坦面S X10・11は全長約1.9m, 上段 S X10は長さ約50cm, 幅約60cm, 下段 S X11は長さ約1.4m, 幅約85cmの規模で, 上下の段差は約15cmである。西平坦面についてはもう少し規模が大きかった可能性があるが, わずかに東側に広がる程度であり, いずれにしても東平坦面の方がやや規模が大きかったものと思われる。西平坦面上・下段の壁面沿いに溝が掘り込まれていており, 南端(前庭部側)は開いている。排水用の可能性はあるが, 東平坦面には認められず, 疑問を残す。上段の溝の幅は10cm, 下段の溝に幅は20cmの規模の規模である。東西平坦面床面上には木炭層が堆積しており, 西平坦面では薄い間層を挟んで2枚に細分できることから燃焼部～焚口部の2枚の還元層に対応するものと考えられる。これらの作業平坦面は1号焼成窯跡の前庭部の東西に対称形に設置された作業平坦面に対応する可能性があるが, 1号焼成窯跡では焚口に接する前庭部に位置しており, 3号焼成窯跡では窓体内を直接望むことができない焚口部～燃焼部に位置することから, 性格を異にする可能性もある。



**第41図 陣ヶ平西遺跡 1号・3号須恵器焼成窯跡 S Y01・03 木炭層堆積範囲実測図
(赤一点鎖線は1号焼成窯跡、網目は3号焼成窯跡の木炭層の堆積範囲を示す。)**

東作業平坦面に接して南側に伸びる平坦面S X14、西作業平坦面の南に接して小規模な平坦面S X15が作り出されている。平坦面S X14は斜面を掘削して南北に長い平坦面を作り出しており、南および西に向かって緩やかに傾斜する。やはりなんらかの作業場と推定される。長さ約2.4m、幅約80cmの規模である。平坦面S X15は凸レンズ状の平面形状を呈し、長さ80cm、幅20cmの小規模な平坦面である。焚口西側の前庭部掘り方壁面の途中に位置しており、西作業平坦面への階段として設置されていたものと思われる。

前庭部は、焚口に接する平坦部とこの平坦部に後続する一段低い広い平坦部の大きく2つの区域に区分される。前者は燃焼部から続く床面の延長に形成されており、中央の幅約1.2mの溝状部分とその左右（東西）に位置する幅1.5m前後の不正形平坦面で構成される。他の2基の窯跡に比べて小規模で、長さ約1.9m、幅約3.3mの規模である。左右の平坦面は工人が操業中に燃料を供給するなどの作業を行うための場所と思われる。

後者の一段低い平坦面は斜面部を一旦大きく摺り鉢状に掘削し、50～60cmの厚さで砂質土を全体に堆積させて整地し（第39図）、ほぼ平坦な面を形成している（第38図）。掘り方

の規模は、調査範囲内で東西7.2m、南北3.0mで、当時の地表面から約1.3mの深さまで掘り込んでいる。中央部には溝2条（S D03・04）が掘削されており、溝の主軸と焚口部の主軸はほぼ一致している。2条の溝の切り合い関係は明確ではないが、4号溝S D04の床面が3号溝S D03より高く、北端部で段差をもって途切れる状況にあることなどから、4号溝が先行し、そのご近接して東側に3号溝が掘削された可能性がある。しかし、4号溝は砂質土に直接掘削されているのみで、排水の機能を充分果たしたかどうかは疑問が残る。それに対し、3号溝はまず深さ約40cmに掘削し、粘質土を充分詰込んで床面を形成していることから排水を主体とする機能を想定してよからう。したがって2条の溝は用途が異なっている可能性もあり、同時に機能していた可能性もある。こうした砂質土による整地や溝の構築は前庭部が谷部に位置しているため排水を充分に行い、水分が窯の操業に影響を与えないようにするための工夫と考えられる。溝の西側には広く平坦面が形成されている。

前庭部のほぼ全体に燃焼部～焚口部に堆積していた木炭層が広がっており（第40図網目部分）、3号・4号溝を完全に埋積していた。3号焼成窯跡廃絶後の埋積土（第40図一点鎖線部分）は焚口の南側の一段高い前庭部付近まで、1号焼成窯跡の操業初期には前庭部の大半は木炭層が露出した状態であったものと思われる。したがって、1号焼成窯跡第1操業期で排出され、灰原に堆積した木炭層（第41図一点鎖線部分）の南半部は3号焼成窯跡前庭部の木炭層の上に直接堆積する状況であった（第9図縦断面図）。

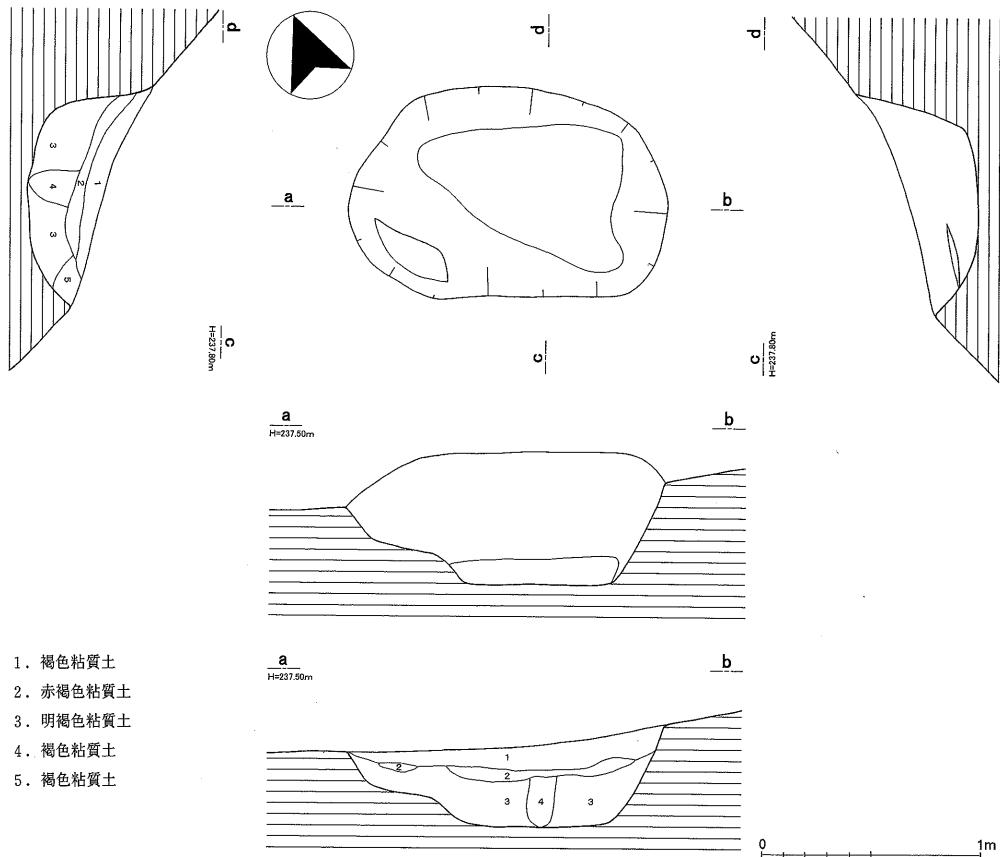
前庭部北西端に接して2号土坑SK02（第42図）が構築されている。前庭部と切り合い関係を持つが、調査段階では十分前後関係を確認していない。調査所見では土坑が前庭部を切っているとしているが、重複部分がわずかであり、前庭部に広がる木炭層もこの付近ではきわめて薄くなっている。構築期に時間差を持つのは間違いかろうが、1号焼成窯跡起源の木炭層に覆われていることから、3号焼成窯跡とほぼ同時に存在した遺構と想定される。平面橢円形を呈し、長径約1.5m、短径約95cm、深さ約60cmの規模を持つ。埋土は4枚に区分でき、褐色系の粘質土を主体とし、埋土上部に焼土層（断面図2層）が広く堆積していた。壁面は焼けておらず、焼成窯内から排出されたものであろう。出土遺物は須恵器碎片が若干出土しているのみである。

（藤野次史）

2) 出土遺物

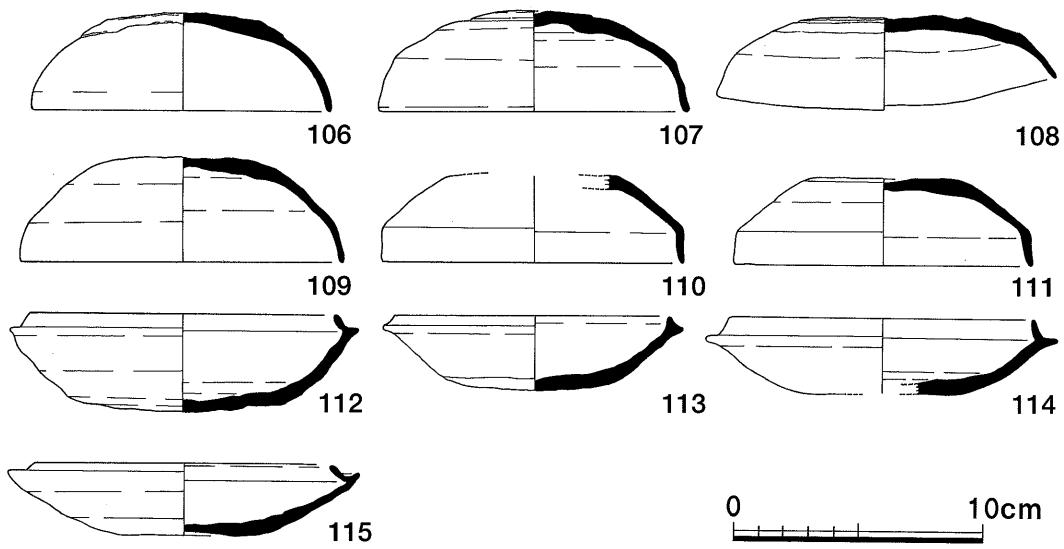
出土の須恵器は、窯体部、前庭部から多数出土しており、窯体床面上にもかなりの個体が残されていた。器種には、蓋壺、高壺、壺、甕、大甕、横瓶などがある。1号焼成窯跡同様、窯体出土須恵器は高杯の割合が高い。

蓋壺（第43図106～115）　壺蓋、杯身は完形に復元される個体は少ない。壺蓋（106～



第42図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03・2号土坑 S K02実測図

111) は土饅頭形を呈したもの (106), 体部に緩やかな稜を持つもの (107~109) と明瞭に稜を持つもの (110・111) とがある。1号焼成窯跡で見られた口径10~11cm程度の小型品は見られない。106は土饅頭形を呈し, 天井部から口縁部まで緩やかに湾曲して, 口縁端部は垂下している。天井部は回転ヘラ切り未調整で, 粘土が天井部から大きく外側にはみ出している。中央付近はヘラでナデたような痕跡が粗雑に残る。107は天井部と口縁部の境に緩やかな稜を形成する。口縁端部はわずかに外反し, 丸く収める。天井部は回転ヘラ切り痕が明瞭に残っている。それ以外は回転ナデ調整である。天井部内面は不定方向のナデ調整により仕上げている。108は焼成時大きく歪んでいるが, 天井部と口縁部の境に緩やかな稜を形成する。口縁端部の器壁は薄くなっている。天井部は回転ヘラ切り未調整である。天井部内面は不定方向の仕上げナデを施している。109は天井部と口縁部の境に



第43図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S.Y.03 出土須恵器実測図（1）

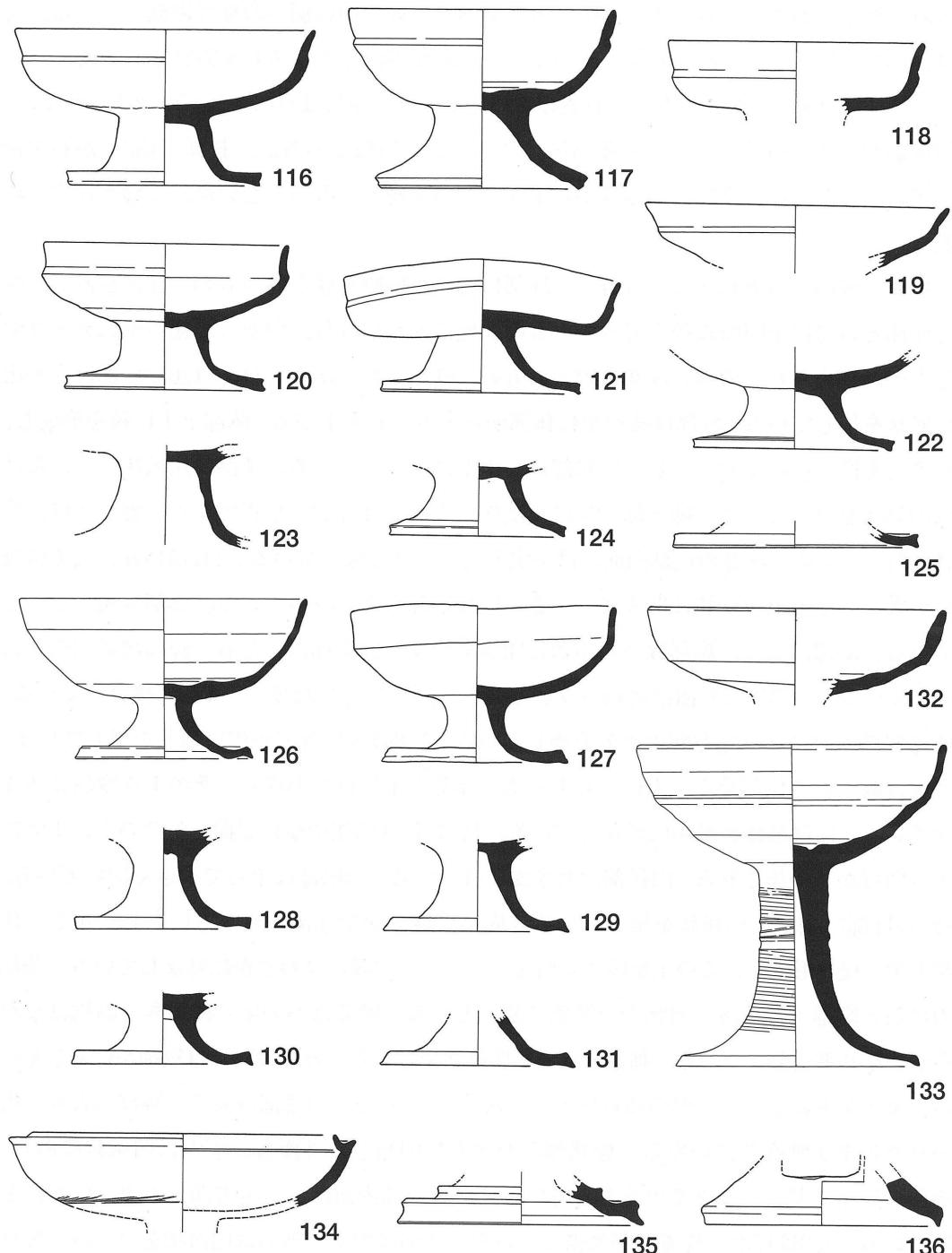
緩やかな稜を形成する。口縁部はわずかに外傾している。器壁は比較的薄く均一である。天井部はヘラ切り未調整であるが、若干ナデ調整で仕上げている。天井部内面は不定方向のナデ調整を施している。110・111は天井部と口縁部の境に明瞭に稜を形成する。天井部は比較的平坦で体部も直線的である。口縁部は短くほぼ垂直に下がり、口縁端部はわずかに外に向いている。天井部は回転ヘラ切り未調整である。111の天井部内面はヨコナデ調整後不定方向のナデ調整が施されている。

坏身（112～115）底の浅いものと深いものがある。1号須恵器焼成窯跡に比較して、立ち上がりの高いものが多い。112は底径がやや大きく、底部と体部との境は大きく内湾して立ち上がる。立ち上がりは受部端部より上に内傾しながら突き出ている。受け部端部は外を向いており、受け部凹部はほとんど凹んでいない。底部は回転ヘラ切り未調整、底部内面は不定方向のナデで仕上げている。113の底部はほぼ平坦で体部は直線的である。立ち上がりはほぼ上方を向いており、受け部端部はほぼ水平に外側を向いている。受け部は弧状を呈し、凹みは全く形成していない。底部内面の中央は凹むように指押さえにより整えている。114の底部はほぼ平坦である。やや浅く、大きく開いて受け部にいたる。立ち上がりは内傾しているが外反して上方を向いている。受け部よりも上に出ている。受け部端部はほぼ水平に外側を向いており、凹みは形成していない。底部はヘラ切り未調整であるが、若干のナデ調整で仕上げている。115は非常に扁平な坏身である。体部から口縁部にかけて

は薄い作りである。立ち上がりは折り返しており、直線的に深い角度で内傾している。受け部外面は湾曲し、端部は外側を向いている。底部外面をヘラ切り未調整である。

高坏（第44図） 無蓋のものと有蓋のものとがある。脚部は短脚と長脚が認められるが、短脚が大多数を占めている。無蓋高坏はほとんどが短脚であるが、長脚（133）がわずかに認められる。有蓋高坏は個体数がわずかで全形を窺えるものがないが、長脚と推定される。

無蓋短脚高坏（第44図116～131） 坏部に段状の明瞭な稜を持つもの、体部が直立気味で底部との境に不明瞭な稜を形成するもの、底部から口縁部に向かって緩やかにカーブするものが認められ、脚部には基部の太いものと細いものがある。116・120の坏部は底が広い皿状を呈している。底部は緩やかに体部から上方に立ち上がる。体部上半に稜を形成し、その上を段状に凹ませている。口縁部はわずかに外反している。基部は比較的太く、脚部は円筒状を呈している。脚下部で急に角度を変え脚裾部は広く平坦である。脚端部は凹線状に凹んでいる。坏部の底部内面には不定方向のナデを施している。117は口縁部近くに稜を形成し、その上を段状に凹ませている。口縁端部は丸く収めている。体部は塊形を呈している。基部は太く、脚部はハの字状に開きそのまま脚端部にいたる。脚端部は凹線状に凹んでいる。坏部底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整を施した後に、脚部と接合している。坏部底部内面には不定方向のナデを施している。118の坏部は底が広い皿状を呈している。底部は緩やかで体部から上方に立ち上がる。体部上半に稜を形成し、その上を段状に凹ませている。口縁部はわずかに外反している。119の体部は緩やかに屈曲し、その上にナデによる凹線が1条施される。口縁部はわずかに外反する。口縁部は歪んで大きく開いている。121の坏部は底が広い皿状を呈している。底部は緩やかで体部から上方に立ち上がる。体部上半に稜を形成し、その上を段状に凹ませている。口縁部はわずかに外反している。基部の坏部と脚部は接合後、回転ナデ調整を施している。脚部はハの字状に開き、脚裾はなだらかになり脚端部にいたる。脚端部は浅い凹線状を呈する。脚部外面に自然釉が付着している。焼き歪みにより、坏部の周辺は垂れ下がっている。122の基部は太く、脚部は大きく広がりそのまま脚端部にいたる。脚端部はわずかに内傾し、外面もわずかに凹線状に凹む。脚部の器壁は薄く、脚端部の高さも低い。坏部の底部内面は、一定方向のナデ調整で仕上げている。123は坏部と脚端部が欠損している。基部は太く、脚部は円筒状を呈する。脚部内面は粘土紐の積み上げ痕がよく観察できる。坏部の底部内面は、不定方向のナデ調整で仕上げている。124の脚部は、基部から大きくハの字状に開き、脚端部にいたる。脚裾部で小さな稜を形成している。脚端部は凹線状に凹んでいる。底部内面は、上から見て時計回



第44図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03 出土須恵器実測図 (2)

りの粘土紐痕が明瞭に見える。125は脚端部片である。脚端部外面は凹線状に凹んでいる。126は体部の上半に弱い稜を形成し、口縁部は外反して立ち上がる。体部下半は大きく湾曲し基部にいたる。坏部の底部外面は回転ヘラ削り調整後、ナデ調整をし、脚部と接合している。基部は細い。脚部は大きくハの字状に開き、脚裾部は垂れ下がり脚端部にいたる。脚端部上側はナデにより面取りされ、外面はわずかに凹んでいる。脚端部の高さは低い。坏部の底部内面は、不定方向のナデ調整が施されている。127は体部の中ほどで稜を形成し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。坏部の底部外面は回転ヘラ削り調整後ややナデ調整をしている。その後、脚部を接合している。基部径は2.8cmと細い。脚部は大きく湾曲し脚裾部でなだらかになり脚端部にいたる。脚端部は外面を凹ませ、下方にやや垂下させる。脚端部の高さは低い。坏部底部内面は不定方向のナデ調整を施している。焼成は良好だが、特に坏部が歪んでいる。128～131の脚部は、ハの字に緩やかに開き、脚裾部でややなだらかになり脚端部にいたる。脚端部は内傾するもの（128）と外傾するもの（129～131）とがある。脚端部の高さは低い。131は坏部底部内面が残存しており、上から見て時計回りの粘土紐痕が明瞭に見える。132は坏部の回転ヘラ削り調整の範囲が広く、器壁は厚い。口縁部はやや外反し端部を丸く収める。

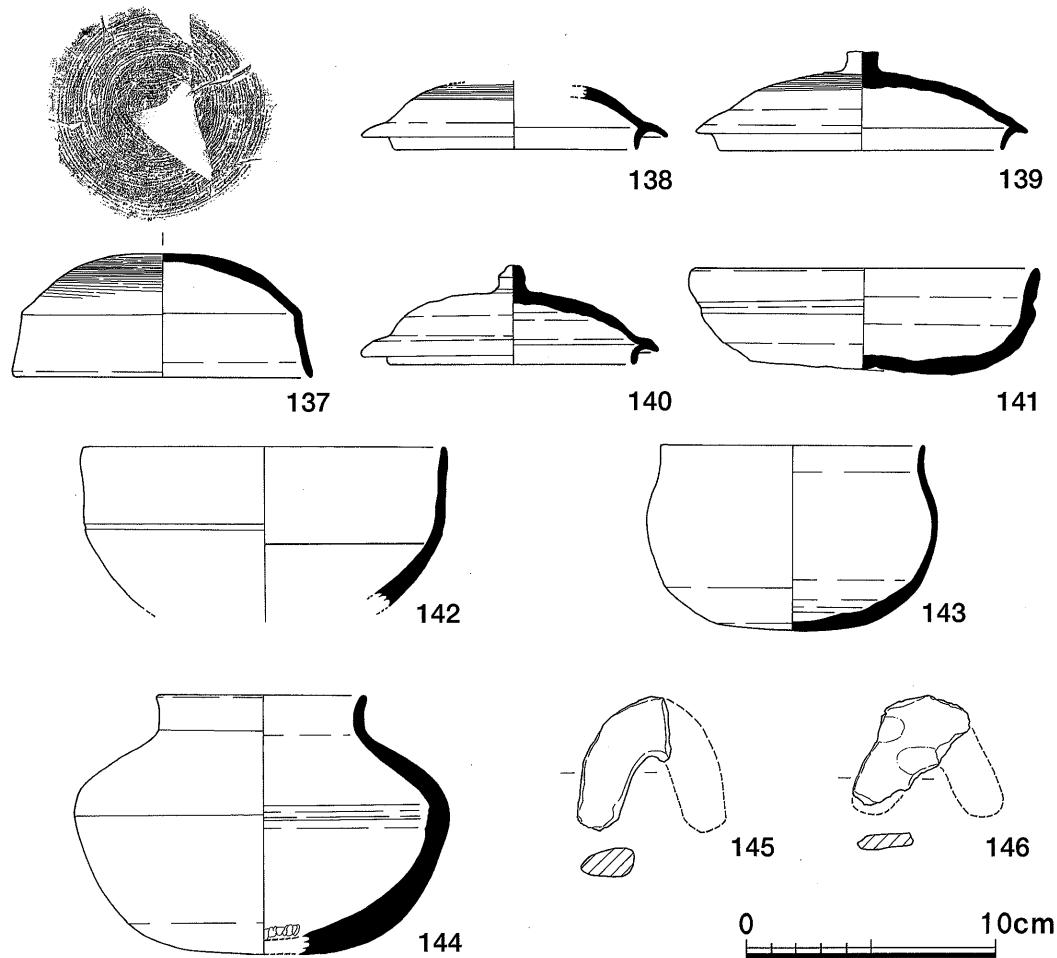
無蓋長脚高坏（第44図133） 坏部は半球状を呈し、口縁端部は丸く収めている。底部は厚く、口縁部は比較的薄く作出している。内外面ともに回転ヨコナデ調整で、調整時の強いナデ痕が残っている。脚部は円筒状を呈しており、脚裾付近で大きく湾曲して脚端部にいたる。脚端部は斜めで、下方にわずかに突き出している。基部は非常に厚く、脚裾部あたりから薄く仕上げている。脚部中ほどに粗雑な沈線が4、5本めぐる。調整は全体的に丁寧な回転ヨコナデである。脚内面にはしづりの痕跡が見られる。

有蓋長脚高坏（第42図134） 底が浅い、皿状の坏部である。立ち上りは内傾し、内面は調整により稜を形成している。立ち上りは受け部よりも少し出している。受け部は短く斜め上方に突き出している。端部は尖り気味である。受け部の凹みは浅い。底部と体部の境付近には、細い搔き目が渦巻き状に一周施文されている。

脚部（第44図135・136） 135は脚裾部が2段になっているものである。2段目端部はやや鋭角な角を形成し、湾曲して凹みをつくり、1段目脚端部にいたる。脚端部は強く湾曲し凹んでいる。脚端部下は斜め下に張り出している。丁寧に成形されている。内外面、すべて回転ヨコナデ調整である。136は脚部である。脚裾部はハの字に開き、そのまま脚端部にいたる。脚端部は内傾し、下部は垂下している。内面にはヨコナデ調整時に稜が形成されている。また、透かし孔があり、切り取りは粗雑で、角をきちんと合わせて切り取

つていなかつたり、側辺と底辺を一気に切り取つたりしている。さらに切り取つたあと、切り取り面を内面側にナデで調整している。

蓋（第45図137～140） 壺などの蓋と考えられるものがあり、つまみのないもの、円筒状あるいは宝珠状の小さなつまみを持つものがある。137の口縁部はわずかに外反し、天井部との境は屈折し明瞭な稜をもつ。天井部は同心円状に搔き目調整を施した後、中央部には不定方向の搔き目調整を施している。搔き目調整は明瞭で、138や139の搔き目調整と比べ深く施している。内面天井部は回転ナデ調整後、不定方向ナデ調整が施されている。対応する坏身がないことから、短頸壺などの蓋と考えられる。138、139、140はつまみ付き蓋である。全体的に薄手で丁寧な作りである。対応する坏身がなく、壺などの蓋と考えられ



第45図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03 出土須恵器実測図（3）

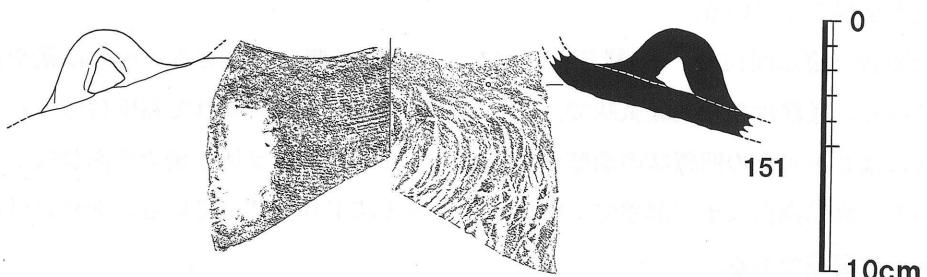
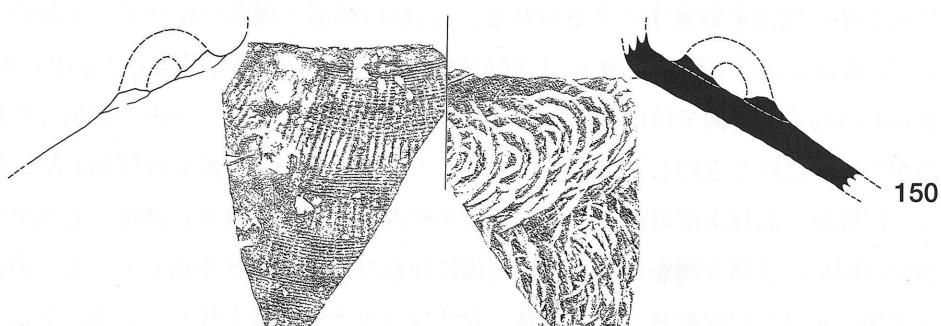
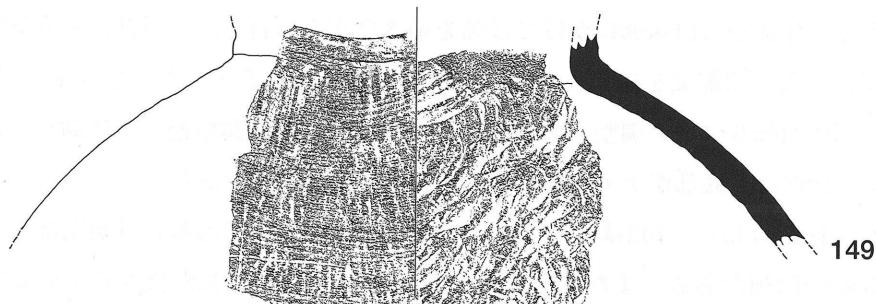
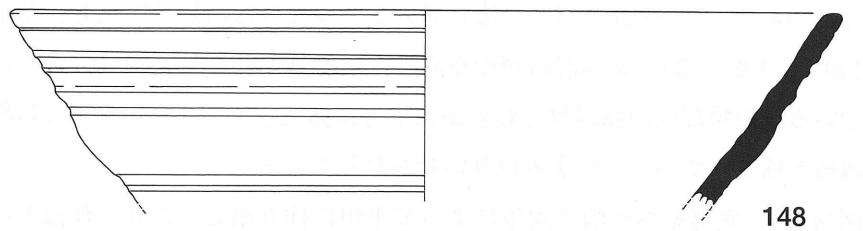
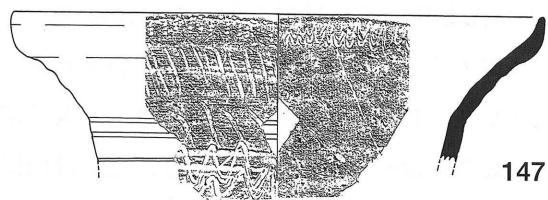
る。138は口縁部から返りの断面形状が三日月形を呈し、口縁端部と返り端部は尖り気味である。天井部は緩やかな形状をし、口縁部寄りに緩やかな段を形成している。天井部の約1/3に搔き目調整を施している。139は、138よりやや大きい。天井部から口縁部にかけて緩やかな段が見られる。口縁端部はやや斜め下方を向き、返りは口縁部内面に外湾するように貼り付けている。内外面は丁寧な調整を施しているが、内面には粘土の凹凸が明瞭に残る。天井部の約1/3に搔き目調整を施している。つまみは円柱状を呈し、頂部は平坦である。140は、138・139と比べ器高がやや高く、口縁部と体部との境は大きく内湾し段状を呈している。口縁部は口縁端部でわずかに下方に湾曲している。天井部には粗雑で浅い搔き目調整が施されている。つまみは乳頭状を呈している。

坏（第45図141） 底部をヘラ削り調整によって平坦に作り出しており、体部との区別は明瞭である。体部から口縁部にかけては弧を描きながら移行し、口縁部は直立気味である。口縁下に1条の凹線文を施し、口縁端部は丸く収めているが、やや尖り気味である。口縁部～体部は回転ヨコナデ調整である。外面底部はヘラ削り調整後、ナデ調整により仕上げている。内面は、底部がナデ調整の他は回転ヨコナデ調整である。

鉢（第45図142・143） 142はほぼ垂直に立ち上がる口縁部である。外面胴部中央より下方に幅3mmの凹線がある。また、胴部内面中央に幅0.5mmの沈線が施されている。胴部下～底部にかけては、焼成中破損したためか大きく歪んでいる。復元すると、凹線からほどなく湾曲し始め底部を形成すると思われる。143は口縁部～胴部にかけてはきわめて薄手の作りで、底部に向けて厚さが増す。口縁部は直立気味で、口縁端部は尖り気味である。胴部の膨らみは弱く、外面では口縁部と胴部の境界は不明瞭である。内面では境界部付近で口縁部がわずかに厚さを増し、やや外反している。胴部への移行部分は屈曲し境界は明瞭である。口縁部～胴部上部外面は、回転ヨコナデ調整、胴部は搔き目調整、底部中央の平坦な部分は回転ヘラ削り調整の後、底部全体に回転ヨコナデ調整を施している。内面は口縁部～底部にかけては回転ヨコナデ調整、底部はヨコナデ調整を施している。上部は焼き歪みを起こしている。

短頸壺（第45図144） 口縁部は直立し、端部を外側に反らせる。肩部は緩やかに湾曲している。底部はやや丸底気味で、底部から胴部に向かうにつれて器壁は薄くなる。肩部内面には3～4条の凹線状の調整痕が残る。底部外面はヘラ切り後ナデ調整により仕上げている。底部内面はナデ調整で、中央付近はヘラ状工具で整えている。それ以外は丁寧な回転ナデ調整である。

不明土製品（第45図145・146） 145は片側が欠損しているが、左右対称の馬蹄形を呈



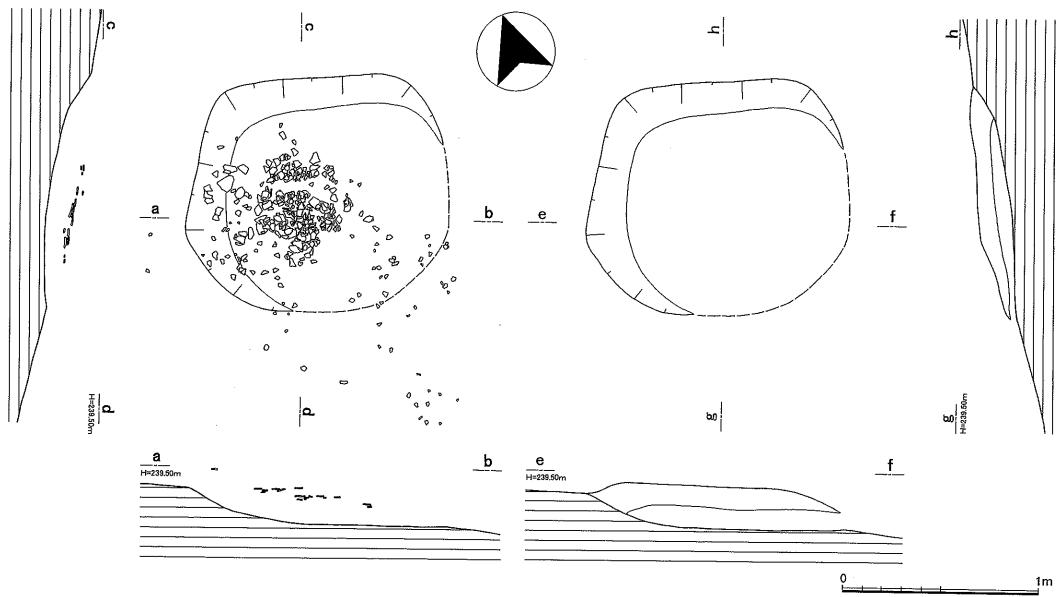
第46図 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡 S Y03 出土須恵器実測図 (4)

すると思われる。断面がレンズ状に膨らむが全体的に扁平である。146は片側が欠損しているが、左右対称のV字形を呈する。扁平である。

甕（第46図147～151） 147は口縁部で、ラッパ状に大きく開き、口縁端部は外側に肥厚させている。肥厚部外面は滑らかな弧を描き、口縁端部は丸く収めているが、先細りである。肥厚部外面上部に櫛歯状工具による刺突文を2～5mm間隔で連続させ、肥厚部下半から口縁部中央部、口縁部下半にヘラ状工具による平行短線文を粗雑に連続させている。口縁端部内面には櫛歯状工具による粗雑な波状文を施している。内外面ともに回転ヨコナデ調整を施している。148は口縁部はハの字状に直線的に開く。大型で口径は33cm、口縁部の高さも残存7.6cmある。内外面ともに回転ヨコナデ調整である。外面に5条の沈線をめぐらすがその太さや間隔は一定でない。口縁端部はやや平坦に仕上げている。外面には自然釉が見られるところもある。149は頸部がすぼまり肩部は球形に開いている。口縁部は頸部より垂直に立ちあがる。外面はタタキ目調整、内面は青海波状文の当て具痕が施され、外面はタタキ目調整後、横位の搔き目調整を施している。また、所々にナデ消しているところもある。器壁は比較的厚い。150は肩部が大きく開き、頸部との境に把手がつく。外面はタタキ目調整の後横位の搔き目が施されている。内面は青海波状文の当て具痕が明瞭である。ちょうど頸部直下には当て具痕が横位に規則正しく連続している。把手は粘土の端部を延ばしながら貼り付けている。151の肩部は150よりもさらに大きく開き、頸部との境に把手がつく。外面タタキ目調整後横位の搔き目調整が施されているが、タタキ目はほとんど消されている。内面は青海波状文の当て具が見られる。把手は粘土紐の両端部を甕に貼り付けて、把手とし粘土を甕器面に延ばして貼り付けている。 (楨林啓介)

3. 1号土坑SK01（第47図）

調査区西端部のB4区に位置し、1号・3号須恵器焼成窯跡の西側の小規模な谷に面する丘陵平坦部東端に立地している。南および東側は谷斜面に面しているため壁面はほとんど削平されている。平面隅丸方形を呈すると推定され、長径1.9m、短径約1.7m、深さ約15cmの規模である。主軸はN69°Wである。埋土は褐色系の粘質土で、埋土上部に多量の須恵器片を包含していた。これらの須恵器片は土坑の西半中央部に集中しており、壁面の削平にともなって斜面下方に流出している。須恵器は上方から土坑内に流れ込んだような状況ではなく、埋土上部の一定レベルに集中して包含されており、土坑がある程度埋没あるいは意図的に埋積した後一括廃棄したような状況である。しかし、これらの須恵器は完形品がその場で潰れた状況ではなく、当初より破片の形で集積されていたものと考えられ



第47図 陣ヶ平西遺跡 1号土坑 S K01実測図

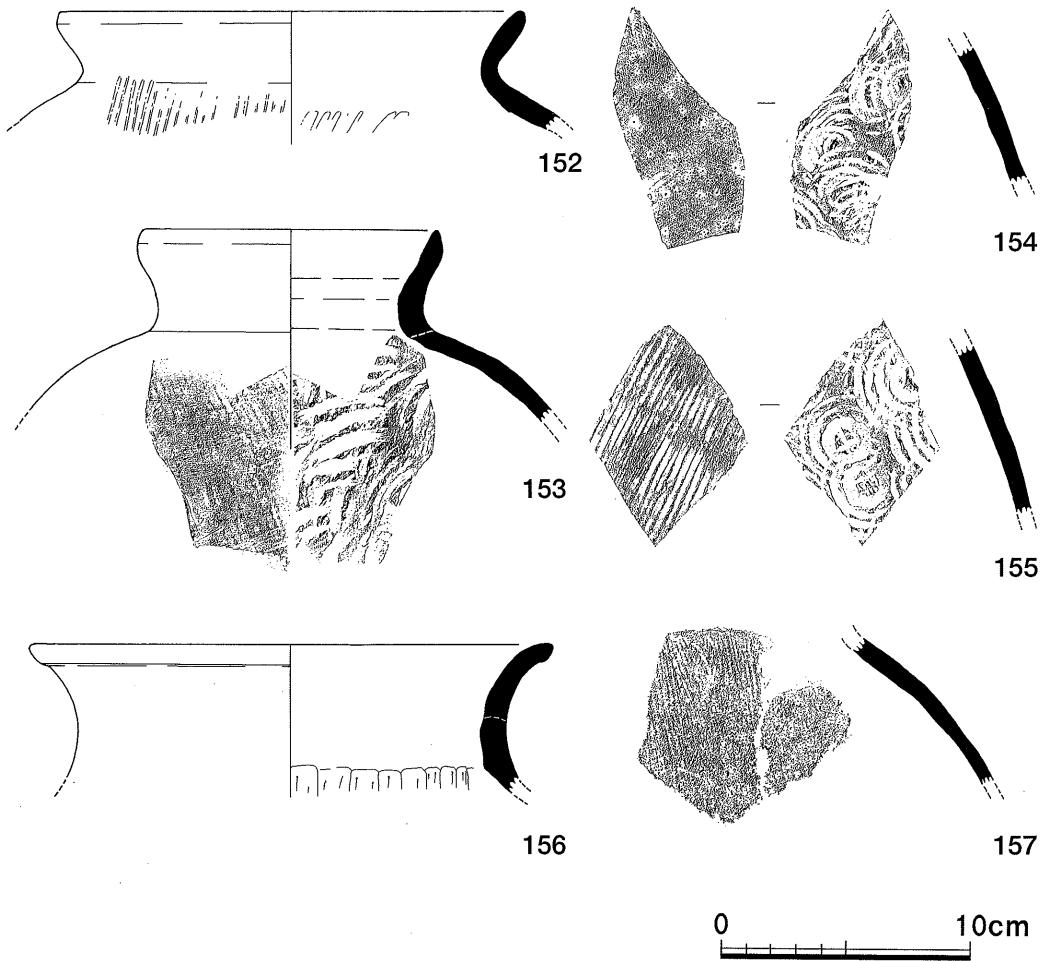
る。

出土の須恵器は小破片で、全形をうかがえるものはない。甕を主体としているものと思われる。図示した資料（第48図152）は頸部がくの字に屈曲し、口縁端部は丸く収めている。口縁部は内外ともヨコナデ調整を施す。頸部下の外面はタタキ目調整、内面は当て具痕が施されている。

なお、この他に本調査地区では遺構に伴わない形で1号・3号焼成窯跡周辺を中心として、須恵器、土師器など古墳時代の遺物が多数出土している。

須恵器（第48図153～155） 1号・3号焼成窯跡で見られた各種の器種の破片を含んでいるが、現状では図示できるものは多くない。

甕・横瓶（第46図153～155） 153の頸部は外湾するが、口唇部は上方を向く。口縁端部は先が尖り氣味に仕上げている。口縁部は内外ともヨコナデ調整で、胴部外面はタタキ目調整の後、粗くナデ消しており、内面は青海波状文の当て具痕が施されている。外面のタタキ目は比較的細かい格子目文である。154は、甕もしくは横瓶の肩部～胴部片である。器壁は比較的薄い。外面はタタキ目調整後、搔き目調整を施している。内面は青海波状文の当て具痕が見られる。155は、甕の胴部片である、外面は粗い平行沈線様のタタキ目調整である。内面は青海波状文の当て具痕が見られる。同心円の中央は十字の文様である。



第48図 陣ヶ平西遺跡1号土坑SK01および本調査地区包含層出土須恵器実測図

土師器（第46図156・157） いずれも小破片で、出土量も多くはない。

甕（第48図156・157） 156の口縁部は直立気味に外反し、口縁端部内面はほぼ水平に開いている。口縁部は、頸部から口縁端部に向けて次第に厚さを減じる。口縁端部外面ではわずかに肥厚し段を形成して、口縁端部はやや尖り気味である。外面にはヨコナデ調整を施す。内面では、口縁部はヨコナデ調整、頸部以下は縦方向のヘラ削り調整を施している。157は肩部片である。外面は縦方向の粗いハケ目調整、内面はヘラ削り調整の後ナデ消している。

4. 集落跡

須恵器焼成窯跡の南側の丘陵斜面裾付近を中心に、同時期の竪穴住居跡が5～10軒程度

存在すると想定される。1989年度調査区第3区から1983年調査区中央付近まで集落が広がっているとすると、東西80~90mの間に住居跡などの遺構が広がっていると想定される。1989年度調査区では竪穴住居跡3軒など、1983年度調査区では住居跡の可能性のある柱穴など（住居状遺構）が検出されている。1989年調査区の住居跡については年報⁽²⁾報告時の遺構番号をそのまま踏襲し、1号～3号住居跡SB01～03とする。また、住居跡に付設の土坑が4基あり、これらについては4号～7号土坑SK04～07と呼称する（年報では2号～5号土坑SK02～05と呼称した）。なお、第1章第3節でも述べたように、1989年度調査区第2区北部は本調査区内に含まれており、1989年度で1号土坑SK01とした遺構付近を精査したが、土坑であることを確認できなかった。したがって、遺構であることを抹消しており、ここで改めて訂正しておきたい。

1) 1号住居跡（第6図SB01）

本調査区のすぐ南側に位置する。北東側の上面プランを検出したのみであり、すぐ南側に松の木があったため遺構面までの掘り下げは一部のみで、全体の形状は不明である。北東端部に張り出し部が認められ、焼土・炭化物が充填されていたことから竈と推定した。住居跡北西半は本調査区の3号焼成窯跡前庭部南端部と重複する可能性がある。仮に3号焼成窯前庭部と重複しなくとも灰原とは確実に重複する位置にあることから、住居跡ではなく、3号焼成窯跡に関連する遺構かもしれない。須恵器が出土している。

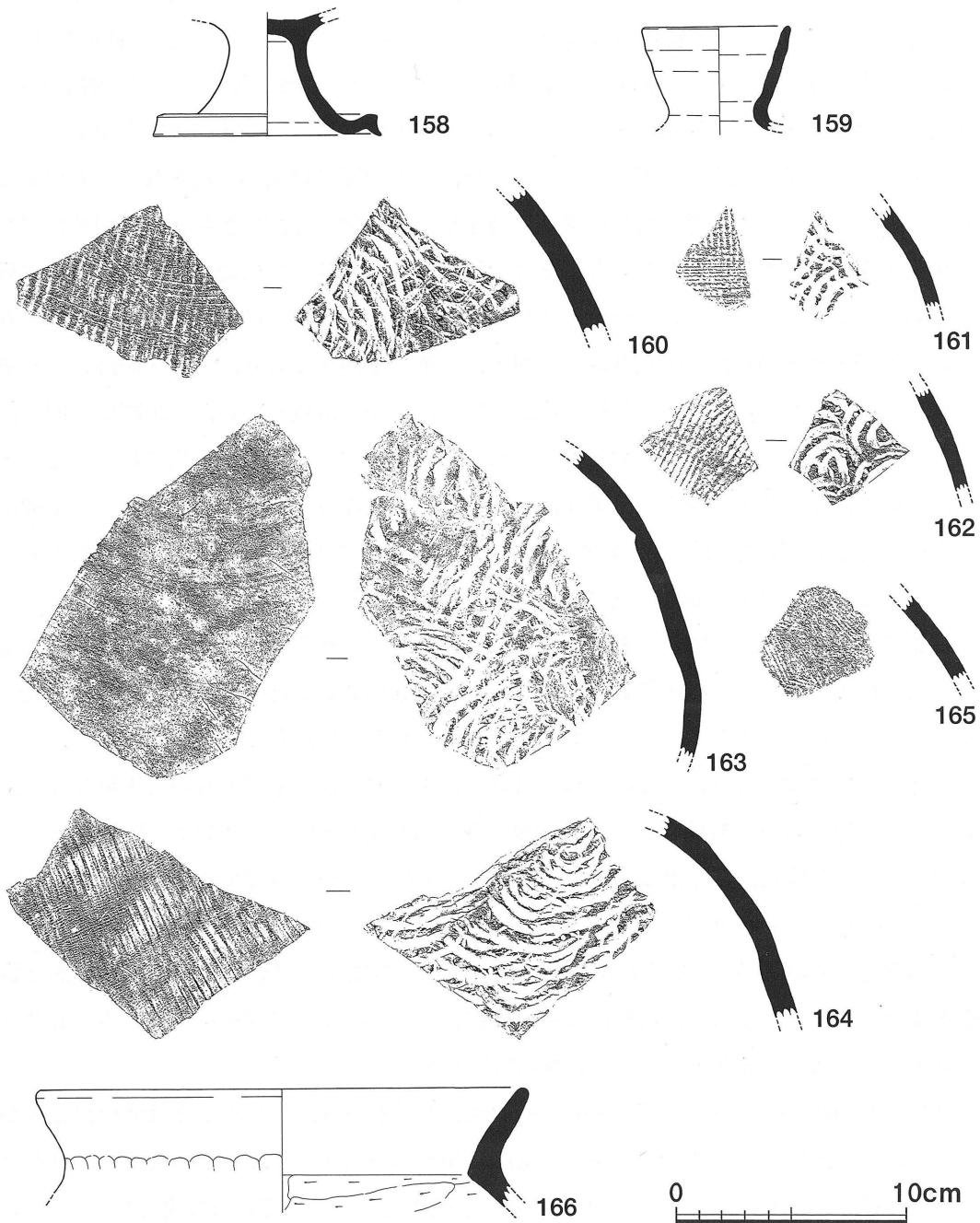
高坏（第49図158）脚部は内外ともに回転ナデ調整で、坏部の見込みは不定方向のナデ調整により仕上げている。脚端部外面はナデ調整によりわずかに凹ませる。

2) 2号住居跡（第6図SB02）

1号住居跡の南西約3mに位置し、斜面上方をL字状に削平して平坦面を作り出している。浅い掘り込みをもつ竪穴住居跡とみられる。掘り込みの壁面にそって幅15cm程度の壁溝を有している。壁溝から西1.5mで柱穴1本を確認した。壁溝から南西側に2.5mほど床面が形成されており、床面の端付近まで住居跡埋土が確認されるが、その西側では緩やかに傾斜して、3号住居跡の掘り方に移行している。4号土坑（第6図SK04）は3号住居跡の煙道である可能性があることから、床面は多少削平されている可能性はあるが、現状幅よりそれ程広がる可能性は少ない。住居跡としては南北方向の長さが狭く、工房などの作業空間であった可能性がある。遺構内からは、須恵器、土師器が出土した。

土師器（第49図165）甕形土器の胴部で、外面は縦方向の粗いハケ目調整、内面はヘラ削り調整を施している。

3) 3号住居跡（第6図SB03）



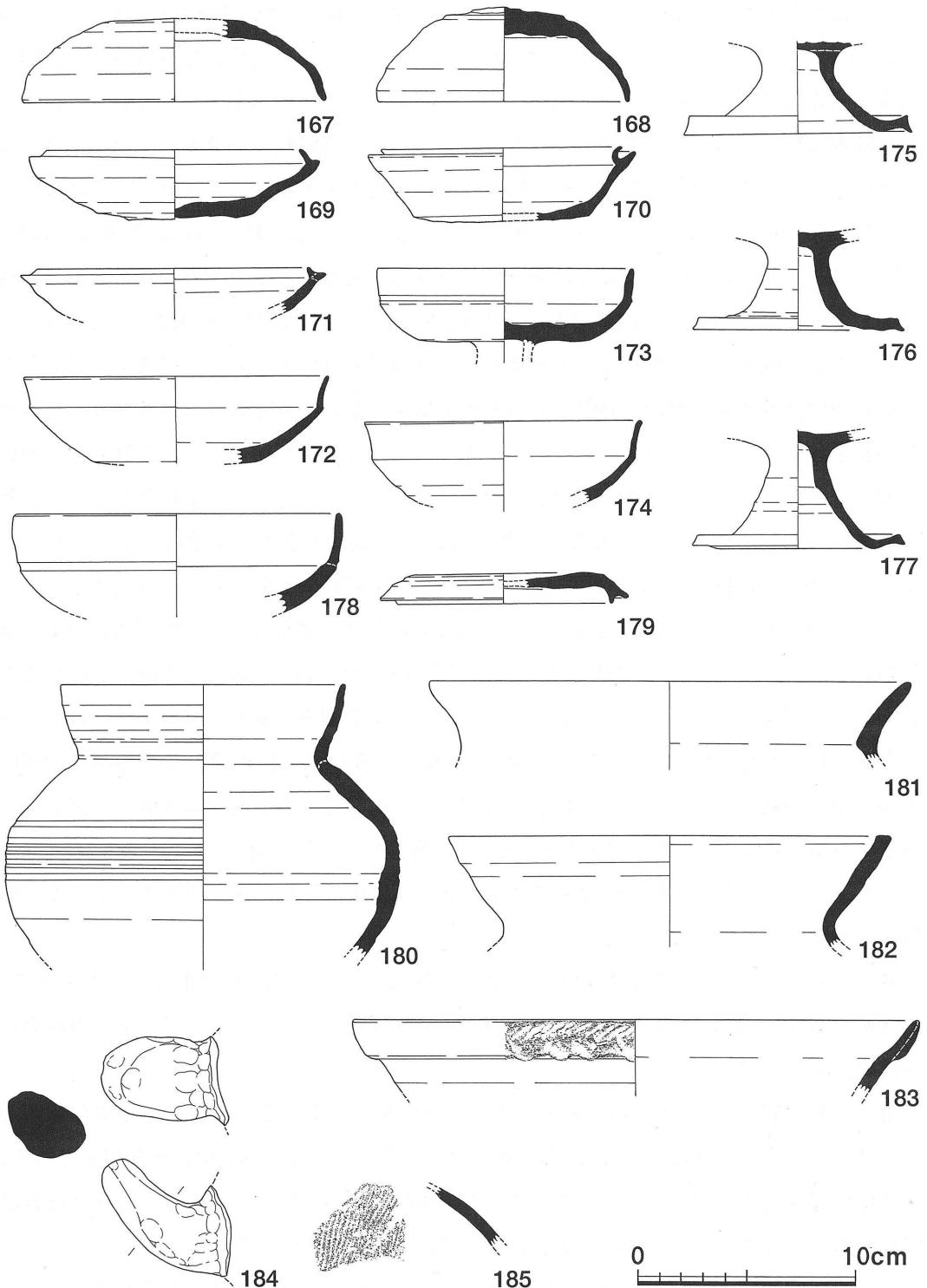
第49図 陣ヶ平西遺跡集落地区出土須恵器実測図（1）

調査区南西端部に位置し、斜面部をL字状に削平して、豎穴住居跡を構築している。北東の壁に沿って幅約15cmの壁溝がめぐっており、北東壁から南西7m付近まで床面は比較的固くしまっており、住居跡埋土も確認されることから、この範囲が住居内と推定される。北東壁に竈を付設しており、竈は約半分を検出したにすぎないが、板石を立てて側壁とし、内面は赤化して明瞭な受熱痕跡を示している。竈内の底部は浅い土坑状の凹みを呈するものとみられ、木炭、焼土が充填されていた。検出した範囲では粘土で巻かれている様子は観察できなかった。住居跡のほぼ中央部に地床炉（第6図SK07）が存在し、炉跡に接して焼土・木炭が濃密に分布していた。2号土坑（第6図SK02）は竈のすぐ北西側に位置しており、約半部を検出したものと思われる。平面楕円形もしくは円形を呈するものとみられ、径40～50cmの規模と推定される。埋土には焼土を混えており、3号住居跡に伴う竈の煙道出口と思われる。また、住居跡西端では灰混り層が堆積していた。炉跡は平面楕円形で、長径約80cm、短径約60cmの規模をもち、内部には木炭・焼土が充填されていた。また、住居内には5号・6号土坑（第6図SK05・06）が伴っている。いずれも一部を検出したにすぎないが、平面楕円形を呈するものとみられ、5号土坑は長径1.5mを超す大型土坑である。住居内より多量の須恵器、土師器が出土した。

須恵器（第50図167～183）　蓋坏、高坏、坏、蓋、壺、甕などが出土しており、須恵器焼成窯跡出土の多くの器種と共に通する。現状では、完形あるいは完形に近い形状に復元される個体はきわめて少なく、一ヶ所で破損した状況で出土したものもない。

蓋坏（第50図167～171）　坏蓋（167・168）は天井が丸みを帯びるものと平坦なものがあるが、口縁部はやや外開きであり、明瞭な稜は形成していない。167は、口縁部と天井部の境界は不明瞭だが緩やかな稜をつくり、口縁部はわずかに外反する。天井部は回転ヘラ切り未調整であるが平坦である。それ以外の内外面は、回転ナデ調整である。口縁部は短く端部を丸く收める。168は天井部までやや高い土饅頭状の形態をしている。体部は緩やかなカーブを描いており、口縁部はやや内側に入り込むように收められている。天井部頂部平坦面は狭い。天井部の厚さは相対的に厚みがある。

坏身（第50図169～171）　浅いものとやや深いものがあり、立ち上がりは低いがしっかりしている。169は底が比較的浅い坏身である。胴部は部分的に強くうねっている。立ち上がりは口縁部より上に出ており、口縁部の張り出しあり。口縁端部は丸く收めている。底部は回転ヘラ切り後わずかにナデ調整をしている。底部内面は不定方向のナデ調整により仕上げている。170は底が深い坏身で、坏の形態に類似する。体部は直線的で底部は平底である。立ち上がりは断面鉤状を呈し、口縁部より上に突き出ている。口縁部は若干肥



第50図 阵ヶ平西遺跡集落地区（3号住居跡 S B03）出土須恵器実測図（2）

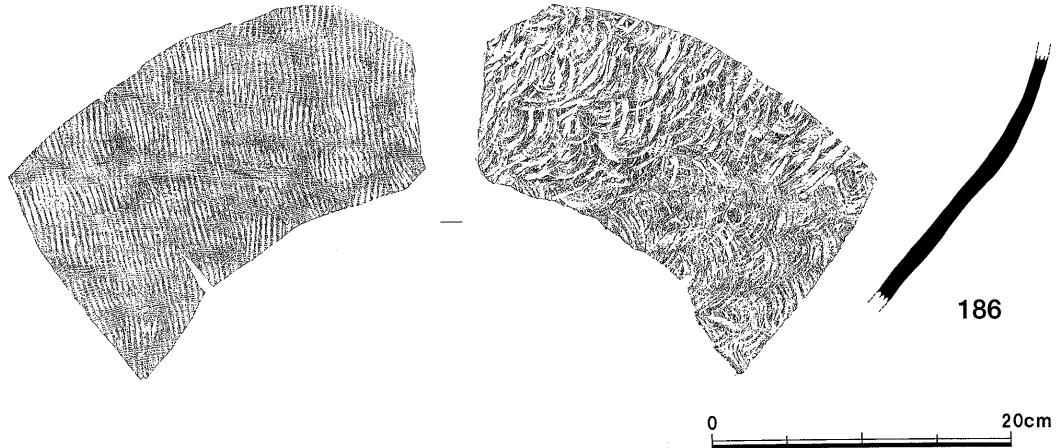
厚し、端部はやや薄く仕上げている。底部内面は不定方向のナデ調整を施している。171は底が浅い环身である。立ち上がりは口縁部内面から内傾するように貼り付けられ、口縁部よりも上に突き出ている。受け部の凹みはほとんどなく、立ち上がりから緩やかに湾曲し口縁端部にいたる。口縁部は水平に張り出し、口縁端部は横方向を向いている。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。底部内面は不定方向のナデ調整により仕上げている。

高坏（第50図172～177） すべて短脚の高坏である。坏部（172～174）と脚部（175～177）に区分される。172の口縁部は緩やかに外反し、胴部との境は明瞭な段を有する。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整である。復元口径は14cmあり、比較的大きい。173は坏部の見込みが比較的広く、平坦なものである。口縁部は底部付近からそのまま上方に立ち上がる。口縁部内面がわずかに外傾して口縁端部はすぼまる。外面底部はヘラ削り調整後ナデ調整を施している。内面全面は回転ナデ調整により仕上げている。口縁部外面に1条の凹線を施す。見込みに重ね焼をしたときの上に載せた高坏脚部の破片が付着している。脚部は欠損しているが、底部の痕跡から直径約2.8cmに復元できる。本遺跡出土のなかでは細い。174の口縁部は緩やかに外反し、胴部との境は明瞭な稜を有する。器壁は全体的に薄いが、口縁端部はわずかに肥厚する。内外とも回転ナデ調整である。胴部稜線の上方は凹線状にわずかに凹む。175は脚部と坏部の接合部がやや太い。脚高が3.9cmしかないこともあり、脚部は大きく開いている。内外ともに回転ナデ調整である。脚端部外面はわずかに凹む。176の脚部は相対的にあまり開いていない。その分、脚裾部から脚端部まで緩やかな平坦面が見られる。坏部内面は不定方向のナデ調整である。脚部は内外とも回転ナデ調整である。脚端部外面はわずかに凹む。177は脚裾がハの字に開き、脚端部付近で脚端部よりも下に落ち込んでいる。脚部中ほどより下半の内面は極端に薄く成形されている。内外面ともに回転ナデ調整である。

坏（第50図178） 底部はやや丸底を呈す。底部は厚く、口縁部は垂直に立ち上がる。口縁端部は丸く收める。口縁部外面には幅約4mmの凹線をもつ。また、同じ位置の内面にも凹線がめぐる。

蓋（第50図179） 扁平な蓋である。天井部は回転ヘラ削り調整を施し、中央部は凹むように成形している。内面中央部は不定方向のナデ調整でそれ以外は回転ナデ調整である。返りは口縁部よりわずかに下に出ており、口縁端部は斜め下に向いている。削りは反時計回りである。つまみの有無は中央部が欠損しているため不明である。

壺（第50図180） 底部を欠いており、口径13cm、胴部最大径18cm、推定器高約15cmである。口縁部内外面および胴部外面は弱い搔き目調整を施しており、外面および口縁端部



第51図 陣ヶ平西遺跡集落地区（3号住居跡SB03）出土須恵器実測図（3）

内面は粗くナデ消している。底部外面は横方向のヘラ削り調整を施しており、胴部内面は回転ヨコナデ調整である。胴部中央部に6条の凹線文をめぐらせており、4条目と5条目は途中で重なって1条となり、最下段は途切れている。

甕（第50図183・第51図186） 183は甕の口縁部で、口縁端部を肥厚させ、綾杉文状の文様を櫛状工具で施文している。上半の施文3～4単位に対して、下半は1単位である。内外ともヨコナデ調整である。淡赤褐色を呈しており、本遺跡出土の須恵器の色調の中では他に類例を見ない。186は大甕の胴部～底部である。SK04上面出土の破片と接合した。外面はタタキ目調整を施した後、粗い搔き目を一定間隔で平行に施している。内面には青海波状文の當て具痕が認められる。破片下半で器壁が若干薄くなり、湾曲も変化する。本遺跡出土の大甕の底部付近の特徴である。

土師器（第50図181・182・184・185） 甕、甌把手などが出土地してい。

甕（第50図181・182・185） 181の口縁部は直線的に開く。頸部外面の屈曲は弱い。外面はヨコナデ調整である。口縁部内面は横方向のハケ目調整とヨコナデ調整を施している。胴部内面はヘラ削り調整を施し、頸部内で削りの端部が稜線上に残る。182の形態は須恵器甕に類似している。口縁部は直線的にハの字に開く。頸部の器壁はやや薄く、口縁部は厚さを増し口縁端部をわずかに内面に肥厚させる。口縁端部はほぼ水平な平坦面に仕上げ、ナデ調整によりわずかに凹ませている。内外ともにヨコナデ調整である。185は肩部片である。器壁の厚さは頸部側が薄くなっている。外面はハケ目調整、内面ヘラ削り調整を施している。

甌（第50図184） 甌の把手である。手捏ね成形である。外面は丁寧なナデ調整を施す。接合時の調整痕が把手基部の全周に残る。

この他に、1983年度調査区で平面コの字状の段状遺構が検出されている。東西の規模は約3mで、掘り込み面に沿って径約15cmの柱穴2本が配置されており、壁面中央部に隣接して焼土の集中部が検出された。工房など性格を持つ遺構と推定され、周辺から少量の須恵器、土師器が出土した。

須恵器（第49図159～164） 平瓶もしくは提瓶、甕などがある。

平瓶もしくは提瓶（第44図159） 口縁部片で、復元口径は6.2cmである。器内外面のタタキ目調整からみて古墳時代後半期のものと推定される。

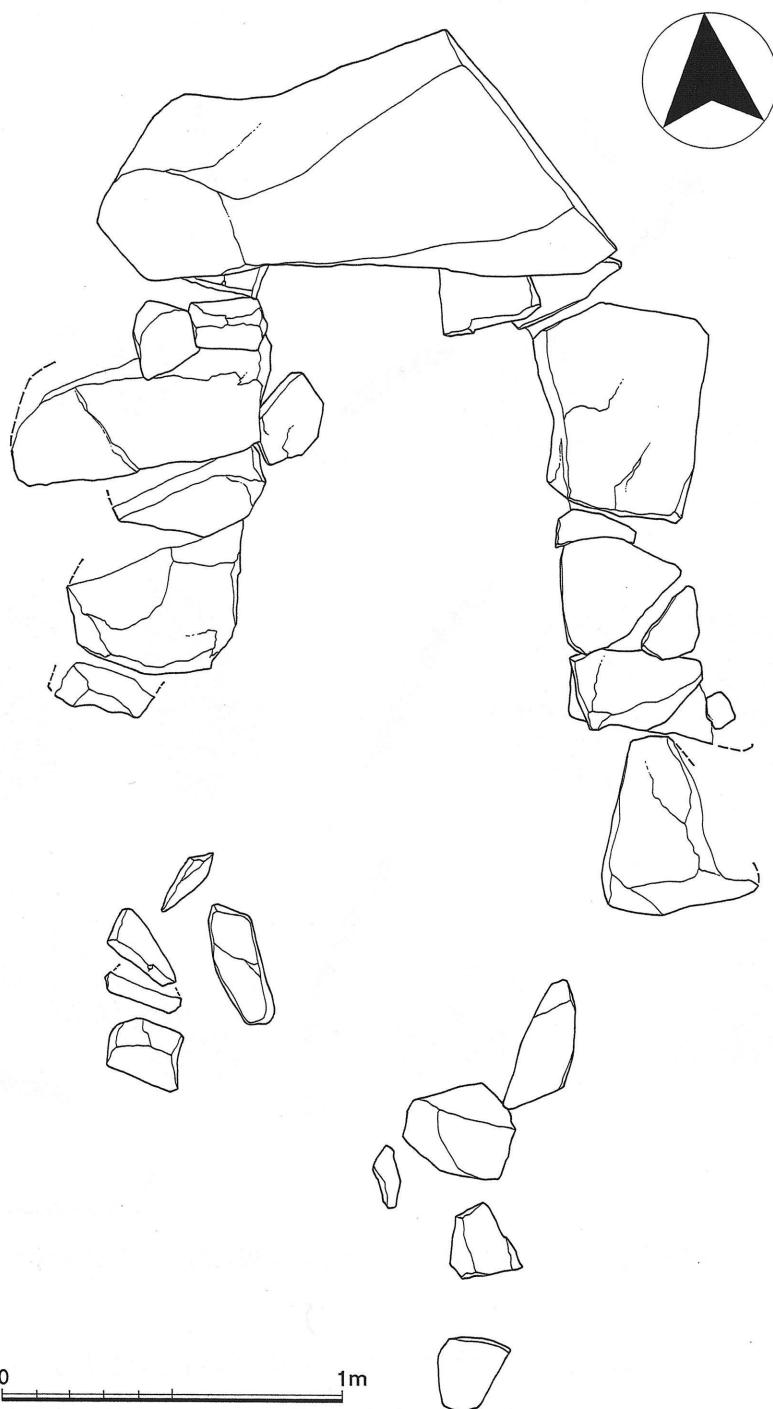
甕（第49図160～164） 甕の胴部片で器表面には、平行のタタキ目調整や搔き目調整が見られ、内面は、同心円状のタタキ目が見られる。163のように粘土紐の継ぎ目痕の残るものも見られる。

土師器（第49図166） 甕の口頸部である。

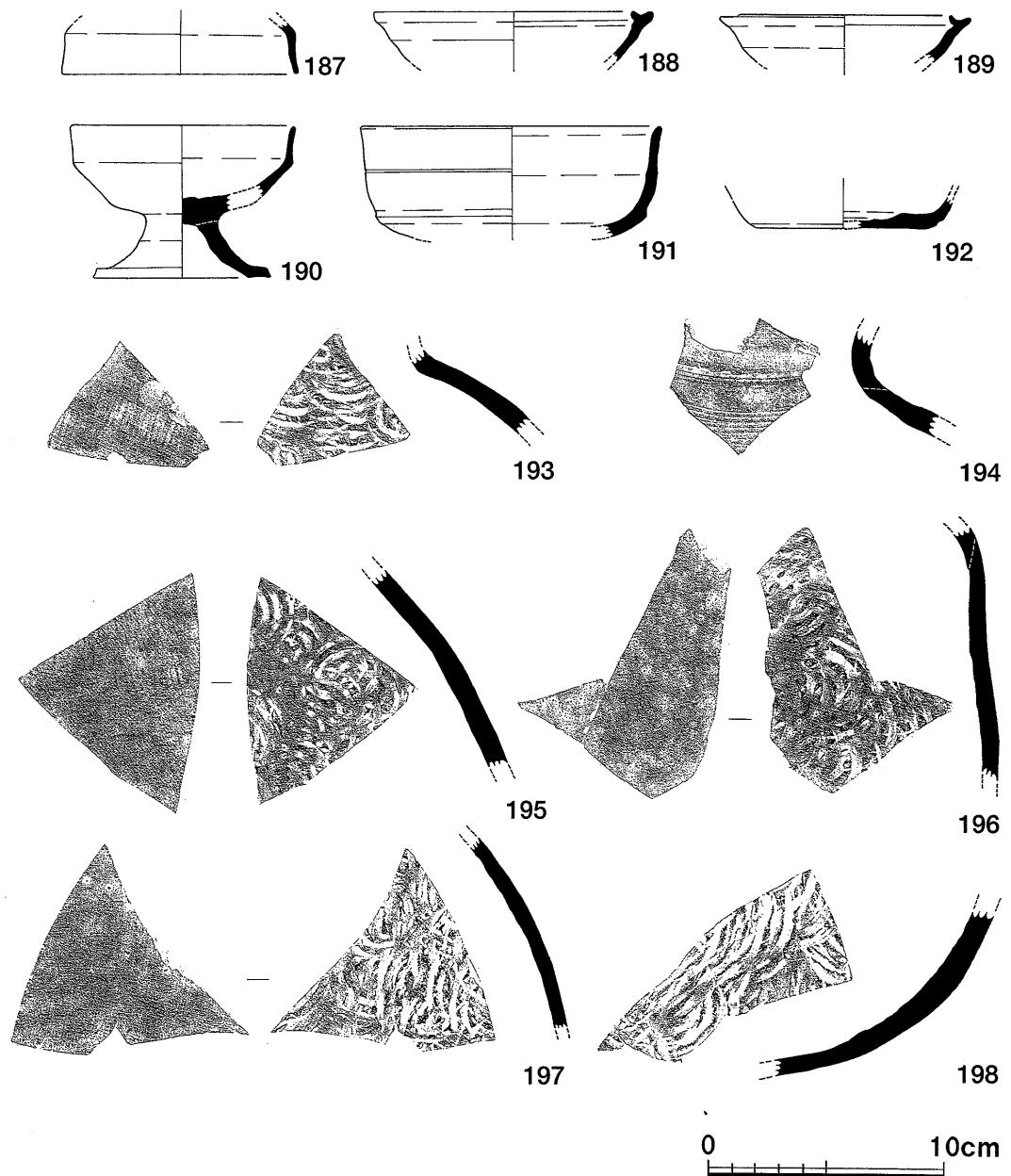
5. 古墳（陣ヶ平西古墳）

1号・3号須恵器焼成窯跡の約60m東で横穴式石室を内部主体とする古墳1基を1990年度の予備調査で検出した。本古墳の立地する丘陵平坦部は東側の平坦部から西南西へ派生する形となっており、平坦部が派生する分岐点付近では南南西へ平坦部がわずかに張り出す形となっている。古墳はその平坦部の南端に立地しており、前述の古墳時代集落跡を下手に望む位置にある。標高250mで丘陵裾との比高差は5mである。墳丘は大半が流失していたが、周囲の状況などから見て、斜面側を中心に盛土を行った径10m前後の円墳と推定される。天井石は奥壁上の1枚を残して全て抜き取られており、羨道部付近も破壊されている。周辺の地形は後世の砂防工事や植林などに伴って大きく削平されており、本古墳もその際に破壊を受けたものとみられる。古墳の位置する丘陵の南斜面裾に1990年度調査区第11区を設定しており、調査の際に古墳から流出したと思われる須恵器が多数出土した。内部主体は横穴式石室で、石室はほぼ南に開口し、現存で長さ約2.5m、幅約1mの規模をもつ（第52図）。調査は石室側壁石と天井石上面を検出したのみでとどめているので、石室の規模などは不明であるが、東側壁の最も南の石が最下段をなすとすれば、高さは約1mである。石室中軸線の延長線上にやや小型の石がまとまっており、石室構築材が崩れたものか、あるいは閉塞石かもしれない。

石室内の埋土中および古墳が立地する丘陵裾から、須恵器、磁器が出土した。天井石の上



第52図 陣ヶ平西遺跡横穴式石室（陣ヶ平西古墳）実測図



第53図 陣ヶ平西遺跡の古墳および古墳周辺出土須恵器実測図

には墓石状に石が組まれており、磁器はこの立石に関連するものと考えられる。

蓋坏（第53図187～189） いずれも小破片のみである。小型品で、1号焼成窯跡出土の一部の製品に似る。

坏蓋（187） 壊部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、口縁部はわずかに外反する。比較

的器厚は薄い。

坏身（188・189） いずれも立ち上がりが低く、傾斜が緩やかである。188の受け部の立ち上がりは低く、口縁部とほぼ同じ高さである。口縁部は肥厚し、口縁端部は上方を向いている。受け部端部は丸く収める。受け部内面直下に調整時についた稜が見える。189の受け部の立ち上がりは低く、口縁部よりわずかに上に出ている。口縁部は丸みを持ち、口縁端部は外を向いている。

高坏（第53図190） 坏部胴下半部は直線的で上半部に稜を持ち、口縁部にいたる。口縁部は、わずかに外反し端部は丸く収める。脚部はハの字に開き、そのまま脚端部にいたる。脚端部は平坦で、内傾している。復元推定器高は6.4cm、口径9.4cm、底径7.4cmで、遺跡出土高坏の中ではもっとも小さなもののひとつである。

坏（第53図191・192） 191は底部からほどなく上方に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は薄くなる。胴部中ほどに1条の細い沈線と、底部との境界に幅約3mmの凹線を持つ。底部はヘラ削り調整後ナデ調整を施している。192は底部内面は粗い調整で薄く仕上げている。底部外面はヘラ状工具で表面の粘土を掻き取った後、ナデ調整を施している。底部と胴部との境界に細い沈線を施している。

壺（第53図193・194） 193は壺の頸部付近と思われるが、横瓶の可能性もある。外面タタキ目調整でわずかにナデ調整を施している。タタキ目調整は比較的細いタタキ目をしている。内面には青海波状文の当て具痕が残る。194は壺の頸部である。内面と頸部外面はヨコナデ調整で、調整痕が筋状に残る。肩部外面は掻き目を施した後、ナデ調整をしている。胎土も比較的精緻で、硬質である。

横瓶（第53図195～198） 195～198は同一個体で、横瓶の破片と考えられる。198は底部付近で、その他は胴部である。調整はタタキ目を施した後、外面は掻き目調整、内面は粗いナデ調整を行っている。196の掻き目調整は同心円状に施している。形状が平坦であることから、横瓶の側部と思われる。198は胴部下半から底部片で、底部内面まで当て具痕が見られる。外面はヘラ状工具でのナデかヘラ削りの痕跡が窺える。器厚は底部になるにつれ薄く仕上げている。

（藤野次史・楨林啓介）

第4節 古代の遺構と遺物

調査区西部のC4・5区で奈良時代の須恵器焼成窯跡1基を検出した。2号焼成窯跡SY02は1号・3号焼成窯跡の東側に隣接して構築されており、C4区を中心に位置してい

る。古墳時代の須恵器焼成窯跡との切り合い関係はないが、灰原を中心に古墳時代の須恵器が混在した形で出土している。2号焼成窯を構築する際に1号焼成窯跡を中心とする操業によって形成された古墳時代遺物包含層の一部を掘削し、それらに含まれていた須恵器が本焼成窯埋没過程で再堆積したものと思われる。

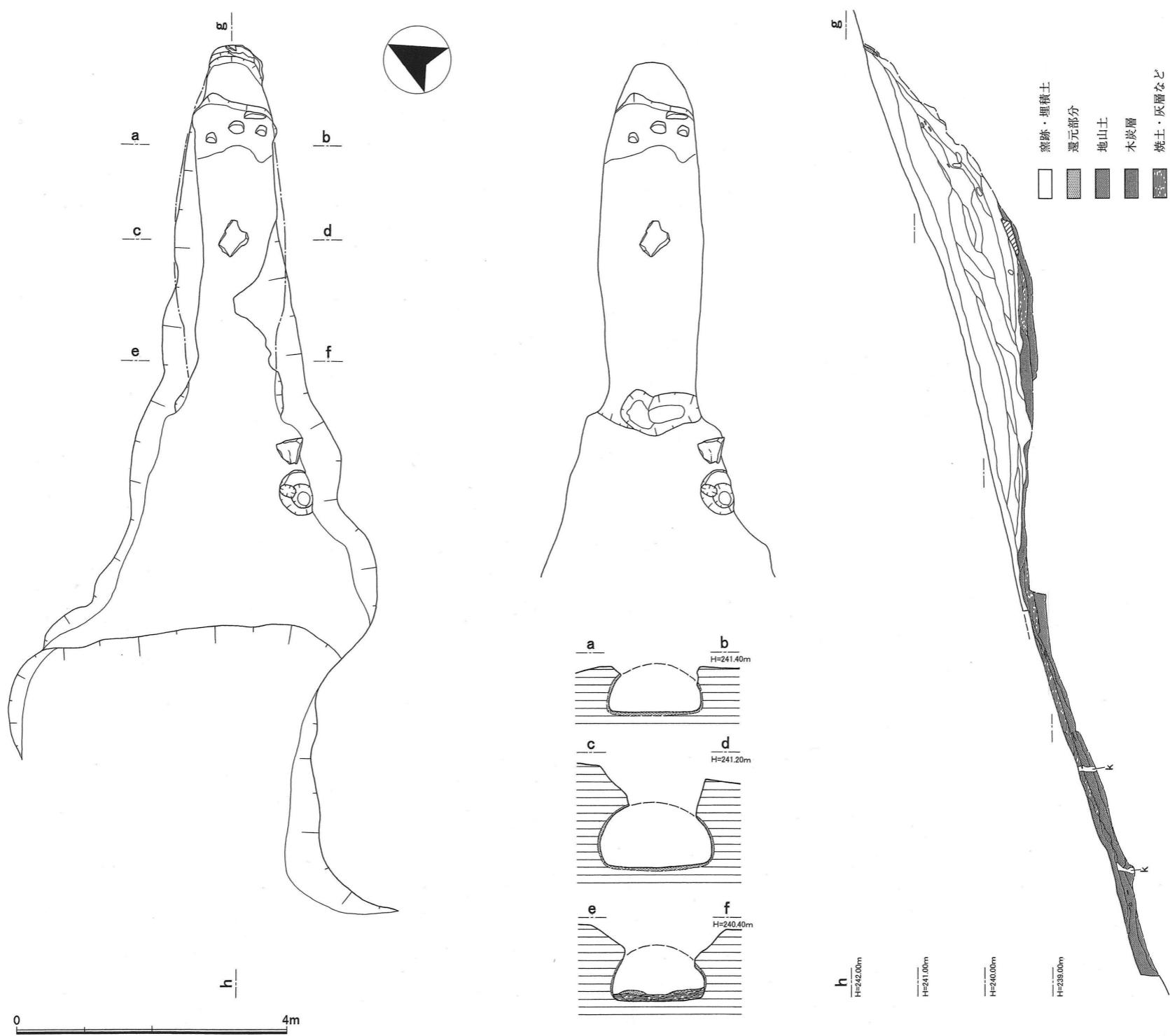
2号焼成窯跡（第54図） 検出時にすでに天井部は崩落しており、煙道部もほとんど残存していなかった。前庭部～焚口部付近までは当時の地表から掘り込んで床を形成しており、焚口から前庭部に向かってハの字状に広がっている。焚口付近で高さ70cm程度であり、甕などの大型器種を焼いていたのであれば、焚口部付近は天井を別に作っていた可能性がある。

本窯跡は、窯体、前庭部、灰原からなる。焚口部から前庭部にかけてはよく焼けた堅固な焼成面が2枚程度認められるが、燃焼部では1枚のみである。灰原の堆積状況や土器の出土量などから見ても、複数回の操業を想定することはできるものの、操業は短期間であったものと推定され、須恵器の型式は細分できない。

窯体平面は細長いU字形を呈している。窯尻は先細りの形状を示すが、焼成部、燃焼部の両側の壁面はほぼ平行している。燃焼部と焼成部の境界付近に最大幅があり、わずかに胴張り状の形状である。窯体は長さ約5.8m、幅は北端部で約0.7m、中央部で約1.6m、焚口部で約1.3mである。燃焼部付近の天井部の残存は良好で、調査中にかなり崩落したが、窯体断面の形状を十分復元できる状況であった。断面形は1号焼成窯跡同様、床面のやや上方で最大幅をとるようで、煙道部を除く窯体のほぼ全ての部分で蒲鉾形を呈していたと考えられる。高さは北端部で約0.6m、中央部で約1.0m、焚口部で約0.7mと推定される。主軸はN61°Eである。窯体は床および壁の構築には粘土を使用しているようである。

焼成部床面は急傾斜で、ほぼ直線的に窯尻に向かって傾斜している。床面の傾斜は39°である。燃焼部は窯体北端では床面がさらに急傾斜となっており、煙道の一部と考えられる。傾斜は約64°である。焼成部北端部で幅20～30cmの平面半円形の平坦面を4ヶ所検出した。その南側では床面が大きく剥落しているため、本来の床面形状が不明であるが、同様の小規模な平坦面が多数形成されていた可能性がある。これらの平坦面は、1号焼成窯跡同様、小規模な段の形成や小型器種の設置などに利用されたものと推定される。焼成部南端の燃焼部との境界付近に長さ60cm程度の扁平な角礫が置かれていた。前庭部内外でも長さ40～60cmの角礫が散乱した状況で出土している。焼成部内の礫は大型器種の据付けに関連した可能性もあるが、前庭部の礫は焚口部の封鎖に利用された可能性がある。

燃焼部床面はほぼ水平で、焚口部との境界は不明である。焼成窯構築当時は焚口と窯体内部との間にわずかに段状の境界が認められるが、操業に伴う堆積物によって焚口部、燃



第54図 陣ヶ平西遺跡 2号須恵器焼成窯跡 S Y02実測図
(左図は最終操業時の状況、中央図は建築時の床面を示す。左図の一点鎖線は床面を示す。右図断面図のkは木痕である。)

焼部はほぼ水平となって前庭部から一続きの床面となっている。

燃焼部から次第に幅狭となり、焚口部あたりがもっとも狭いが、両側の壁面はほぼ平行である。両側の壁面は焚口でいったん外側にL字状に広がり、再びL字状に折れてハの字状に外側へ開いて前庭部を形成している。

前庭部は整地面を掘り込んで構築され、平面形は灰原部に向かってラッパ状に開いている。床面はほぼ水平に作られており、南壁に接して長径約60cmの小土坑が付設されている。柱穴の可能性を考え精査したが、対応するものは検出できなかった。

灰原は前庭部に接して斜面部を浅く掘り込んでいる。南側は1号焼成窯跡構築の際の整地面を掘り込み、北側は地山（谷埋土）を掘り込んでいる。灰原西端（斜面下方）は開かれている。堆積土は木炭層を主体とする。木炭層は間層を挟んで大きく2分され、焚口部～前庭部にかけての焼成面が2枚認められることも考慮すれば、少なくとも2回の操業があった可能性が強い。

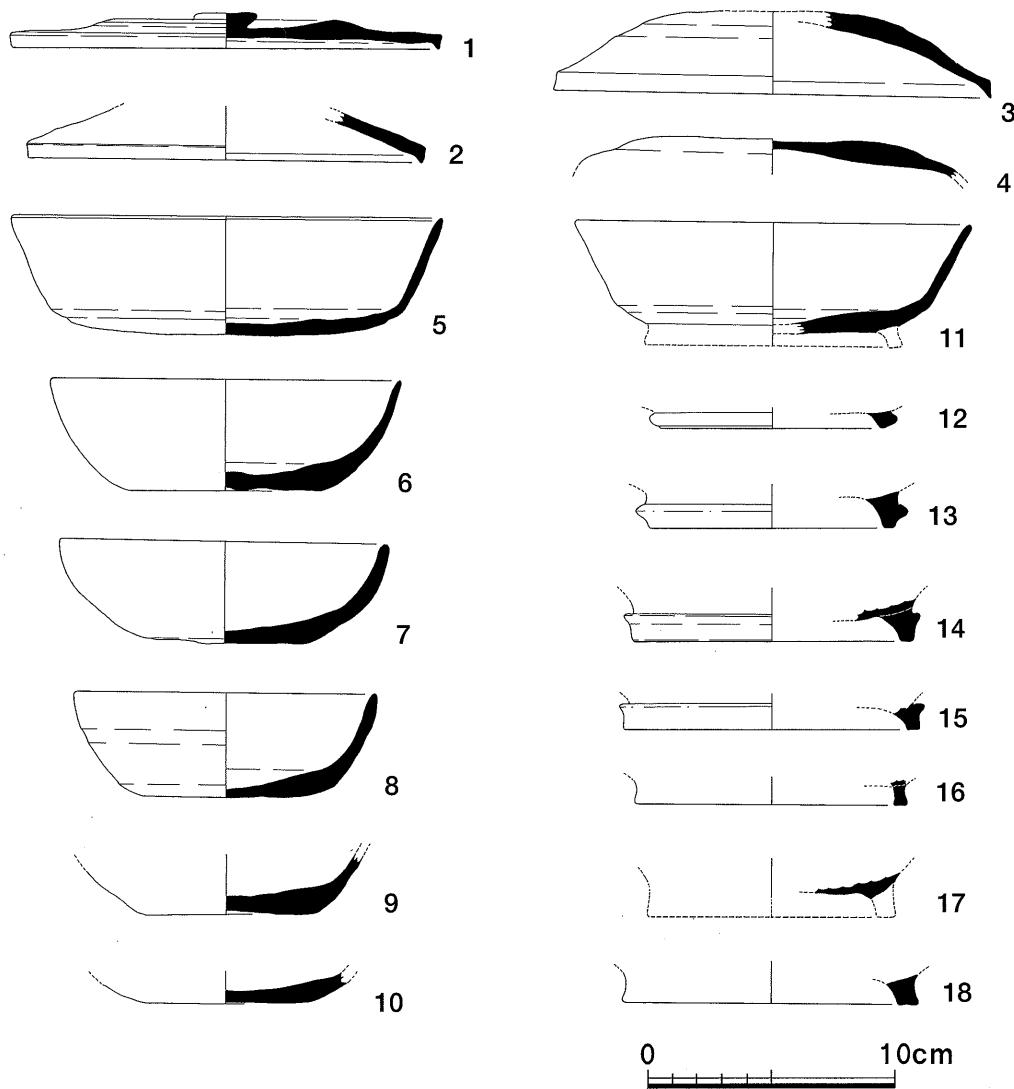
（藤野次史）

2) 出土遺物

出土須恵器は灰原を中心に出土しており、窯体内には数点の破片が出土したのみで、前庭部からの出土もわずかである。灰原は間層を挟んで2枚の木炭層が認められるが、出土の須恵器は1号焼成窯跡に由来すると考えられる個体が多数出土している。前庭部出土の須恵器は2号焼成窯跡に伴うものと考えられ、壺蓋、壺身、甕などがあるが、出土量が少ない。

2号焼成窯跡および周辺から出土した遺物の多くは、1号焼成窯跡もしくは3号焼成窯跡由来のもので、2号焼成窯跡由来のものは少ない。整理の結果、2号焼成窯跡出土の須恵器には、蓋壺（壺身・壺蓋）、壺、短頸壺、長頸壺、甕があることが判明した。しかし、破片が多く、器形を復元できるものが非常に少ない。

壺蓋（第55図1～4） 1は、かなり扁平な形状で天井部に扁平なつまみがつく。口縁部は短く、直立気味でやや内傾し、口縁端部は尖り気味である。2次焼成を受けているようでは調整は不明瞭であるが、内外とも回転ヨコナデ調整と思われる。また、内外ともに灰を多く付着していた。5と組み合うと考えられる。2は、直線的に大きくハの字に開く。口縁端部は屈曲し、やや内傾し、垂下している。尖り気味に仕上げている。厚さは均一で回転ナデにより丁寧に器面調整している。天井部は回転ヘラ切り後ナデ調整により仕上げている。3は、天井部が平坦で口縁部に向かって湾曲しながらハの字状に開く。口縁部は断面三角形状を呈し垂下する。天井部は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削り調整を施している。4は蓋の天井部と考えられる。口縁部は欠損しているが、復元しても扁平なものと思われる。



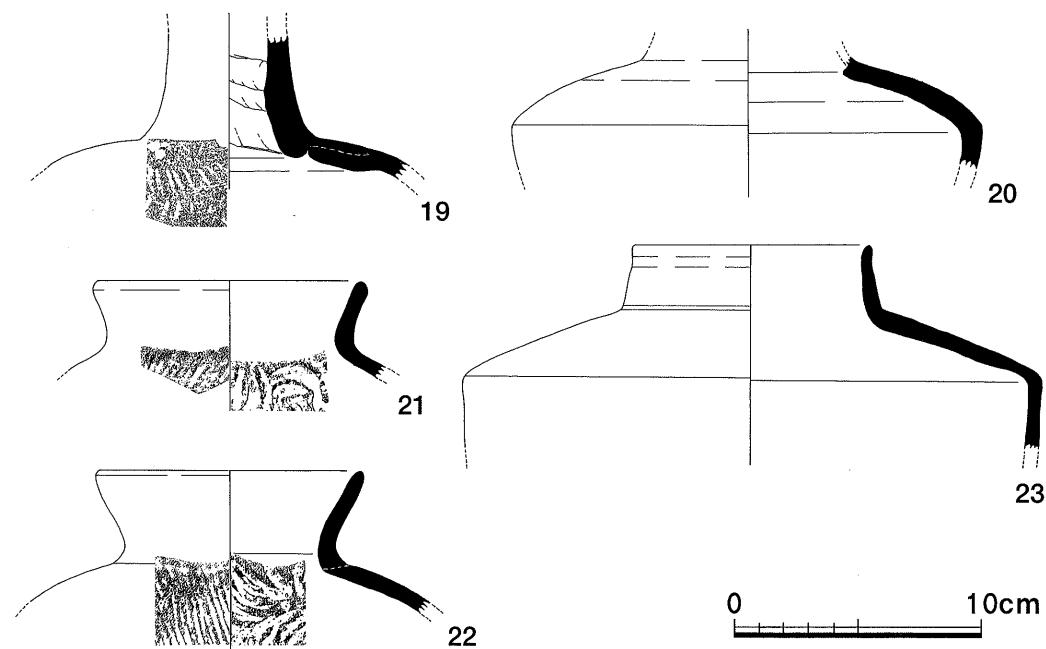
第55図 陣ヶ平西遺跡 2号須恵器焼成窯跡 S Y02出土須恵器実測図（1）

天井部と口縁部の境は緩やかな段を形成している。天井部はヘラ切り後不定方向のナデ調整が施されている。天井部中央は調整によりわずかに凹んでいる。内面はナデ調整であるが、粗く仕上げている。

坏身（第55図 5・11～18） 坏身は高台がつかないもの（5）と高台付のもの（11～18）がある。5の口縁部は直線的で、口縁端部はやや先すぼまりになっている。口縁部から底部への変化はへの字状で、底部はほぼ平坦である。底部の体部との境界付近にはヘラ削

りによってわずかに段がついている。口縁～底部にかけては内外とも回転ヨコナデ調整、底部内面はナデ調整、外面は回転ヘラ削り調整のちナデ調整を施している。外面にヘラによる斜め3連の刺突文が施される。全体に薄手の作りである。1と組み合うと考えられる。11は高台が欠損した坏である。体部からわずかに外反し口縁部は丸く収める。平底の底部の体部に近いところに高台貼り付け痕が残る。貼り付け部には底部成形時の回転ナデ調整を施している。高台内も回転ナデ調整が施されている。両者とも回転方向は底部を上にして反時計回りであるが、双方で回転軸が若干ずれている。見込み部は不定方向のナデ調整である。12～18は坏の高台である。12の高台際は貼り付けの際に回転ナデ調整で滑らかになっている。高台際の内面側は高台の粘土を延ばして貼り付けている。高台外面は断面半円状の張り出しがあり、器面はナデ調整により滑らかに仕上げられている。畳付き部は丸く収めている。13の高台際はしっかりとナデ調整して貼り付けている。内面側は高台内に粘土を延ばして貼り付けている。高台外側面には、断面三角形状の突帯がある。つまんで作出しているためか、突帯の上に爪の痕が残っている。畳付き部は平坦である。14は、高台をやや斜めに貼り付けている。高台外側面に突帯があり、突帯の付け根上には沈線状の凹みがある。突帯成形時に施されたと思われる。高台内側面下半と畳付け部はわずかに凹む。15は高台をやや斜めに底部に貼り付け、高台際を特に内面側を強くナデ調整している。高台外側面には、つまみ出した突帯がある。端部は丸く収めている。その下は回転ヨコナデ調整により丁寧に仕上げている。畳付き部はわずかに凹む。16は、高台を底部に貼り付けた後、高台際を回転ナデ調整している。高台の断面形状は相対的に細長い。高台の両側面と畳付き部はナデによりわずかに凹んでいる。17は、底部と体部の境に高台の貼り付け痕が残る。底部を回転ナデ調整した後、高台を貼り付けている。高台際付近は粗いナデ調整を行っている。18は、高台際をしっかりとナデ調整して貼り付けている。両側面と畳付き部は凹んでいる。比較的厚い高台であり、高台径は10.4cmで最も大きい。

坏（第55図6～10） 6・7の体部は湾曲し、口縁部は上方を向いている。口縁端部は丸く収めている。内外面に回転ナデ調整を施している。底部は回転ヘラ切り未調整である。底部内面は不定方向のナデ調整で仕上げている。器壁は全体的にやや厚めである。8の底部は平坦で体部は湾曲しながら立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。外面にナデによる横位の凹線状の凹みが残る。底部外面は回転ヘラ切り後、若干のナデ調整を施している。口縁部は底部より薄く、また均一である。底部の中央はやや薄くなっている。9の体部は底部より薄く、湾曲して立ち上がる。内面はやや屈曲している。底部は不定方向のナデ調整によって仕上げている。底部中央は薄くなり、わずかに上げ底になっている。底部内面



第56図 陣ヶ平西遺跡 2号須恵器焼成窯跡 S Y02出土須恵器実測図（2）

は不定方向の仕上げナデ調整を施している。10は壊底部と考えられる。摩滅が激しく器面の調整は不明瞭であるが、底部はおそらく回転ヘラ切り後ナデ調整が施されている。

長頸壺（第56図19・20） 19は頸部片である。頸部と胴部との接合部には、2回にわたり巻きつけた二段技法が見られる。頸部内面には粘土がねじれたようなシワが多く認められる。頸部は重みで胴部へ若干垂れ下がっている。外面には自然釉が付着している。20は頸部から肩部である。頸部は口縁部との接合部で剥離している。二段技法により頸部の上に口縁部を載せて接合している。接合部の厚さは4mmほどである。頸部から肩部にかけては丸みを帯び、肩部の屈曲部は明瞭に稜を成している。両面回転ナデ調整で、特に外面は丁寧に調整している。

短頸壺（第56図23） 23は頸部が屈曲し、口縁部はやや内傾して立ち上がる。口縁端部でやや外方に反り、口縁端部は丸く収める。肩部は屈曲し、肩部、胴部は直線的である。肩部外面に凹線状の調整痕が見られる。調整は内外面とも回転ナデ調整である。

甕（第56図21・22） 21・22の口縁部は頸部でくの字に屈曲し、直線的に開く。器壁の厚さは均一で口縁端部は丸く収めている。22の口唇部内面はやや内湾している。頸部直下には、平行タタキ目調整の後、一部にナデ調整が施されている。内面には青海波状文が広

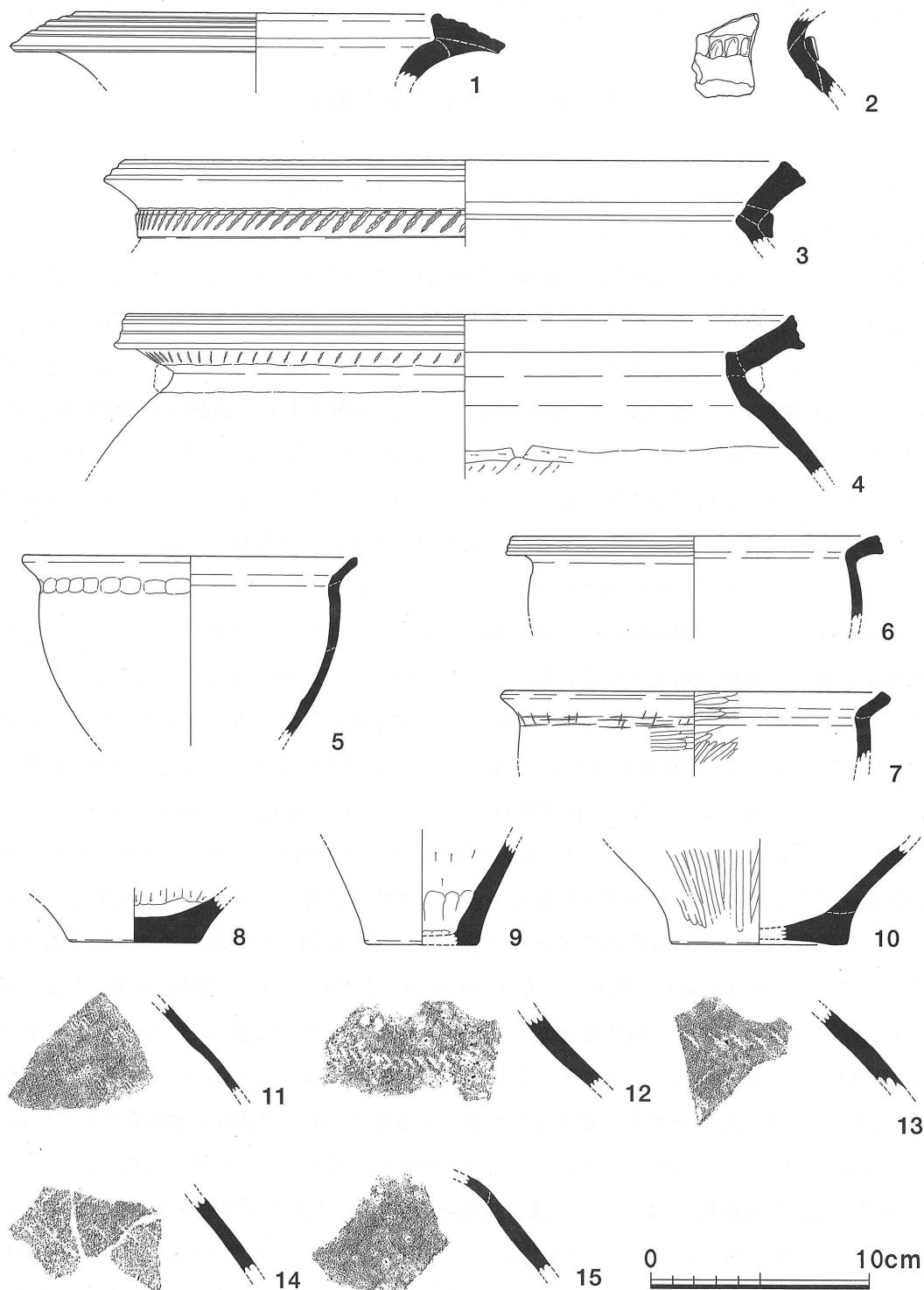
く残るが一部にナデ調整が施されている。

(槇林啓介)

第5節 その他の出土遺物

本調査を実施した地区および住居跡、古墳周辺の包含層中から、弥生土器、近世以降に属すると思われる瓦質土器、磁器、および石鏸が出土している。

弥生土器（第57図） 本調査地区北側の埋没谷から出土した。1・2・10・11・15は壺形土器と考えられるもので、それぞれ口縁部、頸部、底部、胴部である。1は口縁端部が水平方向に大きく拡張され、断面T字状を呈し、拡張部に5条の凹線文を施し、拡張部の端部にも1条の凹線文を施している。淡黄褐色を呈する。磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、内外ともヨコナデ調整とみられる。2は頸部に幅約1cm、厚さ約5mmの突帯を貼りつけ、指を直角に押しつけ、左右にやや拡張して、楕円形の凹みを並列的に作り出している。焼成は良好で、淡黄褐色～淡灰褐色を呈する。外面の調整はヨコナデ調整、内面は横方向のヘラ磨き調整である。10は復元底径約8cmで、一部に二次焼成痕が認められる。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。外面は粗いヘラ磨き調整を施し、内面はナデ調整である。11は肩部から胴部にかけて櫛描波状文を2段に施しており、15は肩部に櫛描波状文を施している。磨滅して器面が荒れているが、横方向を中心にナデ調整を施している。3～9、12～14は甕形土器と考えられる（調整痕からみて、8は鉢形土器の可能性もある）。3・4は頸部に貼り付け突帯をもつもので、4は突帯が剥がれている。いずれも復元口径30m前後の大型品で、頸部はくの字状に屈曲する。3は口縁端部を拡張して2条の凹線文を施し、突帯には左下りの櫛状工具による連続的な刺突文を施している。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。内外ともヨコナデ調整で、頸部内面の接合部は強いナデ調整で凹んでいる。4は口縁端部を拡張し、3条の凹線文を施しており、下方への拡張が顕著である。口縁部外面の突帯と接する部分には二枚貝腹縁による刺突文を左下りに施している。焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。口縁部～肩部は内外ともヨコナデ調整で、胴部外面はヨコナデ調整、内面は最上部が横方向のヘラ削り調整、それ以下はやや左へ斜行する縦方向のヘラ削り調整が施されている。5～7は復元口径16cm前後の中型品で、8・9も中型品と考えられる底部である。6、7、5の順で、頸部の屈曲度が弱く、6では口縁端部を拡張して2条の凹線文を施しているが、5・7では口縁端部は拡張されず平坦である。5は磨滅して器面が荒れているため調整が不明瞭であるが、外面は口縁部の一部にハケ目調整痕が認められ、器面をハケ目調整した後、口縁部～胴部上部はヨコナデ調整、胴部はナデ調整を施しているものと考えられる。頸部



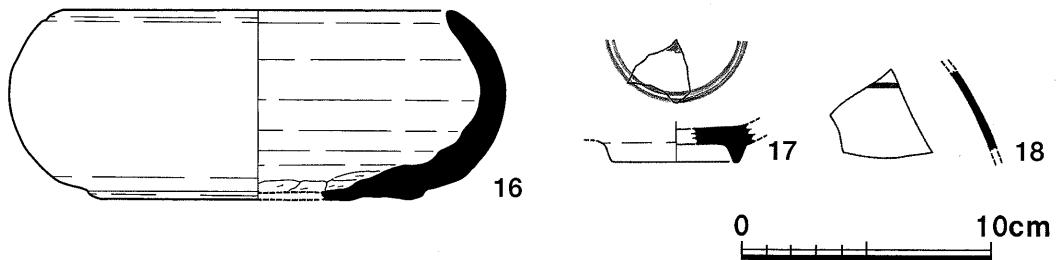
第57図 陣ヶ平西遺跡出土弥生土器実測図

には連続した指頭圧痕を残している。内面は口縁部がヨコナデ調整、頸部が横方向のヘラ削り調整、胴部が縦方向のヘラ削り調整を施している。6も磨滅が著しいが、外面はヨコナデ調整、内面は口縁部～頸部がヨコナデ調整、頸部～胴部最上部がナデ調整で、それ以下が縦方向のヘラ削り調整である。7は焼成が良好で淡黄色～淡黄灰色を呈する。外面は口縁部～頸部がヨコナデ調整、胴部は横方向のヘラ磨き調整である。内面はヘラ磨き調整で、口縁部～頸部は横方向を主体とし、胴部は左に斜行する縦方向を主体としている。頸部にはヘラ状工具によるとみられる沈線が断続しながら数条認められ、縦方向にも不規則な間隔で刺突文状の文様が施されている。8・9も磨滅により器面が荒れており調整は不明瞭であるが、外面は粗いヘラ磨き調整で、内面は底面近くまで縦方向のヘラ削り調整を施している。9は底部内面に指頭調整が顕著に認められる。12～14はいずれも胴部で、肩部～胴部上部に二枚貝腹縁によってハの字状に刺突文を施している。12は1列のみであるが、13・14は2列の施文を確認できる。いずれも磨滅しているが、内外ともヨコナデ調整あるいはナデ調整と思われる。

石鎚（図版72・73） 本調査地区窯跡周辺、北側の埋没谷および住居跡付近で出土した。剥片とも合わせて、周辺に縄文～弥生時代の関連遺構が存在する可能性がある。ほとんどが凹基式のもの（図版72-1・3・4・7、図版73-1・2）で、平基式のもの（図版72-2・5・6、図版73-3・4）もある。凹基式のものには、抉りが浅いもの（図版72-1、図版73-1・2）とやや深いもの（図版72-3・4・7）とがある。ほとんどが平面二等辺三角形を呈している。図版72-1は小型で正三角形を呈している。図版72-2は縁辺部の調整が細かく丁寧で、きれいな二等辺三角形に仕上げている。図版73-3は脚部がやや膨らみ先端が尖るものである。図版72-4は脚が外側に膨らむ。図版73-5は尖端が極端にすぼまる。図版73-5が大型のもので、抉りもやや深いものである。図版73-1は、調整がやや粗いが全面に施されており、素材面は残していない。図版73-2は先端を欠失している。両面中央に素材面をわずかに残す。図版73-3はやや粗い調整を施している。図版73-4はやや大型のものである。ひとつひとつの剥離面が大きく調整されている。図版73-5は水晶製である。未製品である。

剥片（図版73-6） 小型の縦長状剥片である。背面下側縁に微細な剥離痕が連続している。安山岩製である。

瓦質土器（第58図16） 本調査地区北側の埋没谷出土の鉢である。胴部中央に最大径をもち、口縁に向けて大きくカーブを描きながら内傾する。口縁端部は先細りに仕上げており、底部は最後に貼り付けている。外面はやや磨滅しているが、ヨコナデ調整で仕上げて



第58図 陣ヶ平西遺跡出土瓦質土器・磁器実測図

いる。内面底部はヘラ削り調整を行い、胴部はハケ目状の調整を行った後、胴部上半～口縁部にヨコナデ調整を施して仕上げている。口径15.5cm、胴部最大径20cm、底径13.4cm、高さ7.5cmである。火舎と考えられる。

磁器（第58図17・18） 17は本調査地区北側の埋没谷出土の碗の底部片で、伊万里系の染付である。見込みに2条の輪線を描き、中央部には花文と思われる文様を配している。18は古墳埋土出土の伊万里系の徳利の肩部と思われる破片で、外面は淡青白色、内面は淡灰色を呈する。外面には1条の輪線が描かれている。

（植林啓介）

注

- (1) 概要報告（年報XI）では、「窯体の中央部から南側では窯体の掘り方を検出していることから、窯体の南半分は半地下式であった可能性が強い」と述べたが、その後検討した結果、1号溝S D01沿いの北側に見られた傾斜変換点は掘り方と明確に判断できるものではなく、1号溝の痕跡で、1号溝がもう少し北側まで伸びていたと結論した。したがって、本焼成窯跡は基本的に地下式と見てよい。
- (2) 藤野次史「陣ヶ平西遺跡の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 XI 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、9～40頁、1990。

第3章 考 察

陣ヶ平地区は統合移転地（東広島キャンパス）の北端部に位置し、陣ヶ平山とその周辺に広がる山麓、低丘陵および谷部などからなる。これまでに、陣ヶ平山頂上平坦部を中心とする陣ヶ平城跡、陣ヶ平山南東麓の陣ヶ平遺跡第1地点、陣ヶ平山南麓の陣ヶ平遺跡第2地点、陣ヶ平山西麓と谷を隔ててその西側に広がる低丘陵地帯に立地する陣ヶ平西遺跡の4遺跡を確認している。陣ヶ平西遺跡については1991年に発掘調査を実施し、本書にその成果を収録した。また、本調査の成果に関連する1983年度および1989年度、1990年度の予備調査成果の一部についても合わせて収録した。陣ヶ平城跡、陣ヶ平遺跡第1地点、陣ヶ平遺跡第2地点は、分布調査、予備調査のみのため、時期や性格は十分明らかにはなっていないが、陣ヶ平城跡は尼子氏による鏡山城攻めの際の山城とされており、郭と思われる平坦面などが確認されている。陣ヶ平遺跡第1地点では古墳時代後期の集石遺構、陣ヶ平遺跡第2地点では弥生時代後期の遺物包含層が確認され、木炭層などの分布から隣接部に何らかの遺構の存在が推定されている。また、陣ヶ平山南西麓においても弥生時代および古代の遺物が出土しており、近接して遺跡が存在する可能性が指摘されている。これら予備調査の成果の詳細については、既刊の『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』を参照願いたい。

本書に収録した陣ヶ平西遺跡は、陣ヶ平山の西側に広がる低丘陵地帯の南部に位置し、標高240m前後の低丘陵頂部平坦面や低丘陵南西側緩斜面に立地している。検出遺構は、須恵器焼成窯跡群、住居跡群（集落跡）、古墳などで、須恵器焼成窯跡群と住居跡群は丘陵斜面の上下に隣接し、古墳はやや離れた丘陵頂部平坦面の南端部に位置している。須恵器焼成窯跡は3基検出し、1号・3号焼成窯跡が古墳時代後期、2号焼成窯跡が古代（奈良時代）に属する。集落跡は予備調査のみで、その全容を明らかにできないが、5～10軒程度の堅穴住居跡で構成されるものと見られ、須恵器焼成窯跡と同時期に存在したものと判断された。また、古墳についても集落跡、須恵器焼成窯跡と同時期と思われ、3者を有機的な関連をもって捉えることができる非常に貴重な例である。古代の遺構・遺物は2号焼成窯跡のみであり、調査範囲の中からは他に何も検出されなかった。西条盆地における古代の須恵器焼成窯跡の発掘調査は、高屋町東山窯跡、統合移転地内の東ガガラ窯跡に続いて3例目となり、県内でも数少ない貴重な資料となった。以上、陣ヶ平西遺跡の調査では古墳時代、古代（奈良時代）を中心として多くの成果を得ることができた。

ここでは、出土遺物の考察を行った後、調査の成果についてまとめたい。

第1節 陣ヶ平西遺跡の古墳時代須恵器焼成窯跡出土須恵器をめぐって

1. はじめに

古墳時代の須恵器焼成窯である1号須恵器焼成窯跡と3号須恵器焼成窯跡（以下、1号窯跡および3号窯跡と略す）の出土遺物について、主要な器種の分類とその特徴を検討し、さらに年代的な検討を行いたい。陣ヶ平西遺跡では古墳時代後期の須恵器が2基の窯跡からまとまって出土し、一括資料としても有効であるため、出土須恵器の編年的検討が可能である。さらに、近接する山中池南遺跡第2地点、平木池遺跡の出土須恵器との比較をすることで、西条盆地における古墳時代須恵器生産の様相を復元する手がかりにもなる。

出土時期は本報告の時期区分にもとづき、3号窯跡は一括して1期区分、1号窯跡の窯内出土のものは第1-1操業期、第1-2操業期、第2-1操業期、第2-2操業期（以下、それぞれ1-1期、1-2期、2-1期、2-2期と略す）の4期区分とし、あわせて5期区分を用いる。ただし、1号窯跡の場合、上記4時期のいずれにも帰属できなかった須恵器があり、その場合は第1操業期もしくは、第2操業期（以下、それぞれ1期、2期と略す）とする。また、前庭部、灰原および周辺の推積層出土須恵器のうち、同様に出土層位から帰属時期が判断できないものに関しては、前庭部・灰原・包含層として一括して区分しておく。

2. 3号・1号窯跡の生産須恵器器種

ここでは、まず各窯跡での生産須恵器について復元してみたい。3号窯跡に由来する須恵器（片）は、同窯内、前庭部、灰原、そしてC5区から出土している。また本調査区外の南側にも広がっていると思われる。1号窯跡に由来する須恵器（片）は、同窯内、前庭部、灰原そして、C4、C5、B4区に広く出土している。ただし、2号窯跡とその灰原やC4、C5区では、2号窯跡由来の須恵器と混在しており、すべてを明確に判別できない。特に甕（片）は多量にしており、また時期を特定できる属性が明確でないことから、その多くは分別しきれていない。ほかの器種については、整理段階において特徴的な形態を示すものはすべて確認しており、一定の形態的な判断をすることができた。帰属時期については、出土層位から時期が分かるものについてはそれに従い、そうでないものは整理・分析の結果を受けて帰属時期を検討した。

各器種の特徴と帰属時期については次節で詳細を述べるので、ここではどのような器種を生産したか概観しておきたい。陣ヶ平西遺跡の古墳時代の1号窯跡と3号窯跡は、検出

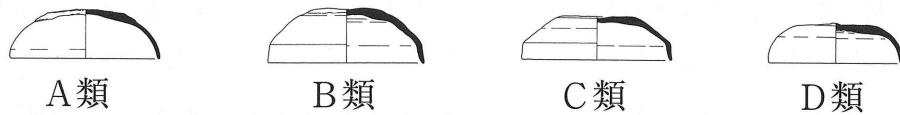
時の切り合いから、3号窯→1号窯の順で操業されたことが明らかになっているので、以下もその順に従う。

3号窯跡 蓋坏（坏蓋、坏身）、高坏、蓋、坏、鉢、短頸壺、甕がある。出土量から、蓋坏、高坏、甕が主要な生産器種であったと推定される。蓋坏と高坏を比べると高坏の出土点数が圧倒的に多い。甕の出土点数が最も多いが、完形復元できたものが無く、その形態については不明な点が多い。本報告で甕と報告した中に、横瓶が含まれている可能性がある。蓋にはつまみ付きのものが3点出土しているが、長頸壺などのようなこれらに組み合う器種が出土していない。つまみのない蓋（第63図137）は、第63図144の短頸壺と組み合うのかもしれない。以上のことから、出土須恵器は3号窯跡での生産須恵器器種の全容を表していないようで、少なくとも横瓶や長頸壺などの器種が増えると推測される。

1号窯跡 蓋坏（坏蓋、坏身）、高坏、蓋、坏、鉢、埴、平瓶、甕、横瓶がある。出土点数から、蓋坏、高坏、甕が主要な生産器種であったと推定される。また、3号窯跡同様に、蓋坏と比べ高坏の比率が圧倒的に高い。出土点数では甕が最も多く、甕の形態は数種類あるようである。その他の器種の個体数は非常に少なく、蓋、坏、鉢、埴、壺は1、2点ずつしかない。生産器種は、上記の9種類程度と思われるが、その他の器種の生産比率は本来もう少し高かったと推測される。しかし、例えば坏や鉢と分類したものの、それぞれで型式学的な系譜関係を認めることができなかったため、それに独自性のある製品を製作しているようであり、大量生産はしていなかったと言える。

このほかに、3号窯跡と1号窯跡から、U字形をした土製品が3点出土している。これらは、ほぼ同じ大きさでU字形を呈していることでは共通性があるが、やや規格性に乏しい。成形は手捏ねで、器面の調整は粗く、ただし、明らかに意図的に製作されたものである。機能を表す部位や使用痕は認められず、出土位置からも用途などを推測できる性格は見出せなかった。現在のところほかに類例は見当たらず、ここでは推測される用途を2例挙げておく。ひとつは、土製鍬先模造品の可能性である⁽¹⁾。U字形を呈した土製品で、手捏ねで製作され器面には凹凸がある。U字形の内側にはV字形の溝が掘り込まれている。鉄製品と同形態のミニチュア土器があることから、祭祀用の鍬先模造品と考えられている。兵庫県丸子窯跡、岡山県寒田4号窯跡に類例がある⁽²⁾。本遺跡出土例はこれらと類似点が多いが、ただし内側にV字形の溝がない。もうひとつは、焼台の可能性である。「馬の爪」と呼ばれる焼台には多様な形のものがあるが、こうしたU字形のものも見られる。須恵器窯跡から出土していることと、製作が粗雑で製品として考え難いことから、操業時に使用する何らかの道具のひとつとして検討する必要もある。

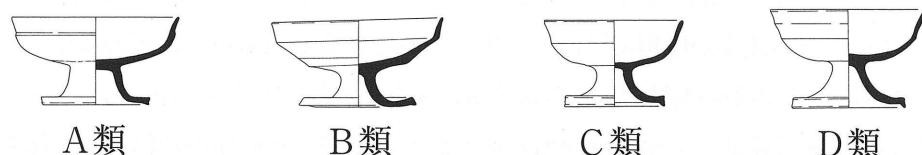
坏蓋の分類



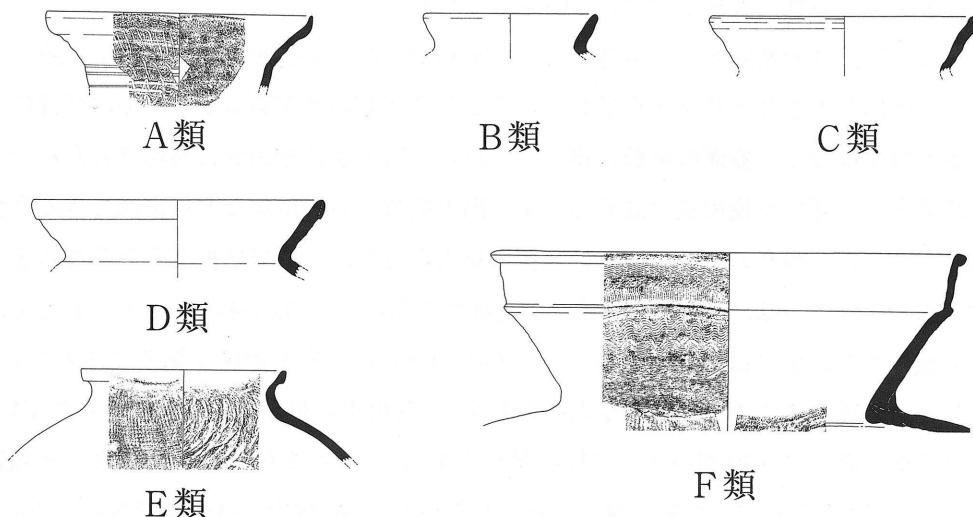
坏身の分類



無蓋高坏の分類



甕の分類



第59図 陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器焼成窯跡出土須恵器分類概念図

以上、生産須恵器器種について概観した。3号窯跡、1号窯跡とともに、甕（片）の出土量が最も多いが、個体数から見ると高坏が最も多い。当然、本遺跡出土須恵器は基本的に失敗品であり、生産器種の比率を直接表していないが、失敗品の点数から類推して、蓋坏、高坏を主体にし、甕そして一定量のほかの器種を生産していたことが窺える。次に、その主体を占める蓋坏、高坏、甕について、見ていくことにする。

3. 各須恵器の分類

まず、蓋坏、高坏、甕の順に分類を行い、出土の時期的変遷を整理する。

1) 蓋坏

蓋坏には坏蓋と坏身があり、別々に検討する。

1) - 1. 坏蓋の分類

天井部から口縁部にかけての形状をもとに分類を行った（第59図）。特に、天井部から体部にかけて、そして口縁部の形状を主に扱った。成形や調整の方法、回転の方向、天井部の切り取り法については、別に述べることにする。以下の4つに分類した。

A類 土饅頭形を呈し、天井部から口縁部まで緩やかに湾曲して、口縁端部は垂下している。

B類 天井部と口縁部の境に緩やかな稜を形成する。口縁端部はわずかに外反し、丸く収める。

C類 天井部と口縁部の境に明瞭に稜を形成する。天井部は比較的平坦で体部も直線的である。口縁部は短くほぼ垂直に下がり、口縁端部はわずかに外に向いている。器高は扁平になる。

D類 天井部は平坦で広く、天井部から湾曲後はわずかに内湾気味に口縁部にいたる。口縁端部は先細り気味である。天井部はすべて回転ヘラ切り未調整で、ほかは回転ナデ調整を施している。

以上の分類をもとに、それらの出土時期を見ておきたい（第60図）。A類は3号窯跡（106）からのみ出土している。B類は3号窯跡（107～109）、1号窯跡2-2期（2）、1号窯跡2期（1）から出土している。C類は3号窯跡（110、111）、1号窯跡2-1期（3）、1号窯跡2-2期（4）から出土している。D類は1号窯跡2-1期（5・8）、1号窯跡2-2期（7、10）、1号窯跡2期（6、9）から出土している。

A類は、天井部から口縁部まできれいな弧を描くように成形している。A類は本報告作製時点では3号窯跡からのみ確認されている。1号窯跡1期出土の須恵器（片）にも存在

坏蓋				
	A類	B類	C類	D類
1号窯跡	包含前庭部・灰原			
	2期		1	6 9
	2-2期		2	4 7 10
	2-1期		3	5 8
	1-2期			
	1-1期			
3号窯跡		106 107 108 109	110 111	

第60図 陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵
(図中の番号は、第26図・

坏身

A類	B類	C類
 11  12	 19	 22
	 16	 23
 13	 17  18	 21
		 20
 14  15		
 112  113  114  115		
		

器焼成窯跡操業期別出土蓋坏変遷図

(第43図の番号に一致する。)

する可能性を残している。また、天井部は切り離した後、不定方向のナデ調整により粗雑に整えている。こうしたあり方は、他のものにはあまり認められない。B類とC類は、ともに3号窯跡と1号窯跡2期に出土する。両者は、体部の稜に代表される口縁部から体部にかけてのプロポーションが大きな違いである。さらに、器高と口径との関係、つまり扁平さも重要で、口径が同じでもC類のほうが器高が低い。成形の基本が異なることから、両者は系統が異なると捉えられる。なお、B類には、口縁部の外反具合や稜の高さから細分が可能かと思われるが、出土量の少なさと焼きひずみの可能性から判断の基準に客觀性を欠くために、ここでは一括した。D類は他と比べ小型化したものである。口径約10.5cm、器高約3cm程度の坏蓋で、全体のプロポーションや調整方法もほぼ類似し斎一性は高い。

3号窯跡で、A類、B類、C類の坏蓋が製作され、1号窯跡1期でも比率や量は異なるが、引き続き3種類が製作された。そして、1号窯跡2期になると、A類に替わってD類が生産され始めたと推測される。

1) - 2. 坏身の分類

口縁部の形状をもとに分類を行った(第59図)。特に立ち上がりの高さと受け部端部の形状によく変化が現れている。

A類 底部から体部にかけて弧状を呈している。立ち上がりは受け部よりも高く突出している。内傾しているが、形状はわずかに外反している。受け部端部は水平に外に張り出し、やや尖り気味である。

B類 立ち上がりは低く、受部からほんのわずかに外に出る程度である。立ち上りは折り返しにより作られている。体部と受け部との境は緩やかに外湾し、受け部端部は上方を向いている。

C類 立ち上がりは低く、受部からほんのわずかに外に出る程度である。立ち上りは折り返しにより作られ、内面に丸みを帯びた稜を持つ。受け部外面は湾曲し、端部は上方を向いている。

以上の分類をもとに、それらの出土時期を見ておきたい(第60図)。A類は、3号窯跡(112~115)、1号窯跡1-1期(14, 15)、1号窯跡2-2期(13)、1号窯跡灰原(11, 12)から出土している。B類は、1号窯跡2-2期(17, 18)、1号窯跡2期(16)、1号窯跡前庭部・灰原(19)から出土している。C類は、1号窯跡2-1期(20)、1号窯跡2-2期(21)、1号窯跡2期(23)、包含層(22)から出土している。このことから、A類が最も古く、B類、C類へと時期的に推移することが分かる。ただし、B類とC類は1号窯跡2期に並存している。また、B類の19やC類の22は灰原出土のもので、1号窯跡1期の可能性がある。

3号窯跡ではA類のみの出土であったが、1号窯跡1期にB類、同2期にC類が加わり、徐々に増えていくことになる。A類は口径が13~15cmであったが、C類では口径が約10~11cmになる。異なる大きさのものも製作される。特にC類については口径だけでなく器高も約3cmに集中しており全体のプロポーションや調整方法も類似し、斉一性が高い。このことから壺蓋D類と対をなすと考えられる。ところで、壺身口縁部の立ち上がりと受け部の形態は、A類、B類、C類と少しずつ変異したと思われる特徴を示している。すなわち、立ち上がりは徐々に低くなり、受け部端部の向きは水平から上方へ変わる。壺身は、A類からC類へ変化しながら出現し、なおかつ1号窯跡2期では、すべてが生産されたのである。

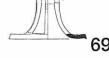
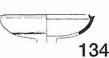
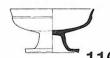
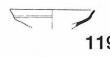
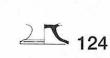
最後に、成形後に回転台から切り離す際の技法についても見ておきたい。壺蓋と壺身ともに、基本的には回転ヘラ切り後、未調整か若干の調整をしている。所謂回転ヘラ削り調整は、本遺跡出土蓋壺には見られなかった。切り離す時の回転ヘラ切りは、回転台をゆっくりと回しながら、底部付近にヘラ状工具を少しずつ入れて切り取ると想定される。その結果、切り取り面は、外側から中心に向かって渦巻き状の切り取り痕が残る。こうして切り取った後、そのまま乾燥を行うもののほかに、若干の調整を施しているものがある。例えば、第60図14・106は、切り取り面を粗くナデで余分な粘土を均している。106は粗雑にナデ調整を行ったようで、所々に擦痕も観察できる。3・9・18・19・109・114・115は、切り取り面と体部との境を面取りしながらナデ調整を行っている。9・18・23は余分な粘土が底部に残留しており、その部分をナデで整えている。こうしたものには、切り取り面の縁辺部のみを簡単に調整する意図があり、切り取り部の中央に回転切り取り痕がそのまま残っている。基本的には、切り取り後、特に調整を施すことはなかったようである。

2) 高壺

完形復元できたものが比較的多かったため、全体形状から分類することができた。さらに、これによって、破片についてもどの器種のどの部位に相当するのかを推定できたことから、積極的に分類することにした。高壺は、まず無蓋のものと有蓋のものとに大きく分けることができる。

2) - 1. 有蓋高壺

出土数は非常に少ない。復元できたものは本報告で図化した3点がすべてである。破片を観察しても有蓋高壺と判別できるものはわずかであった。胎土は均一な粘土に約1mmの大砂粒が均等に混在したもので、無蓋高壺と比べ良質である。器面の調整は相対的に丁寧な感はあるが、搔き目調整や透かし孔の切り取りが粗雑である。一定量を生産していたとは考えられるが、製作における質は重視されていたとは言い難い。すべて長脚で、脚長は

		有蓋	無蓋	
			A類	B類
1号窯跡	前庭部・灰原・包含層			 24  32  37  28  33  38  29  34  39  30  35
	2期			
	2-2期			 40
	2-1期			
	1-2期			
	1-1期			 27  31  36
3号窯跡			 116  121  117  122  118  123  119  124  120  125	 126  127

第61図 陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵
(図中の番号は、第27~29図・

無蓋			脚部
C類	D類	その他	
 41  43  47	 49  52  55		
 46  51	 53  56  57	 60  62  64	
 44  45	 50  58  59  61	 63  65  66	 67  70
 42  48			
		 0 30cm	 132  133  135  136

図遷坏麥出土期別操業跡成窯燒器

第44図の番号に一致する。)

8 cm前後である。134は扁平な坏部形状で、立ち上りが受け部より少し上に出ている。また、底部外面には放射状の搔き目が施されている。68の坏部形状も底が浅い扁平なもので、134と類似している。しかし、受け部が134よりもやや外側に突き出ている。底部外面は、回転搔き目調整が施されている。1号窯跡灰原から出土しており、1号窯跡1期に帰属する可能性がある。このほか、大きく透かし孔を作出したもの(69)があり、有蓋高坏の脚部になると思われる。1号窯跡1-2期に帰属する。

2) - 2. 無蓋高坏の分類(第59図)

すべての器種のなかで、最も出土個数が多いものである。すべて短脚の形態である。分類にあたっては、坏部と脚部の形状を主に利用し、その他の属性については個別に述べることにする。ところで、高坏は坏部と脚部から構成される。坏部を成形後、逆さにしてその底部に脚部を接合する。坏部も脚部も輻轆成形と考えられ、回転台からの切り離し痕やその後の調整が観察できるものもある。

A類 体部に稜があり、その上が凹線状あるいは段状を呈すものである。底が浅く、平底に近い形状をし、体部との境からあまり外に開かずに上方に立ち上がる。脚部の基部径はやや太く円筒状であり開かず脚端部にいたる。脚裾は湾曲してそのまま脚端部にいたるもの(第61図117, 120, 121, 124; 以下、第61図を省略)と、やや広い脚裾部を持つもの(116)とがある。後者は成形後、脚部が沈んで形成されたものと思われる。脚端部は凹線状に深く凹んでいるもの(117, 120), 緩やかに内湾しているもの(116, 121, 122, 124, 125)がある。

B類 坏部は体部の口縁部近くに稜があり、稜から口縁端部までは比較的短い。口縁部は直線的で、やや外傾するもの(126), やや内傾するもの(31)もあるが、基本的には直立気味である。口縁部の向きが若干異なるのは、焼成に由来すると思われる。脚部の基部は細く、脚端部に向かって湾曲しながら大きく開き、脚端部に向かうにつれて器壁は薄くなる。端部は凹んでいるもの(38, 39), 平滑のもの(2, 34)があるが、わずかに内湾しているものが大半である。

C類 坏部は体部に明瞭な稜があり、口縁部は外反しながら開く。全体の形状は口が広く、体部は湾曲している。底部内面にはすべて不定方向にナデ仕上げが見られる。脚部の基部から大きく湾曲して開く。脚裾部も湾曲しそのまま脚端部にいたるもの(44, 45, 51, 52, 54, 55)と、脚裾部が平坦なものあるいは下がっているもの(41~43, 47~49)がある。後者は成形後重みで沈んでしまったものと思われる。また、脚端部には非常に分厚いもの(41, 42, 43, 47, 48, 49, 51, 52)と

薄いもの（44, 45, 54, 55）とがあり、前者が多い。脚端部形状には垂直なものと、やや斜めになっているものがある。下部はすべて垂下している。

D類 坏部の体部に稜があり、稜と口縁部との間に回転ナデ調整で形成した膨らみがある。意図的かは不明であるが、製作方法に由来する属性である。口縁部は外反あるいは直線的に開く。全体的な形状はC類と類似するが、口径12.5cm前後、底径9cm前後で非常に規格化されている。底部内面にはすべて不定方向のナデ仕上げが見られる。脚部の高さがほかと比べやや高く、基部からハの字状に開く。直線的に開くものもある。すべて脚裾部が広く、脚端部の高さは低く、そして端部は平坦あるいはわずかに凹んでいる。下部はすべて垂下している。

その他 67は坏部で、ほぼ平底で体部は底部からほぼ垂直に立ち上がる。体部の器壁は均一な厚さで、丁寧に成形・調整されている。体部下半には3本の凹線が施されている。一見、坏に分類されるものであるが、底部に脚部との接合部がわずかに残っており、高坏に分類した。完形品がないため、脚部の形状が不明である。脚部片の内、坏部の形状が不明なものがある。このなかで、70の脚部基部径と67の基部径は一致し、器面調整や胎土が類似している。また、操業時期も同じであり、接合する可能性がある。70は、脚裾部が開き、脚部中間がややすぼむものである。脚端部は断面隅丸三角形を呈している。脚部の長さが7.6cmあり、本遺跡では長脚の類である。133は器高が口径14.1cm、脚長8.9cmの長脚の形態である。坏部が湾曲し、脚は円筒状をしている。基部付近の坏部や脚部は非常に厚い。こうした形態的特徴は、ほかの高坏には見ることができない。3号窯から出土していることから、さらに前段階の様相を残していると考えられる。

以上の分類をもとに、出土時期を見ておきたい（第61図）。A類は、すべて3号窯（116～125）から出土している。B類は、3号窯跡（126～128）、1号窯跡1～1期（27, 31, 36）、1号窯跡2～2期（40）、1号窯跡灰原（24, 28～30, 32～35, 37～39）から出土している。C類は、1号窯跡1～2期（42, 48）、1号窯跡2～2期（44, 45, 50）、1号窯跡2期（46, 51, 53, 54）、1号窯跡灰原（49, 52, 55）、1号窯跡包含層（41, 43, 47）から出土している。D類は、1号窯跡2～2期（58, 59, 61, 63, 65, 66）、1号窯跡2期（56, 57, 60, 62, 64）から出土している。その他のものは、1号窯跡2～2期（67）から出土している。

無蓋高坏を中心に見てみる。A類はすべて3号窯跡出土であった。A類のなかでさらに細分が可能と思われる。A類以外の高坏とは全体形状および細部の属性に至るまで基本的

な相違が認められ、3号窯跡を特徴づけるものと捉えられる。B類は基本的には口縁部形状を主な分類の指標にしたが、これはほかの属性の変異が大きかったためである。B類はおそらくいくつかの型式を包括していると思われる。口径が11cm前後のものと13cm前後のものとに分けることができそうである。また、31は坏部下半の外面が波打つような凹凸を意図的に成形しているようで、細分できるかもしれない。B類の出土時期は、3号窯跡から1号窯跡2期まで存在しているが、1号窯跡では灰原からの出土が比較的多い。このことは1号窯跡1期での製作が多い可能性を表している。3号窯跡から1号窯跡1期にかけて主に生産されたと考えられる。一方、C類とD類は1号窯跡のなかでも2期に出土が集中する。特にD類はすべて1号窯跡2期のものである。D類は、C類の体部の稜と口縁部の間がやや広くなったものでC類を祖型にしているのは明らかである。これに出土層位を加味すると、C類→D類の型式変化には異論はないであろう。D類のなかには、63・66のように脚高がやや高いものがある。脚高は5.5cmで、ほかのものよりも約2cm高い。C類には脚長5cmに達するものではなく、おそらくD類のなかでも新しい様相を示していると考えられる。その他に分類している133・132・67はこれらとはまったく系譜を異にするものである。133は、形態、胎土、調整ともに異質で、相対的に精品である。132は、坏部の底部はヘラ削り調整された後、脚を接合しているものである。67は坏に分類したものと同形態の坏部を呈しており、坏を高坏の坏部に転用したと考えられる。また、135・136はここでは高坏に分類しているが、その上部形態がまったく不明なものもある。135は脚裾が2段の段状を呈しており、丁寧な成形と調整である。136は脚裾がなくハの字に広がり、脚部に幅が広い透かし孔が施されたものである。陣ヶ平西遺跡の生産須恵器にはA類からD類までの基本的な生産高坏があるほかに、いくつかの単独で特徴のある製品があると説明できる。有蓋高坏は3号窯跡と1号窯跡1期に出土しているが、1号窯跡2期に入ると生産されなくなると考えられる。透かし孔の製作は粗雑さが目立つが全体は相対的に丁寧である。

3) 瓢

分類には口縁部形状をもとに行い（第59図）、その他の属性はそれぞれに述べることにする。

A類 口頸部はラッパ状に大きく開く。口縁部上半は湾曲し、口縁端部は上を向く。

B類 口唇部は肥厚しない。口縁部の形状は、頸部がくの字に折れ曲がり、口縁部にかけて直線的に開くものである。ほぼ均一な厚さに成形されている。口径が約12cmのものである。

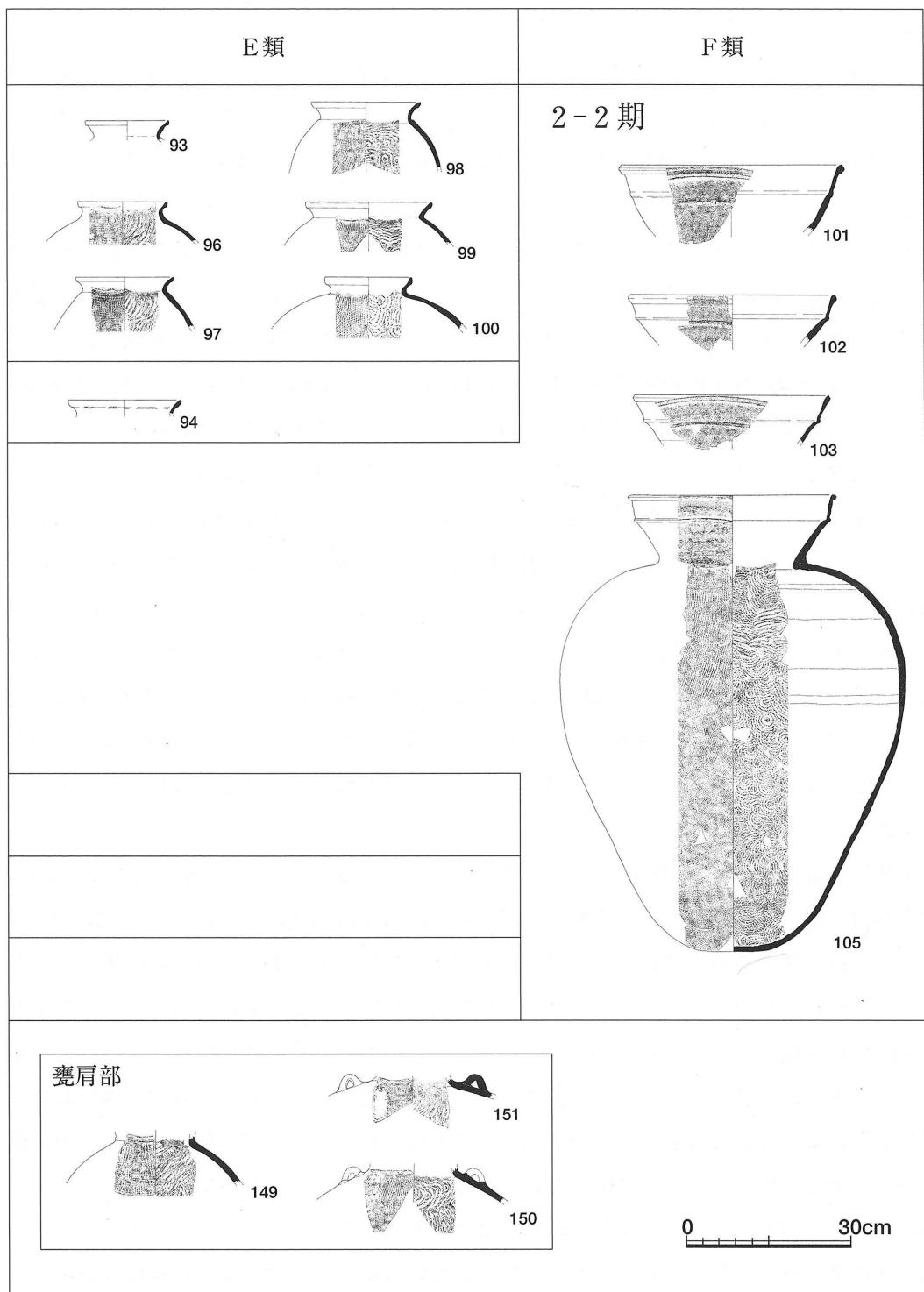
- C類 口唇部は肥厚しない。口頸部はハの字状に直線的に開く。B類よりも大型で口径は33cm前後ある。
- D類 口縁端部を外側に折り返して肥厚させたものである。折り返し後はそのまま貼り付け、口縁端部を丸く収めている。口縁端部がわずかにすぼんでいるものもある（第62図91）。口径は22cm前後に集中する。
- E類 口唇部を肥厚させたものである。断面観察では折り返しの痕跡はなく、粘土紐貼り付けの可能性が高い。肥厚部の厚さも比較的厚く、また外面の幅は狭くなっている。厚さと幅が近似値のものが多く、断面が方形に近い。口径16cm前後のものと20cm前後のものとがある。
- F類 口縁部の形態が二重口縁状のもので、口径が35～40cmあり、大型のものである。頸部は大きく湾曲し、口縁部下半のほうが大きく開き、中間付近でやや上方へ角度を変えて口縁端部にいたる。その中間付近は粘土を折り曲げて角度を変えているため、外面は突帯状の稜を、内面は凹線を形成している。口唇部付近でやや外反し、外側に折り返したり、粘土紐を貼り付けたりして肥厚させている。外面は上半と下半を文様帶として、それぞれに1段もしくは2段の櫛描き波状文を施している。色調は黒褐色を基調とし、胎土は2～3mmの比較的大きい砂粒を含む。
- 以上の分類をもとにして、それらの出土時期を見ておきたい（第62図）。A類は、3号窯跡（147）、1号窯跡灰原（86）から出土している。B類は、1号窯跡1-1期（83）、1号窯跡2期（84）、包含層（80～82）から出土している。C類は、3号窯跡（148）、1号窯跡2-1期（85）から出土している。D類は、1号窯跡1-2期（87）、1号窯跡2-1期（91）、1号窯跡2-2期（95）、1号窯跡2期（92）、1号窯跡前庭部（90）・灰原（89）・包含層（88）から出土している。E類は、1号窯跡2期（94）、1号窯跡前庭部（97・99）・灰原（96）・包含層（93・98）から出土している。F類は、1号窯跡2-2期（101～103・105）から出土している。

このほかに、双耳を持つ肩部（150・151）が3号窯跡から出土している。

A類は、口頸部形状がラッパ状に大きく開くことを取り上げて分類したものである。しかし、細部の形状はそれぞれ異なっている。147は口縁部が細くすぼまり、外面には櫛状工具による刺突文やヘラ状工具による平行沈線文を粗雑に施している。86は口唇部が平坦で外面には数条の凹線が施されている。また、文様の特徴とその施文の粗雑さは、F類の口縁部文様にも共通し、また後述の山中池南遺跡第2地点出土の甕にも見られるものである。ところで、147の頸部は復元すると約33cmと推定できる。3号窯跡には、149～151の

		A類	B類	C類	D類
1号窯跡	前庭部・灰原・包含層		80 81 82		88 89 90
	2期		84		92
	2-2期				95
	2-1期			85	91
	1-2期				87
	1-1期		83		
3号窯跡		147		148	

第62図 陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵
(図中の番号は、第30~34図・



器焼成窯跡操業期別出土甕変遷図

(第46図の番号に一致する。)

ように口縁部形態の不明な甕肩部があるが、これらの頸部径とほぼ一致することから、147は頸部がすぼまる形状を呈した可能性がある。

B類は口径がほぼ12cmで、口縁部の形態・調整法は共通しており、規格性が高いものである。1号窯1期、2期ともに一定量を占める。同じくD類も口径がほぼ22cmで、両者ともに形態・調整法ともに規格性が高い。B類の胴部形態や大きさは復元できないが、D類が95の事例で分かるように復元器高約50cmの甕であることからして、それより口径が小さいB類は小型の甕と推測できる。ただし、D類の口縁部は、B類の口唇部を外側に折り曲げて成形したもので、両者の関係は非常に近い。E類もB類やD類ほどではないが、器壁が薄く丁寧に成形・調整している。100は、このD類と同じ口縁部を持つ横瓶である。D類としたなかで頸部下の形態が不明なものには、甕のほかに横瓶が存在する可能性がある。横瓶は頸部以下の形状によって判別されるものであるので、本報告では口縁部のみのものはすべて甕として扱った。しかし、D類と横瓶の口縁部の製作が共通することは、逆にB類やD類とは異なる規範で製作されたことを言うことができる。型式学的には、B類 ⇄ D類 ⇄ E類も考えられるが、上記の事柄と出土時期に明確な前後関係が看取できないことが理由に挙げられる。今回、甕E類と分類したなかには、横瓶を内包している可能性がある。口縁部形状だけでは甕と同形であり、区別はできない。横瓶と判断できる主な属性には、胴部形状（俵状）とその成形・調整方法がある。また、器壁は甕と比較してやや薄く、タタキ目もやや細かいという特徴がある。しかし、後者については絶対なものではなく判断基準としては弱い。ここでは、本来横瓶の口縁部も含まれているかもしれないことを指摘しておくにとどめる。

最後にF類は、大きさ、形態、特に口縁部形態とともに、他のものと系統が異なる甕である。大きさは105を例に見ると、口径36.2cm、器高82.4cm、最大胴部径62.4cm、口縁部高12.6cmである。陣ヶ平西遺跡および周辺遺跡出土例のなかでは最大のものである。F類としたものは、ほかに3点（101～103）を報告しているが、すべて口縁部のみである。その大きさ（口縁部高）は8.5cm～12.1cm以上で、105とほぼ同じである。このことから、101～103も同大の甕であったと考えられる。口唇部はすべて外側に肥厚している。これは口縁端部を短い幅で外に折り曲げて成形したものである。この幅で折り曲げた口唇部はF類のみの特徴である。また、胎土には2～3mm大の白色の砂粒を多く含み、一見してほかの類型とは異なるものを使用している。しかし、口縁部文様に共通点を見つけることができる。突帯の間の文様帶には、横位の波状文が2段に施されているが、波状文の間に横位に櫛を用いた連続する列点文がある。この列点文は、3号窯跡出土A類に見ることができる。また、山

中池南遺跡第2地点でも、特に甕の口縁部に認められる。以上の結果、各類は大きさやプロポーションが異なることが明らかになった。今回はこれらを甕に一括して取り扱ったが、本来はそれぞれに目的や用途が異なる器種・形式であったと考えられる。

4) その他の器種（第63図）

ここで、蓋坏、高坏、甕以外の器種にも触れておきたい。つまみ付の蓋が3点出土しているが、これらはすべて3号窯跡の出土である。口径が9.8cmと11.2cmのもので、天井部には搔き目調整を施している。その口径と対応する坏身がないこと、1号窯に類例の出土がないことから、坏蓋ではなく、壺などの蓋と判断した。ほかに、天井部に搔き目調整を持つ蓋がある（137）。天井部と体部の境がくの字に折れ曲がり、明瞭に稜を持ち、天井が高いことが特徴である。回転ナデによる調整は丁寧である。また口径や天井の高さが口径や口縁部の高さに近いことから、144のような短頸壺の蓋の可能性がある。

鉢には3種類がある。口径約12cmの小型の鉢、口径18.3cm、器高10.1cmのやや大きめの鉢と口縁部がわずかにすぼまる鉢である。142は、底部が焼成時にたわみ底が深いようになっているがもともとは73の底と同じ程度の深さと推測できる。この両者は体部外面に横位に凹線が施され、凹線より上の口縁部はわずかに内傾したのち、わずかに外反する共通性を持つ。前項の3器種以外で3号窯跡と1号窯跡の類似性が見られる数少ない事例である。

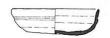
壺、短頸壺、平瓶は、3号窯跡か1号窯跡のどちらかでしか出土しておらず、2つの窯での関係性は明らかではない。しかし、用途不明のU字形土製品は2つの窯で出土している。形態が大きく変化することなく、2つの窯で同じ用途があったことは疑いない。

4. 陣ヶ平西遺跡出土須恵器の編年

前項では、蓋坏（坏蓋・坏身）、高坏、甕について、分類と操業期別の変遷を中心に論じた。これをもとに、ここでは陣ヶ平西遺跡全体での須恵器の編年を行う。

3時期に分期することができる（第64図）。I期には3号窯跡出土須恵器が相当する。II期には1号窯跡1期出土須恵器を中心とし、III期には1号窯跡2期出土須恵器を中心とする須恵器が相当する。

I期の特徴：蓋坏の坏蓋はA類、B類、C類の3類がある。それに対して坏身はA類のみであることから、未発見のものがあるか、あるいはA類もさらに細分できるかもしれない。高坏は、有蓋高坏と無蓋高坏が生産される。脚長8～9cmのやや長脚のものがある。主体は無蓋高坏の脚長約3～4cmの短脚のものである。甕は生産されている種類が非常に少なく、A類とC類とした2種類だけである。ただし、ほかのB類、D類～F類としたも

		蓋	壺・鉢
1号窯跡	包前庭部 灰原	 76	
	2期		
	2-2期		 72
	2-1期		 73
	1-2期		
	1-1期		 74
3号窯跡		 138  139  140  137	 141  142  143

第63図 陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器焼成窯跡
(図中の番号は、第29図・

壺・堺	平瓶	その他
		
	 	
		
		

操業期別出土蓋・堺・鉢・壺・平瓶ほか変遷図

(第45図の番号に一致する。)

	蓋坏（坏蓋） 蓋坏（坏身）	有蓋 高坏	無蓋高坏
I期	 	 	
II期	 		
III期	 		

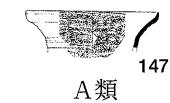
第64図 陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器編年図

のは、前後段階や同時期のほかの遺跡には出土しており、陣ヶ平西遺跡に特有の特徴であろう。

II期の特徴：蓋坏の坏蓋はB類が主体を占め、A類とC類が併存する。坏身はA類が存続し、おそらくB類も出現し始めると推定される。高坏は透かし孔を持つ有蓋長脚高坏の生産の最後の段階である。短脚の高坏には、A類がなくなり、C類が出現する。甕はB類～F類までの5種類が生産されている。I期とは大きく異なる点である。

III期の特徴：蓋坏の坏蓋はA類が生産を終了し、D類が出現する。B類とC類と併せて3種類が併存する。坏身はA類～C類の3種類がある。坏蓋D類の口径は約10.5cm、坏身

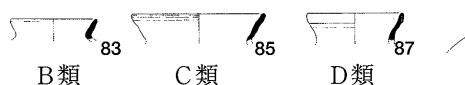
甕



A類 147



C類 148



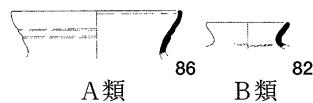
B類 83

C類 85

D類 87

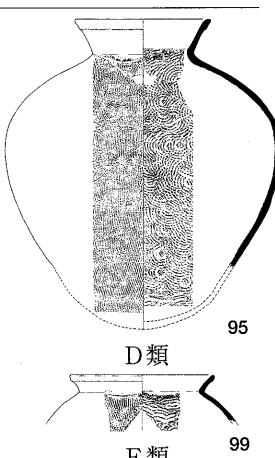


E類 96



A類 86

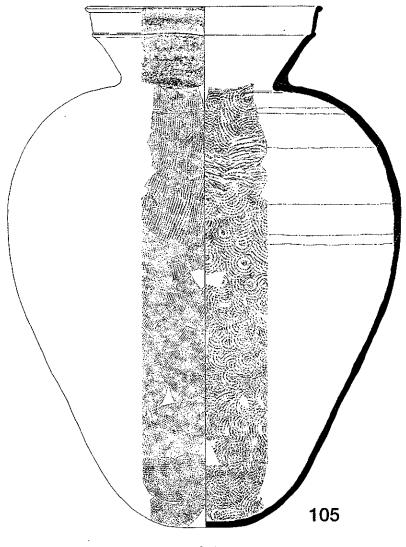
B類 82



D類

0 30cm

99



105

C類の口径は約10cmで、両者は上下にセットになるものである。高坏は、透かし孔を持つ有蓋長脚高坏が生産されなくなる。無蓋短脚高坏はB類がなくなり、D類が出現しC類と併存する。D類のうち、脚長が5cm前後に長くなるものが出現する。甕はII期の構成を基本的に踏襲している。

陣ヶ平西遺跡出土須恵器の編年の画期は、陣ヶ平西遺跡の固有の性格も有する。II期は、すなわち1号窯跡操業の開始期に相当する。II期に甕生産の種類が増加することは、操業にあたり生産計画がI期と変化したことを表している。同時に、蓋坏や高坏でも新しい形態が出現しており、技術的变化も見て取れる。しかし、蓋坏や高坏の形態変化で分かるよ

うに、同じ工人集団が継続して生産したと考えられる。一方で、従来の全国編年に対応する画期も見られる。Ⅲ期にいたる時に透かし孔付きの有蓋高坏が見られなくなることや蓋坏（坏蓋D類・坏身C類）の再小型化は、Ⅱ型式6段階の指標⁽³⁾である。Ⅲ期の画期が全国的に現れる須恵器生産の変化に対応していることになる。そうすると、Ⅱ期は1号窯操業という陣ヶ平西遺跡の特徴と考えられると同時に、Ⅱ型式5段階の変化の一端を表している可能性が出てくる。Ⅰ期の開始がⅡ型式5段階のどのくらいの時期かは現状では明らかにできないが、少なくともⅠ期とⅡ期はⅡ型式5段階後半内の変化と言える。

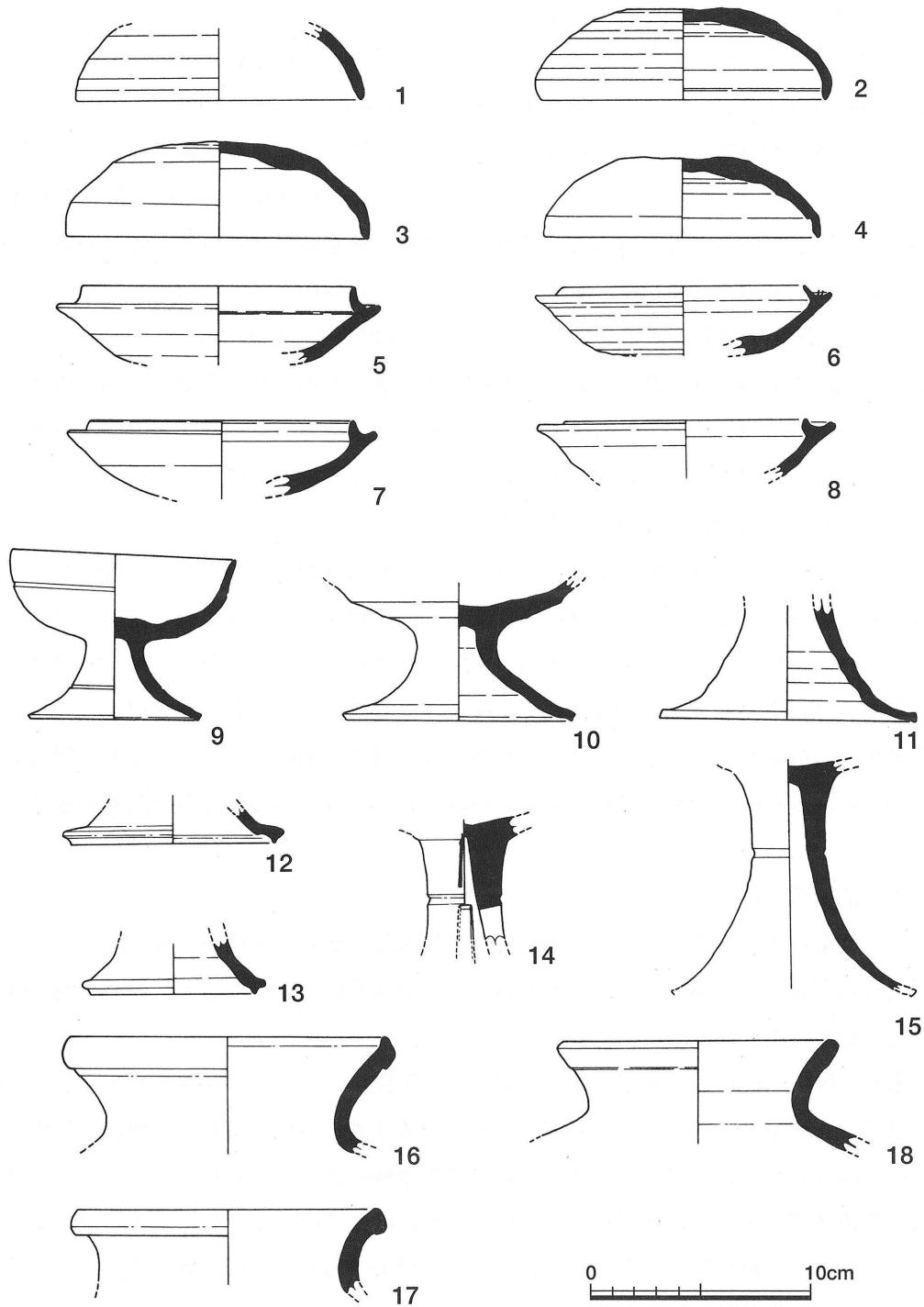
5. 平木池遺跡・山中池南遺跡第2地点との比較および年代的位置づけ

陣ヶ平西遺跡から南に数百m離れた鏡山西麓に同時期の山中池南遺跡第2地点がある。また、その東側の段丘上に同時期とされる集落遺跡である平木池遺跡がある。前者は須恵器焼成窯跡と鍛冶工房を擁する生産遺跡である。後者は住居跡23軒が検出されている集落遺跡である。いずれも一定量の須恵器を出土しており、陣ヶ平西遺跡と同時期の遺跡として比較検討しておく必要がある。この3つの遺跡については以前に比較検討したことがある⁽⁴⁾が、陣ヶ平西遺跡は年報報告段階の資料を用いていたために、本報告に際して再度言及したい。

1) 平木池遺跡と山中池南遺跡第2地点の出土須恵器の特徴

平木池遺跡の出土須恵器（第65図） 大多数を蓋坏が占める。高坏の資料が少ないために、他の遺跡と同等に比較ができないが、ふつう高坏が副葬品として使用されることを考慮すると、蓋坏が主体を占めることは、平木池遺跡が集落遺跡である性格をよく表している。蓋坏の坏蓋はほとんどが土饅頭形で口縁部は内湾するもの（1）、内湾して口唇部内側に稜を形成するもの（2）、そのまま垂下するもの（3）がある。また体部に稜を形成し口縁部は内傾するもの（4）もある。天井部は回転ヘラ切り後回転ヘラ削り調整を施すものが主体で、回転ヘラ切り後未調整のものはわずかである。坏身はすべて立ち上りが受け部よりも上に突き出ている。高く突き出るもの（5～7）から、わずかに突き出るもの（8）がある。底部の調整は、坏蓋と同様に回転ヘラ切り後回転ヘラ削り調整を施すものが主体である。

出土の高坏のうち、完形のものは9のみである。小型のものである。しかし、10・11のように脚部径が約11cm以上のものが主体と考えられる。ただし、特に坏部の口縁部形態が不明である。また、脚端部は水平に張り出し、脚端下部が垂下するもの（12・13）がある。長脚高坏には、一部切り込みだけのものもあるが透かし孔を持つもの（14）もある。



第65図 平木池遺跡出土の主要須恵器

甕は口径が13cm前後の小型のものが多い（16～17）。口縁部は逆ハ字あるいは緩やかに外反し、口縁端部は外に肥厚している。

中山池南遺跡第2地点の出土須恵器（第66図）　蓋坏と高坏がほぼ同じ割合で出土している。蓋坏の口径は11～12cmで、口縁部は内湾し、天井部は土饅頭形をしたもの（1～3）が多い。口縁部が外反するもの（2）もあるが比率は低く、ほとんどが内湾するか垂下している（1・3）。天井部は基本的に回転ヘラ切り未調整であり、切り取り後ヘラ状工具でわずかに調整しているものもある。これらは陣ヶ平西遺跡A類とB類に近いものと思われる。坏身は立ち上がり受け部よりも上に突出しているもの（4）とほぼ同じ高さのもの（5・6）がある。底はやや浅く、底部は回転ヘラ切り未調整である。

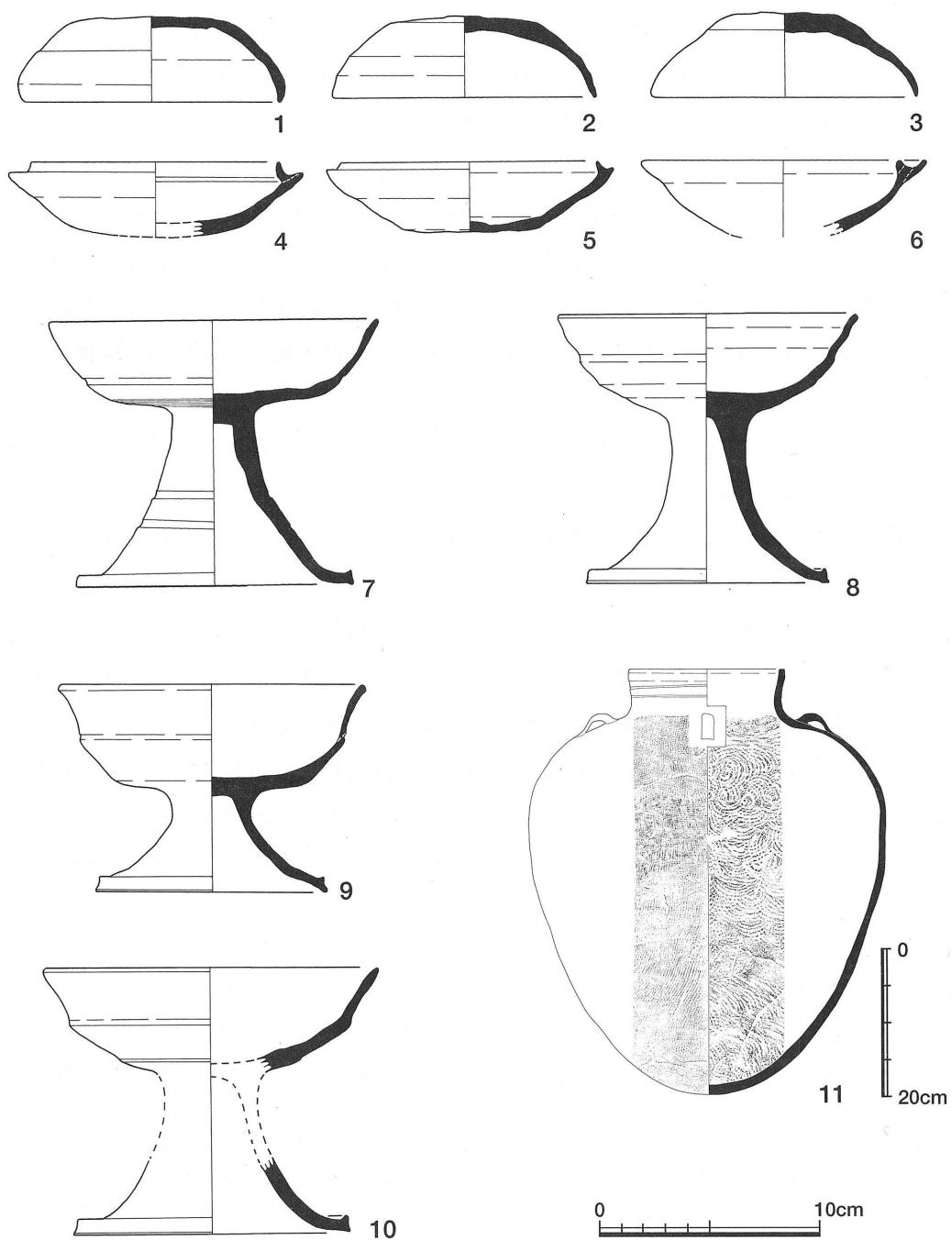
高坏は短脚のもの（9・10）と長脚のもの（7・8）がある。坏部の体部に明瞭に稜があり、口縁部は外反して開くものと、同様に外反して開き、稜と口縁部の間に回転ナデ調整時に形成した膨らみがあるものが主体を占める。長脚のものの坏部は後者の形態を呈している。透かし孔があるものは出土していない。

甕には、口縁部が大きく外反して開くもの、直線的に外傾しているもの、緩やかに外反するものがあり、また外面には粗雑な波状文や山形凹線文が施されている。また口唇部には連続列点文が施されているものもある。全体形状は不明なものが多い。唯一完形に復元できた甕（11）を見ると、口縁部は低く、直線的にわずかに外傾して開き口唇部はわずかに内湾する。肩部が張る。胴下半部でやや内側に傾斜する部位があり、そこから胴部までとその上の胴部との接合部位に相当する。口縁部外面には2本の横方向の凹線が施されている。

2) 年代的位置づけ

以上の3遺跡出土の蓋坏・高坏・甕の特徴を比較しながら、年代的位置づけを行う。陣ヶ平西遺跡が3時期に細分できたことから、これを基準にして平木池遺跡と中山池南遺跡第2地点を対応させることにする。

平木池遺跡出土の坏蓋は坏蓋A類やB類とほぼ類似する。また、坏身の立ち上がりの特徴では坏身A類やB類に類似している。しかし、切り離しの技法や調整が回転ヘラ切り後回転ヘラ削りを主体にしていることは、陣ヶ平西遺跡の蓋坏とは大きく異なる。平木池遺跡は集落遺跡で、その存続期間は一つの須恵器窯の操業期間よりも長いと想定される。それを加味すると、類似しながらも古い様相を示す要素があることは、陣ヶ平西遺跡に併行するも、やや先行する段階も存在すると考えられる。この前段階の様相については、高坏の脚端部の形状や長脚高坏の特徴からも支持できる。おおよそ平木池遺跡は、陣ヶ平西遺



第66図 山中池南遺跡第2地点出土の主要須恵器

跡にやや先行する段階から陣ヶ平西遺跡Ⅰ期に併行する時期と捉えることができよう。

中山池南遺跡第2地点出土須恵器のうち、高坏の形態が陣ヶ平西遺跡のものと比較しやすい。特に坏部の形状は、陣ヶ平西遺跡のC類に非常によく類似するほか、D類にも類似するものもある。C類とD類の関係は前述のように調整方法の変化に伴う形状の変化であることから、製作技法において両遺跡間での密接な関係をうかがわせる。一方で、サイズについては両遺跡では異なる。ともに短脚が主体を占めるようであるが、陣ヶ平西遺跡のほうが圧倒的に低い。中山池南遺跡第2地点の短脚の長さが約4.5cmに対し、陣ヶ平西遺跡では3.5cm前後に集中し、両者は明確に異なる。中山池南遺跡第2地点では脚高が8cm前後のやや長脚気味のものがあることも異なる点である。陣ヶ平西遺跡ではD類のなかに脚高約5cmのものがあるが数量はわずかである。両者とも、長い時期幅では高坏の短脚化の動向として見ることができるが、遺跡間で短脚のサイズは異なっていたことがわかる。こうした相違点を考慮すると、中山池南遺跡第2地点は主に陣ヶ平西遺跡Ⅱ期と同時期で、Ⅲ期にも若干併行すると考えられる。

3 遺跡の年代観をまとめると、平木池遺跡がやや先行し、陣ヶ平西遺跡Ⅰ期に併行する時期まで存続する。同Ⅱ期まで継続している可能性も残る。中山池南遺跡第2地点は主に同Ⅱ期に併行しⅢ期まで存続していた可能性がある。陶邑編年に対応させると、平木池遺跡がⅡ型式5段階、陣ヶ平西遺跡がⅡ型式5段階後半～Ⅱ型式6段階、中山池南遺跡第2地点がⅡ型式5段階後半～Ⅱ型式6段階に相当する。平木池遺跡出土須恵器は、ほかの2遺跡で生産された須恵器とは異なることから、平木池遺跡に供給した窯が付近に存在したことになる。すると、この時期、鏡山西麓には少なくとも3つの須恵器生産拠点が併存して操業していたことになる。

(楨林啓介)

注

(1) 関広尚世氏、森内透造氏より、ご教示を受けた。

松岡秀樹「土製U字型鋤先について」『古代学研究』第81号、40頁、1976。

森内透造「相生の古代窯業」相生市史編纂専門委員会編『相生市史』第一巻、337～384頁、1984。

(2) 松岡秀樹「土製U字型鋤先について」『古代学研究』第81号、40頁、1976。

藤原好二編『寒田窯跡群4号』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 倉敷市埋蔵文化財センター、2003。

(3) 中村浩『和泉陶邑窯の研究－須恵器生産の基礎的研究－』柏書房、1981。

(4) 楨林啓介「中山池南遺跡第2地点出土須恵器について－近接遺跡との比較から見た特徴－」藤野次史編『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ、358～372頁、2005。

第2節 陣ヶ平西遺跡の古代須恵器焼成窯跡出土須恵器をめぐって

1. はじめに

古代の陣ヶ平西遺跡 2号須恵器焼成窯跡（以下、2号窯跡と略す）の出土須恵器については、『年報』でその一部を暫定的に報告した⁽¹⁾。しかし、その段階では2号窯跡生産須恵器の具体的な様相については限定的にしか明らかにできなかった。本報告で、2号窯跡出土須恵器を整理時に可能な限り抽出し、それにより増加した資料を報告できたことは一定の成果であった。ここでは、この資料をもとに2号窯跡の生産須恵器、各器種の特徴、周辺遺跡との比較と年代的位置づけについて、若干の考察を行う。

2. 2号窯跡の生産須恵器

窯体内および前庭部からの出土須恵器はわずかで、ほとんどが灰原から出土している。2号窯跡は1号窯跡の整地土を切り込んで構築しており、2号窯跡の灰原には、1号窯跡の灰原やその周辺に散在していた1号窯跡由来の須恵器が多数混入したと考えられる。2号窯跡の灰原は操業中に2号窯跡から掻き出された須恵器と1号窯跡由来の須恵器が混在するような堆積を示しており、両者を明確に分けることができない。2号窯跡由来の須恵器が多数を占めていると思われたが、本報告作成時に1号窯跡由来の須恵器と2号窯跡由来の須恵器の選別ができるかぎり行った結果、1号窯跡由来の遺物が非常に多く混入していることが分かった。2号窯跡の遺物は、おそらくさらに南西側のB5区などに多くが掻き出され搬出されたと推定される。

2号窯跡由来とされる須恵器の器種には、整理作業の結果、蓋坏、坏、長頸壺、短頸壺、甕の5器種が確認できた。蓋坏の坏蓋には、擬宝珠つまみを持つ坏蓋と持たない坏蓋がある。同じく坏身には、高台を持つものと持たないものとがある。完形に復元できたものは、蓋坏の高台を持たない坏身のみであったが、そのほかのものも全体形状を一応復元するまでに至った。出土点数および出土破片数から類推すると、蓋坏、坏、甕が比較的多い。しかし前述のように、1号窯跡由来のものが多くあるために、2号窯跡灰原出土の須恵器片を計測しただけでは各器種の生産量の比率に妥当性があるとは言えない。ただし、B5区などの調査区外にも2号窯跡由来の須恵器が包含されているとしても、生産器種は現在分かれている5種類よりも大幅に増えることはないであろう。2号窯跡は、後述のように8世紀前半の操業と考えられる。一般的に、この時期の須恵器器種には、この他に、高坏、塊、鉢、皿、壺などがあるが、これらの器種は2号窯跡での出土は確認できなかった。また、甕は

小型のものであり、出土の須恵器片のなかから大型の甕は確認されなかった。大型の甕を生産していたとすれば、焚口付近の高さが70cm程度であるため、焼成時の窯内への搬入等は再検討する必要がある。生産量の少ない器種については不明な点が多いが、概ね2号窯跡は蓋坏と坏を主要な生産器種にしていたと言える。

3. 各須恵器器種の特徴

次に、器種ごとにその特徴を見てみる（第67図1～13）。

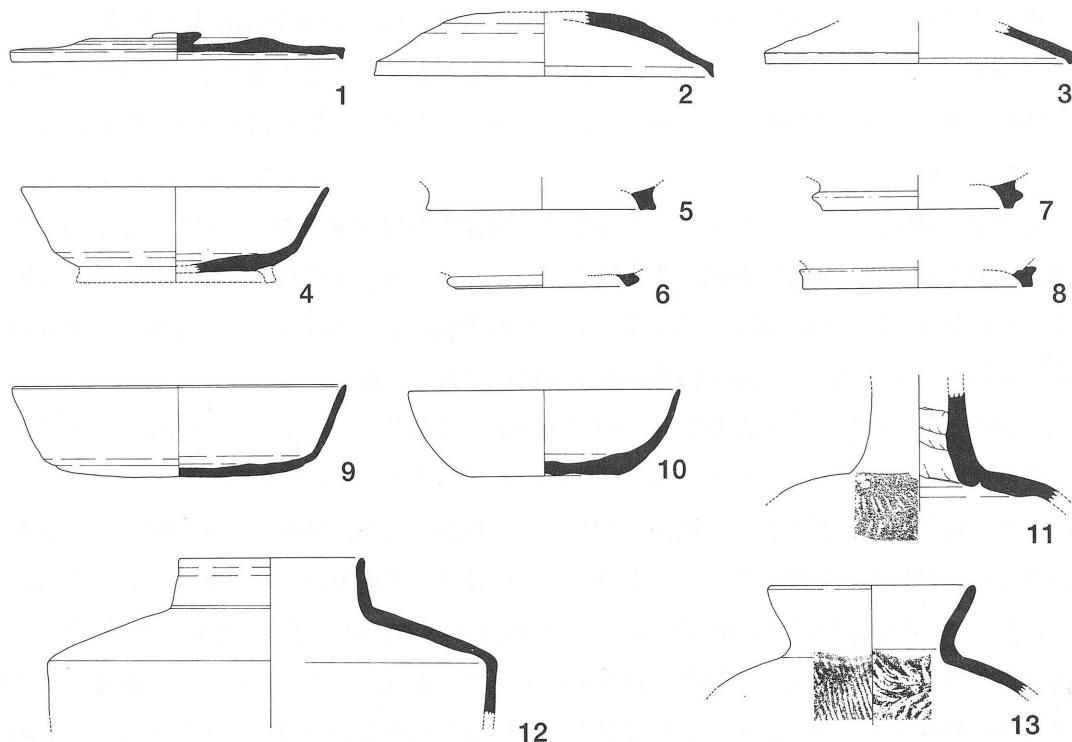
蓋坏（第67図1～9） 蓋坏には、擬宝珠つまみを持つ坏蓋（1・2）と持たない坏蓋（3）があり、坏身には高台を持つもの（4～8）と持たないもの（9）とがある。

擬宝珠つまみ付きの坏蓋の口径は約17cmである（1・2）。天井部はほぼ平坦であり、体部との境は緩やかな稜線を作り出している。擬宝珠は扁平で、つまみの中央には突起がなく、上面はやや凹む。口縁部は下方に垂下し、断面三角形を呈している。2はつまみを持つと推定される。器高は約3cm以上あり、やや高いものである。擬宝珠つまみを持たない坏蓋の口径は16.0cmである（3）。天井部は平坦で、体部との境は緩やかな稜を作り、ハの字状に大きく開き口縁部にいたる。口縁部は下方に垂下し、断面三角形を呈す。

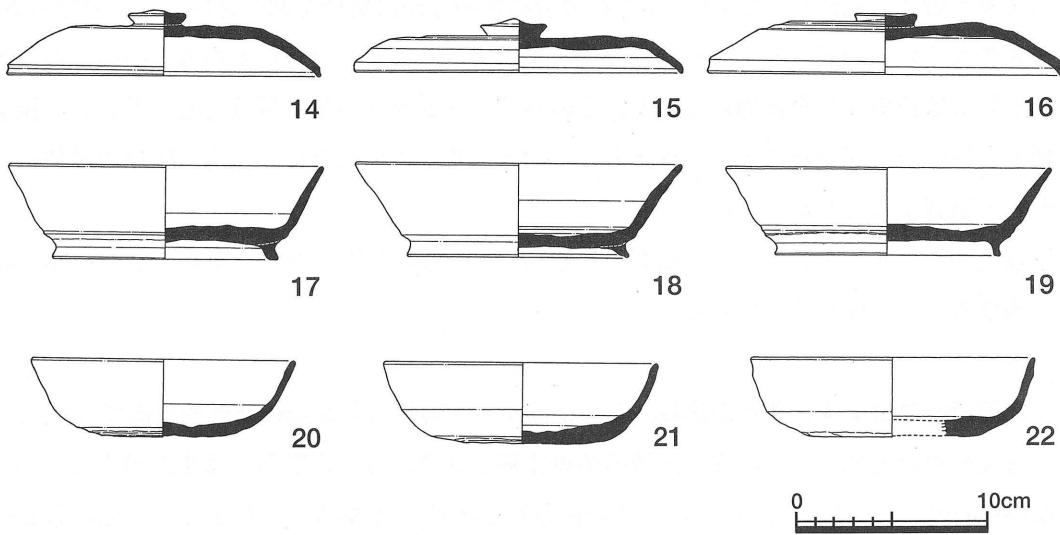
高台を持つ坏身の全体形状や大きさが復元できたものは、4のみである。口径は、15.8cmである。体部は直線的に開き、逆ハの字を呈している。口縁端部はやや先細る。底部際に高台を貼り付けている。しかし、高台には断面形状や大きさに多様性が見られ、大きくは2つに分けることができる。ひとつは断面長方形のもの（5）で、もうひとつは断面長方形のものに高台外面に突帯をめぐらせたもの（6～8）である。突帯は丸みを帯びるもの（6）と突出部が稜を形成するもの（7・8）とがある。高台は底部内側だけでなく、底部全体で接地するものが多い。また突帯を貼り付けによって製作しており、突帯の上部には粘土を延ばしてナデた痕跡がある。また突帯と体部との境には貼り付け痕とされる細い凹線が認められる。底径は、約9cmのものと約10cmのものとがあり、底径に極端な差はないが、約9cmのもののほうが高台の大きさも小さい。また、8は高台の幅が比較的厚く、突帯も他と比べ大きく突出した、全体的にしっかりとつくりのものであり、長頸壺の底部高台の可能性もある。高台を持たない坏身の口径は、17.3cmである（9）。体部は直線的に開き、逆ハの字を呈している。口縁端部はやや先細る。底部はヘラ切り後、ヘラ削り調整を行いさらにナデ調整により仕上げている。

坏（第67図10） わずかに上げ底のものもあるが基本的には平底で、体部は湾曲しながら立ち上がるものである。体部と底部との境は厚い。口縁端部は先細りのものと丸く收め

陣ヶ平西遺跡 2号窯跡の器種組成



許山窯跡



0 10cm

第67図 広島県陣ヶ平西遺跡 2号窯跡・許山窯跡出土須恵器

ているものがある。底部は回転ヘラ切り未調整である。壺の口径は12.2～14.0cm、底部径は6.8～7.8cmである。大きさや製作技法を見ると、規格性が強い器種と言える。

甕（第67図13） 口縁部は直線的で逆ハの字にやや開き、口縁端部は丸く収めている。口径が約11cmである。口径および口縁部高さから推測して、小型の甕と考えられる。1号窯跡出土甕のなかにも類似するもの（B類）があり、2号窯跡灰原にも混在しているために、判別が難しい。

長頸壺（第67図11） 肩はやや水平に張り、胴部との境は稜を作らず湾曲するものである。口頸部の接合は、まず胴部上半を成形したのち、口頸部との接合部位に円形の粘土紐を上から貼り付けて口頸部基部にする。次にその基部とした部位に粘土紐を絞りながら内接し積み上げている。その際に口頸部が下方に押されている。

短頸壺（第67図12） 肩部は張り、明瞭に屈曲して胴部にいたる。口縁部はやや内傾しながら立ち上り、口唇部はわずかに外反し、口縁端部は丸く収めている。

以上、各須恵器器種の特徴を概観した。出土点数が少なく、破片レベルの資料の観察も含めても上記以上の分類は難しいと思われる。壺蓋は、焼成不良により歪んでいるものが多いために、正確な形状からは厳密ではない。第67図2の器高は本来若干低い可能性がある。高台付きの壺身は、将来的には高台の形態により細分が可能だろう。しかし、前述のように底径の規格は限られている。それは対応する壺蓋の大きさから見ても類推できる。このことから、生産される蓋壺の大きさの種類が少なかったと言える。また、高台の形状は、本遺跡を特徴づけるものとして挙げられる。高台外面は本来、底部外端部が張り出すことにより突帯状に見える。しかし、本遺跡の資料は明らかに突帯を貼り付けているのである。後述のように、周辺の窯跡に類例はなく特異である。こうした特徴があるものの、各器種の形状と器種組成を全体的に見ると、そのバリエーションや生産量は乏しいと言え、操業期間は短い一時期の資料として捉えることができる。このことは、窯内・灰原の堆積状況からも追認することができる。

以上のことでもとに、次に周辺窯跡出土須恵器と比較をしながら、2号窯跡の編年的位置づけを行うこととする。

4. 周辺遺跡出土須恵器との比較、および陣ヶ平西遺跡2号窯跡の年代的位置づけ

古代の西条地域もしくは安芸地域の須恵器編年研究には、現段階ではまだ出土資料が少ないものの、向田裕始氏と妹尾周三氏の精力的な研究⁽²⁾がある。これまでの研究にもとづくと、2号窯跡出土須恵器と類似する、あるいは時期的に近接する須恵器が出土している

遺跡には、許山窯跡、小林1号窯跡、東山窯跡がある。ここでは、この3遺跡の出土須恵器のうち、蓋坏（坏蓋・坏身）と坏を概観し、2号窯跡出土須恵器と比較しながら先行編年研究のなかに位置づけることにしたい。

1) 許山窯跡出土須恵器の特徴と陣ヶ平西遺跡2号窯跡出土須恵器との比較

三原市高坂町許山に所在する窯跡である⁽³⁾。灰原とその周辺から、窯壁片、須恵器片が多数出土している。器種には、蓋坏、塊、高坏、鉢、横瓶、長頸壺、甕、円面硯、陶馬がある。

坏蓋（第67図14～16）は、口径16.2～18.7cm、器高2.0～3.4cmである。天井部はほぼ平坦であり、体部との境は甘い稜線を作り出している。扁平なものと笠状のものがある。口縁端部は下方に折り曲げて直立させ、端部は丸く收めている。また口縁端部外面はわずかに凹線状にくぼみ外反する。内面の形状は天井部から口縁端部までスムースに湾曲している。こうした点は2号窯跡と明らかに異なる形状をし、より古い様相を示している。

坏身は高台を持つもの（第67図17～19）と持たないもの（第67図20～22）とに分けて報告されている。高台を持つものは口径16.0～16.8cm、器高4.2～4.8cmである。坏蓋に対応する坏身である。底部と体部との境は明瞭な稜線をつくる。高台は底部際より内側に貼り付けていている。断面長方形を呈したものや先細りのものなどがあり、全体的に薄く小さい。高台を持たないものは口径13.6～14.8cm、器高3.7～4.2cmである。底部は平坦で、体部との境は緩やかに湾曲している。口縁端部は丸く收める。底部から体部最下部は比較的厚く、体部から口縁部は薄く仕上げている。

許山窯跡は8世紀前半に位置づけられているが、上記の蓋坏の特徴は2号窯跡とは共通点が乏しいことがわかる。許山窯跡の資料もほぼ一時期のものと認識される。2号窯跡との型式学的な検討から、2号窯跡は許山窯跡に後続する位置に置くことができよう。

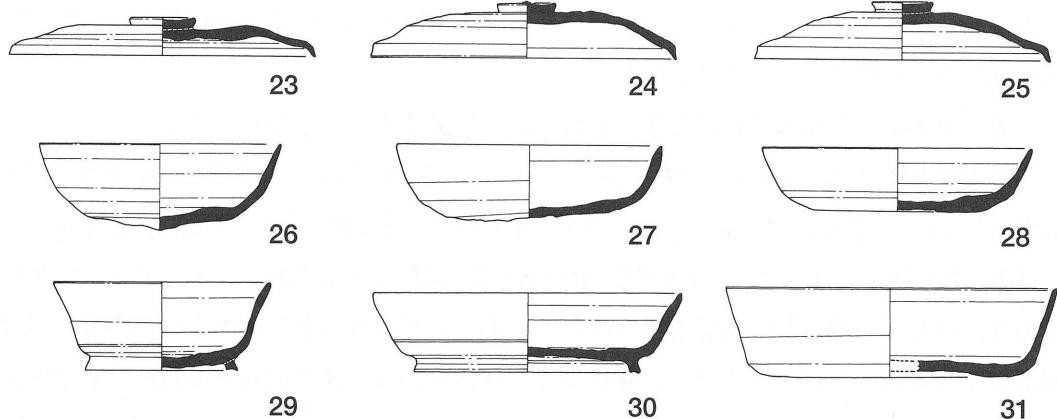
2) 小林1号窯跡出土須恵器の特徴と陣ヶ平西遺跡2号窯出土須恵器との比較

三原市久井町に所在する窯跡である⁽⁴⁾。須恵器焼成窯跡が1基検出されており、主に窯体内出土須恵器が報告されている。

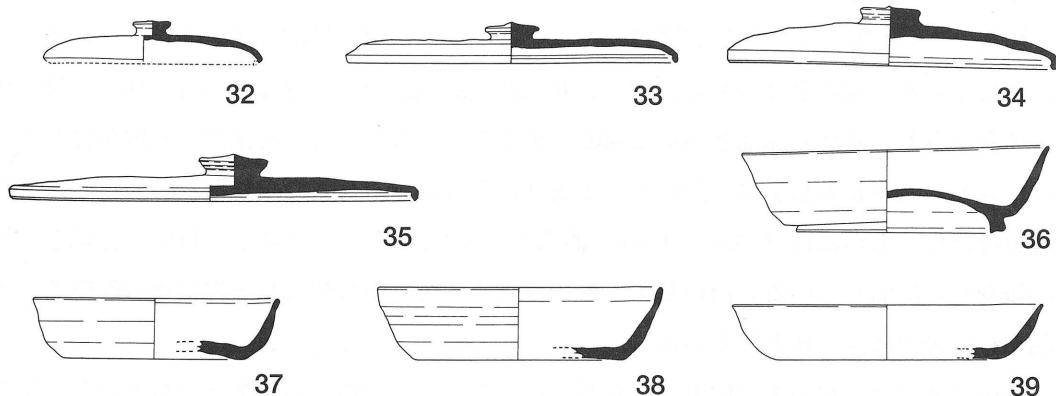
坏蓋の口径は13.5～17.3cmで約16cmが一般的とされる（第68図23～25）。天井部はほぼ平坦で、体部へは明瞭な稜線を持たずになだらかに移行し、体部は外反気味に開く。口縁部はほぼ鉛直方向に折り曲げ体部の境に明瞭な稜をもつ。口縁端部は断面逆三角形を呈し、外面は平坦に仕上げている。器高は2～3cm程度に収まる。2号窯跡と非常に類似していると言える。2号窯跡では器高が低く扁平なものがあるが、小林1号窯跡ではほとんど見ることがなく、少なかったようである。

坏身は高台を持たないもの（第68図26～28）と高台を持つもの（第68図29～30）とに分

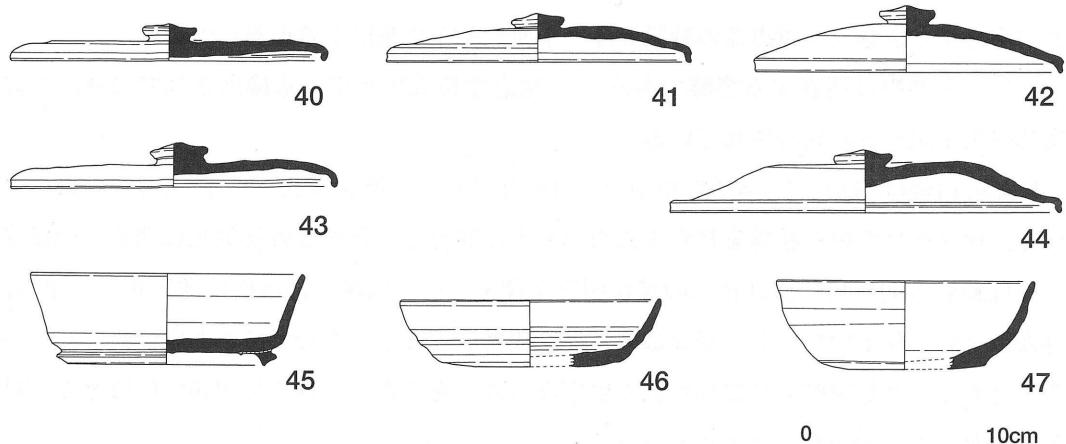
小林 1 号窯跡



東山窯跡



安芸国分寺跡SK451



第68図 広島県小林 1 号窯跡・東山窯跡・安芸国分寺SK451出土須恵器

けて報告されている。高台を持たないものは3つに分類されている。口径12.6cm、器高4.0～4.5cmのもの（I類）、口径14.0～15.5cm、器高3.0cmの浅いもの（III類）、そして、それらの中間で、口径13～14cmのもの（II類）である。

高台付き坏身は、出土量が少ないため形態分類がされていないが、口径が約11cmのもの、15cm前後のもの、17cm前後のものに分けられる。体部や高台の基本形状は類似するが、サイズのみが異なる。高台は断面長方形を呈し、やや外傾し底部全面で接地する。底部中央が凹むものもある。こうした高台の特徴は2号窯跡と類似する（第67図5・7・8）が、高台外面に突帯を持つものは出土していない。

ところで、2号窯跡の坏身で口径が分かるものは3点あり、口径は12.6～14.0cmである。小林1号窯跡に対照すると、I類とII類に相当するものが含まれていることになる。ただし、II類に相当する2号窯跡の坏の底部径は7.8cmで、小林1号窯跡出土のII類の底部径が約9cmであり、体部は2号窯跡出土坏身の口径のほうがやや開いておりプロポーションが異なる。また、III類の口径に相当する2号窯跡の坏（第67図10）は、口径17.3cmに対して器高が4.7cmあり、底が浅いIII類とは異なることが分かる。このように大きさでは類似したバリエーションが見られるが、形状がやや異なることも指摘できる。

3) 東山窯跡出土須恵器の特徴と陣ヶ平西遺跡2号窯跡出土須恵器との比較

東広島市高屋町大字小谷に所在する窯跡である⁽⁵⁾。須恵器焼成窯跡が1基検出されている。前庭部と灰原より、多量の須恵器が出土している。須恵器器種には、坏蓋、蓋（短頸壺蓋）、坏身、小皿、蓋、壺、甕がある。

蓋坏の坏蓋は、口径が11～14cm（I類）（第68図32）、15～19cm（II類）（第68図33・34）、20～21cm（III類）（第68図35）に区分されており、II類が主体を占めると報告されている。器形は扁平な笠形を呈し、口縁部は下方に折り曲げ口唇部内面に稜を形成する。口縁部外面の屈曲は明瞭な稜を形成せず、丸みをもつ。擬宝珠つまみは扁平で、上面中央は突起がある。32は口径約11cmで、体部は扁平で緩やかに湾曲し口縁部に至る。口縁端部は小さく内側に屈曲している。33は口径約16.5cmで、体部は扁平で口縁部より一度稜を形成し口縁部にいたる。口縁端部は稜を形成しながら下方に屈折する。34は口径約16.5cmで、体部は緩やかに湾曲し口縁部は下方に屈曲する。口唇部内面に稜を形成する。器高はやや高く、約3cmある。35は口径約19.5cmで、体部は扁平で口縁部は下方に屈曲する。

坏身には高台のあるもの（第68図36）と高台のないもの（第68図37～39）とがある。第68図36は口径約20cmで、高台を持つ。高台は内端部が内傾して接地し、外面には突帯がつく。底部際より約1cm内側に高台がつく。体部はわずかに外反しながら開く。37は口径

12.6cmで、体部は逆ハの字状に開いている。底部は上げ底である。口縁端部は薄くなり、わずかに外反する。38は口径約15cmで、体部は直線的に逆ハの字状に開くものやわずかに内湾しながら立ち上がるものがある。39は口径約16cmで、体部は底部際から屈曲して立ち上りは逆ハの字状に開く。底は比較的浅い。

東山窯跡もまた長期的な操業が行われていないようで、出土資料の時期幅は同様に短いと思われる。8世紀前半に位置づけられている。一方で、2号窯跡出土須恵器と類似する器種や要素がないことが分かった。特に、形状の変化がわかりやすい坏蓋を比較しても類似性は見られない。東山窯跡出土須恵器のこうした特徴は、時期的に後続する熊ヶ迫窯跡群に継続的に見られるものである。

ところで近年、安芸国分寺跡の発掘調査が進むにつれ、安芸国分寺跡の時期区分が明らかになっている⁽⁶⁾。安芸国分寺跡IA期に位置づけられるSK451出土須恵器が、東山窯跡出土須恵器と非常に類似していることから、生産地と消費地の関係にある可能性が指摘されている⁽⁷⁾。安芸国分寺東側に位置するSK451（451号土坑）からは、現在安芸国分寺跡で最も古い段階の須恵器が出土しており、安芸国分寺跡IA期を代表する。共伴する木簡に「天平勝寶二年」（西暦750年）とあり、金堂や塔などの主要な伽藍がすでにあったとされている⁽⁸⁾。SK451出土資料はある程度時期幅のある資料が混在しているために、上記の実年代がどの資料に併行するかは現段階では指摘できないが、概ね8世紀中葉前後に位置づけることは可能であろう。

そのSK451出土資料のうち、東山窯跡出土須恵器と非常に類似する資料に第68図40～47などがある。一方で2号窯跡、小林1号窯跡、許山窯跡出土須恵器に類似する資料は認められなかった。このことから、第68図40～47はSK451出土資料のなかでも最も古いものと考えることができる。そうすると、これらは木簡が示す8世紀中葉を下る可能性は低く、8世紀前半のなかに位置づけられることになる。さらに、東山窯跡も同時期とされるのである。

以上の検討から、2号窯跡の西条地域における編年の位置づけを試みたい。2号窯跡出土須恵器は、小林1号窯跡出土須恵器に非常に類似するが、坏身の形状や器種構成に若干の相違が認められる。その違いが生産体制を表すものか年代差を表すものかは、現状で判断することは困難である。しかし、仮に年代差であったとしても、その差はわずかであると容易に予想できる。また、前後する許山窯跡や東山窯跡との形態的差異から、それらが型式学的に同一系譜のものならば、それぞれにさらに1型式が間に存在する可能性もある。許山窯跡に先行する西本6号遺跡SD2中・上層は7世紀末～8世紀初頭に位置づけられ

ていることも念頭におくと、8世紀前半の窯跡の前後関係は、許山窯跡、小林1号窯跡、陣ヶ平西2号窯跡、東山窯跡の順であり、陣ヶ平西2号窯跡は8世紀前半の中頃とすることができる。

5. 今後の課題

ところで、陣ヶ平西遺跡に近接する窯跡には東ガガラ窯跡がある⁽⁹⁾。鏡山南麓に位置し、鏡山山麓の西斜面の一帯に立地することから、何らかの関係が想定できる窯跡である。出土須恵器は非常に少ないが、8世紀後半から9世紀とされている。現在のところ、鏡山一帯に古代の窯跡はこのほかに発見されていないが、陣ヶ平西遺跡2号窯跡に後続する窯跡として位置づけられる。また、鏡山の東側に位置する三永水源地周辺でも、8世紀前半（新開窯跡）や8世紀中葉（三永水源地北窯跡）の窯跡が発見されている⁽¹⁰⁾。報告の出土須恵器（蓋坏）を見ると、新開窯跡は陣ヶ平西遺跡2号窯跡や小林1号窯跡よりも古い可能性がある。三永水源地窯跡群は、安芸国分寺創建前から創建後にいたるまで須恵器窯を運営しており、安芸国分寺などの供給先との関係を考える⁽¹¹⁾だけでなく、鏡山山麓の陣ヶ平西遺跡2号窯跡や東ガガラ窯跡の生産体制を比較するうえでも重要な遺跡群と捉えられる。

今回は、生産地と消費地の問題についてはほとんど言及することができなかった。しかし、安芸国分寺跡の発掘調査によって、近年大幅に消費地の資料が増加してきている。また、上記のように三永水源池窯跡群などの調査が進むことによって、資料の増加も期待できるようになってきた。安芸国分寺への供給源には、近隣窯跡のほかに御調窯跡群や豊栄窯跡群の存在が指摘されている⁽¹²⁾が、安芸国分寺創建以前の段階では、消費地に相当する遺跡がほとんど分かっていない。この地域の古代の須恵器研究は、安芸国の形成過程を明らかにするうえでも重要な分野であり、今後継続的に調査・研究を行っていくべきであろう。

（植林啓介）

注

- (1) 河瀬正利・藤野次史編『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』 XI 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、1993。
- (2) 向田裕始「芸備地方における須恵器生産－御調窯跡群の成立と展開－」『研究輯録』 X 広島県埋蔵文化財センター、13～38頁、2000。
- 妹尾周三「安芸地域－安芸国分寺出土資料を中心として－」『古代の土器研究会第8回シ

- ンポジウム 古代の土器研究 聖武朝の土器様式』古代の土器研究会 69～83頁, 2005。
- (3) 向田裕始「三原市高坂町許山窯跡の出土遺物」『芸備』第12集 芸備友の会, 10～19頁, 1982。
- (4) 佐々木直彦編著『小林1号窯跡発掘調査報告書』(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1984。
- (5) 尾崎光伸「東山窯跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅷ)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター 65～75頁, 1992。
- (6) 妹尾周三「Vまとめ」『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書IV－第14次～第16次調査の記録－』文化財センター調査報告書第39冊 (財)東広島市教育事業団文化財センター, 85～93頁, 2003。
- (7) 注(2)と同じ(妹尾 2005)。
- (8) 佐竹昭「安芸国分寺四五一号土坑出土の木簡について」『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書－第12次・第13次調査の記録－』文化財センター調査報告書第36冊 (財)東広島市教育事業団文化財センター, 101～108頁, 2002。
- (9) 植田千佳穂「東ガガラ窯跡」『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島大学, 14～20頁, 1982。
- (10) 沢元保夫・打田知之編著『三永水源地窯跡群詳細分布調査報告書－重要遺跡(窯跡)確認調査事業－』文化財センター調査報告書第57冊 (財)東広島市教育文化事業団, 2007。
- (11) 注(10)と同じ(沢元・打田 2007)。
- (12) 注(2)と同じ(妹尾 2005)。

第3節 調査の成果

最後に、前節までの分析を踏まえながら、陣ヶ平西遺跡の調査成果についてまとめておきたい。

陣ヶ平西遺跡は、標高321mの陣ヶ平山西側の平坦な低丘陵地帯に位置し、丘陵南西斜面を中心に立地している。発掘調査を実施した調査区では、古墳時代および古代（奈良時代）の遺構・遺物を中心として、弥生時代や中世の遺物が出土している。古墳時代の遺構は須恵器焼成窯跡2基を中心としており、古代の遺構は須恵器焼成窯跡1基である。発掘調査地区の南側の丘陵裾部には古墳時代後期の集落跡が広がっている。予備調査を実施したのみであるのでその規模や内容を十分明らかにできないが、須恵器焼成窯を操業した工人の集落と想定される。また、須恵器焼成窯跡の北東の丘陵頂部平坦面上には古墳が1基構築されている（陣ヶ平西古墳）。出土の須恵器は、1号須恵器焼成窯跡の第2操業期の特徴と一致し、被葬者と須恵器製作工人との関連を暗示している。

本遺跡は、古墳時代後期の須恵器製作工人の集落跡、須恵器焼成窯跡およびこれに関連した古墳を一体的に捉えることのできるきわめて良好な遺跡であり、中・四国地方の中でも数少ない貴重な資料を提供したといえよう。また、古代の須恵器焼成窯跡は西条盆地における須恵器生産の様相の解明に貴重な資料を提供しており、今後官衙などの関連遺跡出土須恵器との比較検討を通じて流通の様相を解明することができるものと期待される。

ところで、陣ヶ平西遺跡については、1989年度の予備調査で古墳時代の集落跡が丘陵裾を中心に広範囲に分布することが推定されたことから、1989年度および1990年度の予備調査の成果をもとに遺構・遺物の分布が希薄と推定された北側へ造成範囲をずらすこととなり、1991年に発掘調査を実施した。その結果、古墳時代の須恵器焼成窯跡2基、古代の須恵器焼成窯跡1基などが検出されたわけであるが、調査後全域の保存を含めた十分な協議がなされたものの、これ以上の計画変更は困難との結論となった。このため、古墳時代、古代の須恵器焼成窯跡は造成工事によって失われ誠に残念なこととなったが、古墳時代集落跡および古墳（陣ヶ平西古墳）については保存区として現状保存がなされ、現在に至っている。保存区の現状は、山林であり、本調査地区と古墳時代集落の境付近に説明板を2003年に設置した。今後、保存地区についてはさらに活用のあり方を検討する必要があろう。

次に、各時代の調査成果についてまとめたい。

1. 弥生時代の遺物

G 3 区の埋没谷部を中心に弥生土器、石鏸が出土している。G 3 区は1990年度予備調査

の第10区南端部と重複している。1990年度第10区は丘陵頂部平坦面から丘陵斜面上半部にかけて設定した調査区で、丘陵頂部平坦面から斜面へ移行する傾斜変換点付近から丘陵斜面のほぼ全域で弥生土器、石鏸などが出土した。弥生土器は、甕形土器を主体に、壺形土器、鉢形土器がある。壺形土器、甕形土器、鉢形土器とも口唇部を肥厚させて数条の凹線文を施している。壺形土器には口唇部を大きく拡張するとともに外面が大きく斜行し、内面は直立気味で明瞭に屈曲して口頸部がラッパ状に開くものがあり、甕形土器では口唇部が直立気味のものが認められるものなど、西条町奥田大池遺跡⁽¹⁾ 出土資料に類似する一群がある。また、甕形土器では口頸部がくの字状に屈曲し、口唇部を拡張して凹線文を数条施すものがあり、統合移転地（東広島キャンパス）内の鏡西谷遺跡G地区⁽²⁾ 出土資料の特徴に共通する一群が認められる。土器の調整法や形状から見て、複数時期の資料を含んでおり、中期後葉後半～後期前葉前半⁽³⁾ に位置づけられるものと思われる。丘陵頂部平坦面を挟んだ北側の谷上部の埋土中にも弥生土器が包含されており、予備調査では遺構を検出できなかったが、近接地の丘陵平坦面に住居跡など、何らかの遺構が存在したものと推定される。

2. 古墳時代の遺構と遺物

発掘調査地区では、調査区西部で須恵器焼成窯跡2基（S Y01・03）、土坑1基（S K01）を検出した。2基の須恵器焼成窯跡は切り合い関係にあり、3号焼成窯跡、1号焼成窯跡の順に構築している。1号土坑は須恵器焼成窯跡からやや離れた調査区西端部（B 4区）に単独で位置している。

1号焼成窯跡は3号焼成窯跡廃絶直後に3号焼成窯跡を埋積・整地し、さらに窯体の主体を約7m北東（斜面上方）に移動して焼成窯を構築している。焚口部の両壁には3本ずつの柱穴が認められ、天井部を構築するための骨格となる材が挿入されていたと考えられることから、天井を別に構築しているものと思われるが、基本的には地下式窯窯である。窯体部、前庭部、灰原部の大きく3つの部分からなり、細長い窯体に、平面円形状の前庭部（中央部は溝状）、灰原が連続している。前庭部や前庭部隣接部に作業場、溝、土坑などの付属施設が構築されている。

窯体は、燃焼部・焼成部の幅がほぼ一定で、寸胴状の形態である。長さ8.4m、幅は中央部で約2.2m、焚口部で約1.4mの規模で、焼成部床面の傾斜は38°である。断面は蒲鉾状を呈していたと推定され、高さは燃焼部・焼成部境界付近で約1.5m、焚口部で1m以下と推定される。焼成部床面には幅20cm程度の半円状の平坦面を多数設けており、横一列に配置された部分や礫を設置した箇所がある。また、第2操業期（後述、170頁参照）には燃焼

部との境界に石を利用した平坦面が構築されている。いずれも焼成用須恵器を設置するための施設と思われる。煙道部は残存していないが、煙道部下の窯尻は広く平坦面を形成しており、その規模は長さ約1.1m、幅約1.3mである。周囲の壁面は一定の受熱痕を示すが、床面は受熱痕跡が弱い。同時期の須恵器焼成窯跡で煙道下の床に平坦面を有する類例に乏しく、どのような機能を持つのか検出状況からは類推が困難である。焚口部と燃焼部について見ると、構築当初は両者の境界床面が段状となり、燃焼部が一段低くなっているが、次第に埋積され境界が不明瞭となり、燃焼部が皿状の窪みへと変化している。

前庭部は中央の溝状部とその両側に位置する平坦面から構成される。溝状部は焚口から連続し、焚口部と灰原を連結している。平面が途中で屈曲し「く」の字状を呈するが、意図的な形状ではなく、3号焼成窯跡埋積土の沈下に起因すると思われる。当初の形状はほぼ左右対称形を呈していたと考えられる。溝状部の幅は焚口部に接する部分がもっとも幅広で2.6m、左右の平坦面との比高差約60cmの規模である。前庭部左右作業平坦面は平面三日月形あるいは隅丸三角形を呈し、非対称な平面である。作業平坦面は第2操業期初期の窯体改修に合わせて改修され、平坦面が拡張されている。第1操業期の作業平坦面（SX04・05）は掘り方がほぼ左右対称で、全体として扁円形を呈している。南作業平坦面は北作業平坦面より一回り規模が大きいが、いずれも長さ4.2m前後の規模である。第2操業期初期の改修に伴う平坦面は第1操業期の平坦面を西側に拡張するような形で構築されている（SX06・07）。やはり南作業平坦面は北作業平坦面に比較して規模が大きく、東西に長い。長さ2～3.6m前後の規模である。また、左右の作業平坦面の焚口付近には柱穴が確認され、焚口付近には覆屋があったものと想定される。

窯体南部から前庭部の両脇に溝（SD01・02）が位置し、前提部に近接して、作業場4基（SX01・02・03・09）が配されている。前庭部の東側に1号作業場SX01、2号作業場SX02、前庭部の西側に3号作業場SX03、4号作業場SX09が位置している。1号作業場は1号焼成窯跡の構築当初から存在した可能性があり、2号～4号作業場はやや遅れて構築されたものと思われる。1号作業場が平面橢円形状であるが、その他は平面方形を呈しており、幅はいずれも2.2m前後である。4号作業場には3号土坑SK03が構築されている。3号土坑は平面橢円形で、長径1.2m、深さ約20cmの規模をもつ。性格は不明である。前庭部端は灰原に向かってラッパ状に開いており、灰原は斜面下方に向かって緩やかに開いている。灰原は斜面下方の調査区外まで広がっており、その規模を明らかにすることはできないが、前庭部との境界で幅5.6m、調査区南端部で幅7.4mの規模で、長さ約6.5m分を調査した。構築当初の横断面は中央部が緩やかに窪む皿状を呈しているが、第2操業期当初に

埋積され、わずかに中央部が窪む傾斜地に変化している。

燃焼部床面は最終操業面下に10数枚以上の還元面を確認することができる。また、前庭部の堆積層や焚口部両側の平坦面の改修の様相とも勘案して、大きく2時期の操業期を想定することができ（第1・第2操業期），各操業期はさらに2時期に細分できた。燃焼部、焚口部、前庭部の堆積物は第2操業期を主体としており、第1操業期の堆積物は燃焼部を中心に残存し、前庭部にはわずかに木炭層を残しているのみである。第2操業期当初の大規模な窯体の改修に伴って第1操業期の堆積物は灰原や周辺部に排出されたようである。須恵器の接合関係も堆積層に基づく操業期区分を支持している。

1号焼成窯における出土須恵器の器種は、蓋壺、高壺、壺、鉢、埴、平瓶、壺、甕、大甕、横瓶などである。本来の器種構成は十分明らかにはできないが、出土資料を概観する限りでは、短脚高壺の割合が高く、逆に蓋壺の割合が低い。

3号須恵器焼成窯跡は意図的に埋積されたため、窯体の残存状態が良好で、窯体北半部は天井が一部残されていた。焚口部の天井も確認することができ、地下式窯と考えられる。窯体、前庭部、灰原から構成されると想定されるが、前庭部の南部は調査区外にあり、灰原は調査区外に位置しているものと思われる。焚口部や前庭部に作業平坦面、土坑などが構築されている。細長い窯体部に、平面円形状の前庭部が連続している。前庭部中央には2条の溝（S D03・04）が平行して構築されており、前庭部西半は広く平坦面を形成している。また、前庭部北西部の掘り方に接して2号土坑SK02が構築されている。

窯体は、長さ約9.0m、幅は中央部で約2.0m、焚口部で約1.0mである。高さは天井部の残存している部分が約1.0mであり、焚口部で約90cmと推定され、1号焼成窯跡に比べるとやや低い。窯体部平面は中央部の燃焼部と焼成部の境界付近がもっとも幅広で、やや胴張りである。窯尻はU字状を呈している。焼成部床面の傾斜は窯尻側の上半がやや急で約31°、下半が約27°である。焼成部床面には、1号焼成窯跡と同様に幅20～30cmの半円形状の小平坦面が多数作り出されており、上部および下部に密集している。規則的な配列が認められる部分もあり、礫が配されている小平坦面も確認されている。1号焼成窯跡同様の機能と推定される。燃焼部床面はほぼ水平である。燃焼部と焚口部の境界は不明瞭であるが、床縦断面を見ると、焚口に向かって次第に傾斜を増し、焚口手前の傾斜を増す付近が焚口部の始まりと想定される。燃焼部床面の還元部分は基本的に1枚で、操業期間はかなり短期間であったものと推定され、須恵器の出土量も少ない。

焚口部の左右に作業平坦面がほぼ左右対称形に構築されている（SX10～13）。それより上下2段の構造となっており、上段は1/4円形状である。現存で、西作業平坦面（S

X 10・11) は全長約1.9m, 上段長約50cm, 幅約60cm, 下段長約1.4m, 幅約85cmの規模で, 上下の段差は約15cmである。東作業平坦面(S X 12・13) は全長約2.3m, 上段長約85cm, 幅約60cm, 下段長約1.4m, 幅約1.0mの規模で, 上下の段差は約15cmである。西平坦面上・下段の壁面沿いに溝が掘り込まれており, 南端(前庭部側) は開いている。この他にも, 東作業平坦面に接して南側に伸びる平坦面S X 14, 西作業平坦面の南に小規模な平坦面S X 15が作り出されている。前者は作業用の施設と考えられるが, 後者は凸レンズ状の平面形を呈し, 小規模な平坦面で, 規模や位置から西作業平坦面へアクセスする階段と思われる。

前庭部は, 南端部が未調査で, 平面円形を呈すると想定しているが, 南部が閉塞せず灰原に向かって開く形状である可能性もある。焚口に接して平坦部が形成され, その南側は一段低い位置に平坦部が形成されている。後者は一旦大きく摺り鉢状に掘削し, 50~60cmの厚さで砂質土を全体に埋積して整地し, ほぼ平坦な面を形成しており, 中央部には溝2条(S D 03・04) を掘削している。西側溝の西は東に向かってやや傾斜するが, 焚口に接する平坦面より一段高く, 広い平坦面を形成している。

前庭部北西端に接して2号土坑S K 02が構築されている。3号焼成窯構築後に掘削された可能性があるが, 基本的に同時に機能したものと想定される。平面橢円形を呈し, 長径約1.5m, 深さ約60cmの規模をもつ。須恵器破片が若干出土しているのみであり, 機能は不明である。

3号焼成窯跡出土須恵器の器種は, 蓋坏, 高坏, 坏, 鉢, 壺, 甕などである。1号窯跡同様, 窯体出土須恵器は短脚高杯の割合が高く, 逆に蓋坏の割合がやや低い。

1号土坑は南および東側の壁面がほとんど削平されているが, 平面隅丸方形を呈すると推定され, 長径1.9m, 短径約1.7m, 深さ約15cmの規模である。土坑の西半中央部に集中する形で埋土上部に多量の須恵器破片を包含していた。一括廃棄したような状況であるが, 完形品がその場で潰れた状況ではなく, 当初より破片の形で集積されていたものと考えられる。性格不明の遺構である。

発掘調査地区の南側には1983年度および1989年度(第2区)の予備調査で同時期の集落跡を検出している。竪穴住居跡3基, 土坑4基を確認しており, 1983年度予備調査区の柱穴(住居跡状遺構)も住居跡あるいは工房跡である可能性が高い。丘陵斜面裾付近を中心に, 5~10軒程度の住居跡が存在すると想定される。確認されている竪穴住居跡は3基である。1号住居跡S B 01は発掘調査区のすぐ南側に位置する。北東側の上面プランを検出したのみであり, 全体の形状は不明である。竪跡と推定される張り出し部を検出しているが, 3号焼成窯跡灰原と重複する可能性が高く, 住居跡ではなく, 3号焼成窯跡に関連す

る遺構かもしれない。2号住居跡S B02は1号住居跡の南西約3mに位置し、斜面上方をL字状に削平して平坦面を作り出している。浅い掘り込みをもつ竪穴住居跡とみられる。柱穴1本を確認しており、北壁沿いに幅15cm程度の壁溝を有している。南北3m程度の規模であるが、東西の規模は不明である。工房跡の可能性がある。3号住居跡S B03は2号住居跡の南西に近接して位置し、斜面部をL字状に削平して、竪穴住居跡を構築している。北壁沿いに幅約15cmの壁溝がめぐり、北壁に竈を付設している。竈の北東側には小土坑(S K04)が位置しており、竈の煙突の可能性がある。南北約7mの規模であるが、東西の規模は不明である。住居跡のほぼ中央部に地床炉SK07を配置し、その他にも2基の土坑(S K05・06)を設置している。

古墳(陣ヶ平西古墳)は1号・3号須恵器焼成窯跡の約60m東に位置し、横穴式石室を内部主体とする。径10m前後の円墳と推定される。天井石は奥壁上の1枚を残して全て抜き取られており、羨道部付近も破壊されている。横穴式石室はほぼ南に開口し、現存で長さ約2.5m、幅約1mの規模である。高さは約1mと推定される。石室内の埋土中および古墳が立地する丘陵裾から須恵器が出土した。

さて、これら古墳時代の遺構の時期であるが、第1節で検討したように、3号須恵器焼成窯跡(以下、3号窯跡と略す)は中村編年⁽⁴⁾Ⅱ型式5段階、1号須恵器焼成窯跡(以下、1号窯跡と略す)が中村編年Ⅱ型式5～6段階に位置づけられる。集落跡出土の須恵器、特に3号住居跡出土のそれは1号窯跡の様相に近く、古墳出土の須恵器は1号窯跡第2操業期の様相に近い。須恵器焼成窯跡の操業主体は南側に位置する集落に居住した工人集団と想定されることから、集落跡を調査すれば、少なくとも1号・3号窯跡に対応する中村編年Ⅱ型式5～6段階の須恵器が出土するものと思われるが、予備調査範囲については集落存続期の後半の資料が主体となっているものと思われる。古墳は被葬者の性格を特定できる状況にはないが、須恵器焼成窯操業期の終末期の須恵器を中心に副葬されている可能性が強い。単独墳であり、近隣に古墳が認められることから被葬者を工人集団の長と想定しても大過あるまい。しかし、陣ヶ平西遺跡に近接して須恵器生産に関連した平木池遺跡、山中池南遺跡第2地点があり、これら3遺跡が中心となる時期を少しずつずらしながらも、少なくとも平木池遺跡と陣ヶ平西遺跡、陣ヶ平西遺跡と山中池南遺跡第2地点は同時並存した時期があると想定されることや陣ヶ平西古墳を除くと周辺に古墳が存在しない⁽⁵⁾ことから、陣ヶ平西古墳の被葬者が陣ヶ平西遺跡の工人集団のみを統括した人物であったかどうかはさらに検討の余地がある。

ところで、1号窯跡と3号窯跡を比較すると、基本的には同じ工人集団が操業したと想

定されることから多くの共通点を指摘することができるが、同時に相違点も指摘できる。両者とも地下式窯窯で、窯尻から直立気味に煙道が形成されていたと推定され、直立煙道型⁽⁶⁾に属するものと想定される。3号窯跡がやや窯体が長いが、1号焼成窯が8.4m、3号窯跡が9.0mとほぼ同じ規模である。しかし、床面の形状は1号窯跡が燃焼部・焼成部の幅がほぼ一定で、寸胴状であるのに対して、3号窯跡が燃焼部・焼成部の境界付近がもっとも幅広で、燃焼部が焚口に向かって幅を減じてやや胴張り状の形態である。もっとも1号窯跡は操業期の半ばに大きく窯体を改修していることから構築当初は3号窯跡と同様の形態であった可能性もある。焼成部の傾斜は3号窯跡が1号窯跡に比較してやや緩やかであるが、いずれも30°以上で急傾斜である。しかし、1号窯跡では煙道下の床面が平坦に構築され3号窯跡とは構造を異にしており、その分だけ焼成部の長さが短い。また、両焼成窯跡とも焼成部床面には半円形の小平坦面を多数掘り込んでおり、規則的な配列が認められる箇所や礫を台として利用しているなどの共通性を見せている。燃焼部床面は両焼成窯跡ともほぼ水平であるが、1号窯跡では焚口部が平坦で燃焼部との境界が明瞭であるのに対して、3号窯跡では焚口部が半弧状の傾斜面で燃焼部との境界が不明瞭である（焚口部と燃焼部が一体と言うべきかもしれない）。

前庭部についても中央部が低く、両側に平坦部を形成し、全体の平面形状が円形に近い点では共通しているが、細部の構造はかなり異なっている。1号窯跡は中央部が両側の平坦面より明確に低く、幅広の溝状を呈しており、左右の平坦面はおおむね対称形で、作業場として利用されたと想定される。これに対して、3号窯跡の構築当初は中央部に溝状の窪みが前庭部の焚口寄りに認められるものの、すぐに埋積されて平坦化しており、焚口に接した部分に半円形の平坦部を形成している。この平坦部の南側は一段低くなってしまい、中央部に2条の溝を構築している。溝の構築部分は周辺よりやや低くなってしまい、溝の両側は一段高い平坦部を形成している。

焚口周辺に付属施設を設置している点も共通するが、設置位置や形態はかなり異なっている。1号窯跡では焚口に接する前庭部に左右対称の作業平坦面を構築しているが、3号窯跡では焚口部の両側に天井部に接して作業平坦面が構築されており、2段構成となっている。また、1号窯跡では前庭部と灰原の境界付近や前庭部の東側に作業場を構築しているが、3号窯跡では焚口付近の作業平坦面以外はあまり明確な形で平坦面（作業場）を構築しておらず、前庭部内を焚口周辺の平坦部と溝西側の平坦部の大きく2ヶ所に区分して機能させているように見える。

以上のように、1号窯跡と3号窯跡は規模や基本的な構造については共通し、連続的に

操業された須恵器焼成窯跡ではあるものの、最終段階の様相はかなり異なっているといえよう。

統合移転地（東広島キャンパス）内では、近接して位置する山中池南遺跡第2地点⁽⁷⁾でほぼ同じ時期の須恵器焼成窯跡（1号窯跡）が検出されている。本遺跡と同じく地下式窯窯で、窯体の長さ8.1m、幅2mと本遺跡1号窯跡よりさらに小規模である。焼成部の傾斜は約30°で、本遺跡3号窯跡とほぼ同じである。窯体を2回大きく改修していることから平面形状については構築当初からかなり変化している可能性があるが、焼成部・燃焼部境界付近に最大幅があり、燃焼部は焚口に向かって幅を次第に減じ、焚口部で急速に狭くなっている。焼成部側はほぼ同じ幅で推移し、煙道部手前で急速に幅を減じ、窯尻は先細りのU字状を呈している。窯体全体の平面形状は本遺跡3号窯跡に近いが、明瞭な焚口部の作り出しあるむしろ本遺跡1号窯跡に類似する。窯体各部の規模や比率を比較して見ると、焼成部長（最終操業時）は本遺跡1号窯跡が3.2m、3号窯跡が5.2m、山中池南遺跡第2地点が5.5mであり、本遺跡1号窯跡がかなり短く、本遺跡3号窯跡と山中池南遺跡第2地点がほぼ同じとなる⁽⁸⁾。窯体長との比較（窯体長：焼成部長）で見ると、本遺跡1号窯跡が1:0.38、本遺跡3号窯跡が1:0.58、山中池南遺跡第2地点が1:0.68であり、焼成部の実寸で山中池南遺跡第2地点がもっと長いが、比率の上ではさらに焼成部の長さが際立っている。いずれの焼成窯跡においても窯尻付近の1m程度の範囲には須恵器や支えに利用したと想定される礫などがほとんど検出されないことから実質的な焼成部長は1m程度差し引く必要があると思われるが、各部の比率については大きな変更はないといえる。ただ、山中池南遺跡第2地点については、焼成部、燃焼部、焚口部の境界が不明瞭である。現状では最終操業面の斜面部において須恵器の支え、置台などに利用したと想定される礫が集中している斜面下方最下端部を焼成部と燃焼部の境界と捉えているが、礫集中部が本来の位置から斜面下方に移動しているとすると、窯体長と焼成部長の比率は本遺跡3号窯跡とほぼ同様となる。窯体の縦断面形では、本遺跡1号・3号窯跡とも燃焼部床面の大半が平らで、端部が焼成部、焚口部に向かって傾斜する形態であるが、山中池南遺跡第2地点は断面皿状の形態で、両遺跡で相違を見せている。しかし、本遺跡3号窯跡は、焼成部床面の半円形小平坦面の範囲と最終操業面の須恵器・礫の出土状況から焼成部の範囲をほぼ想定できるものの、縦断面形から燃焼部との境界を確定することは困難で、焚口部についても燃焼部に向かって傾斜していて両者の境界を明確にすることは困難であることからすると、燃焼部床面が平坦であることを除けば、山中池南遺跡第2地点と共通した構造といえる。

前庭部については、本遺跡1号窯跡は左右の作業場を合わせて見ると、焚口側の北半部

は平面円形を呈しているが、焚口に直接接する主要部は作業部から一段低く、幅広の溝で、平面はトランペット状を呈しているのに対して、山中池南遺跡第2地点は平面円形状で、全体が周辺から一段低く、皿状を呈し、床面は焚口から同じレベルで連続している。本遺跡3号窯跡は前庭部の南半が未調査であることから全容を把握できないが、南側の予備調査区では須恵器混じりの焼土・木炭層は検出されておらず、明確な灰原が確認されていないことからすると前庭部が斜面下方に向かって開く形態ではなく、山中池南遺跡第2地点同様、平面円形状に閉じる形状である可能性がある。また、前庭部は周囲から一段低く、焚口から連続的な床面を形成している。

付属施設については、本遺跡1号窯跡では焚口に接した前庭部両側に作業平坦面を構築している他に、前庭部端部や東側に作業場を構築し、窯体の両側に溝を形成している。本遺跡3号窯跡では焚口部両側に作業平坦面を構築しているほか、前庭部内に作業場や溝を構築している。溝については焚口に接した作業場から一段低い位置にあり、前庭部全体を大きく掘り窪めて形成し、粗い砂質土で埋めて床面を形成していること、溝内は木炭層、木炭混じりの砂質土で埋積されていることなどから防湿の意味合いが強いものと思われる。山中池南遺跡第2地点では付属施設は明確でないが、焚口の両側がほぼ平坦で、本遺跡3号窯跡の作業平坦面と同様の機能を持っていた可能性が高い。

以上のように、焼成窯跡の規模や窯体各部の比率、付属施設の有無、前庭部の構造などに相違点はあるものの、全体として見ると、本遺跡3号窯跡と山中池南遺跡第2地点1号窯跡は共通した構造を示しているといえよう。これに対して、本遺跡1号窯跡は窯尻床面を平坦に形成（長さ約1m）しており、焼成部はこの部分を除くと約2.5m、窯体長との比率は1:0.3、床面の傾斜約38°であり、本遺跡3号焼成窯跡と比較して焼成部長が非常に短く、床面が急傾斜であるという特徴を指摘できる。

次に、周辺地域の中村編年II型式段階の須恵器焼成窯跡について概観してみる。安芸地域におけるII型式段階の須恵器焼成窯跡について、発掘調査事例に限定すると、本遺跡と山中池南遺跡以外になく、III型式まで含めても安芸高田市高宮町明連窯跡⁽⁹⁾、矢賀迫1号・2号窯跡⁽¹⁰⁾のみで、備後地域まで範囲を広げても三次市松ヶ迫遺跡1号・2号窯跡⁽¹¹⁾、庄原市大藪窯跡⁽¹²⁾を加えるのみで、両地域合わせて調査例は10例に満たない。これらの窯跡は、松ヶ迫遺跡1号窯跡が最も古く、II型式4～5段階、陣ヶ平西遺跡3号窯跡、大藪窯跡がII型式5段階、山中池南遺跡第2地点1号窯跡、陣ヶ平西遺跡1号窯跡がII型式5～6段階に位置づけられる。明連窯跡、矢賀迫1号・2号窯跡はいずれもIII型式2～3段階である。

大藪窯跡は煙道付近が残存しているのみであるので、構造についてはほとんど不明であ

るが、その他の窯跡はほぼ全容を知ることができる。安芸・備後地域について簡単にまとめておくと、松ヶ迫1号2次窯跡を除けばいずれも地下式無段窯である。窯体の規模は長さ7m前後～9m前後と様々であるが、長さ7m前後と9m前後の2種類に区分できそうであり、中村編年Ⅱ型式段階（以下、Ⅱ型式段階と略す）にはおおむね長さ8～9mとやや大型で、Ⅲ型式段階になると長さ7m前後に小型化する（明連、矢ヶ迫1・2号）ようである。広島大学校内の様相が一般化できるとすると、Ⅱ型式5段階末～6段階（本遺跡1号窯跡、中山池南遺跡第2地点）には長さ8m程度に小型化し、Ⅲ型式段階にさらに小型化すると見ることができるものかもしれない。焼成部の形状は、すでに述べたように、いずれも無段であり、本窯跡の様に棚状の施設が推定されている例はない。焼成部床面の傾斜は25°前後のやや緩やかなもの（松ヶ迫1・2号など）と35°前後以上の急なもの（本遺跡1号、明連など）が認められる。Ⅱ型式段階の窯跡では傾斜が緩やかで、Ⅲ型式段階では急になる傾向があるが、Ⅲ型式段階でも矢賀迫2号第2次窯跡など緩やかな床面を持つものがあり、逆に本遺跡を含む広島大学校内の焼成窯は全般にやや急傾斜である。本遺跡周辺地域ではⅢ型式段階以降焼成部床面の傾斜が急になる傾向が認められるものの、窯跡ごとの数値のバラツキは立地などとも関連するのであろう。窯跡各部の構成は窯体部、灰原部を基本とし、明瞭な前庭部を形成するのは本遺跡、中山池南遺跡第1地点の他、松ヶ迫1号・2号窯跡があり、いずれもⅡ型式段階の焼成窯跡である。Ⅲ型式段階の明連窯跡、矢賀迫1号・2号窯跡では明瞭な前庭部を形成せず、窯体から直接灰原部に移行しているような形態である。調査例は少ないとから、これが一般的な傾向かどうかは今後の検討が必要である。作業場などの付属施設については不明確な例が多いが、本遺跡の他では松ヶ迫1号窯跡で作業場が検出されており、矢賀迫1号・2号窯跡で土坑が、松ヶ迫1号窯跡、長藪窯跡で排水溝（近年、佐藤竜馬によって排煙調整構と評価されている⁽¹³⁾）が検出されている程度である。矢賀迫1号・2号窯跡検出の土坑は窯体に近接して位置しており、埋土中に焼土・木炭などを包含し、床面が焼けている例もある。矢賀迫窯跡では床面が赤色酸化していたものについては須恵器の1次焼成の可能性も指摘されているが、同様な遺構は一般的でなく、さらに検討が必要である。また、本遺跡1号窯跡、中山池南遺跡第2地点、松ヶ迫2号窯跡の前庭部などで柱穴が検出されており、焚口部や前庭部を覆うような上屋が存在したと想定される。

以上のように、中山池南遺跡第2地点を含めた広島大学校内の須恵器焼成窯跡は安芸・備後のⅡ型式後半段階の傾向に基本的に一致するものの、形状や付属施設を含めた構造を直接対比できる資料を欠いていると言える。そこで、さらに地域を広げて、中・四国地方、

九州地方の同時期（Ⅱ型式5・6段階～Ⅲ型式1・2段階）の須恵器焼成窯跡の様相を概観してみる。中・四国地方における須恵器焼成窯跡の発掘調査事例は少しづつ蓄積されつつあるが、必ずしも多くはなく、同時期に限るとかなり少ない。岡山県寒田4号窯跡⁽¹⁴⁾（Ⅱ型式5～6段階）、同5号窯跡⁽¹⁵⁾、くもんめふ2号窯跡⁽¹⁶⁾、二子御堂奥3号窯跡⁽¹⁷⁾（Ⅱ型式6段階）、寒風1号窯跡⁽¹⁸⁾（Ⅱ型式6段階～Ⅲ型式1段階か？）などを挙げができる。無段窯で地下式を基本としており、窯体の平面形状は焼成・燃焼部の境界付近がもっとも幅広であるが、全体に寸胴の形状で、焚口部がすぼまる形態が多く、焼成部床面傾斜や規模の点でも共通している。しかし、焼成部の施設や燃焼部・前庭部の構造、付属施設などについて見ると、本遺跡と異なるものが多い。本遺跡3号窯跡および山中池南遺跡第2地点に共通して見られる窯体の構造は燃焼部が焚口より一段低く縦断面が皿状を呈する点であるが、中・四国地方の同時期の須恵器焼成窯跡燃焼部床面の縦断面は平坦あるいはわずかに焚口に向かって斜行し、焚口と高低差をほとんど有さないものが大半であり、広島大学校内の須恵器焼成窯跡とは様相を異にしている。しかし、寒田5号窯跡、くもんめふ2号窯跡、二子御堂奥3号窯跡では燃焼部に舟底形土坑と呼ばれる大型の皿状の掘り込みを行っており、結果的に広島大学校内の焼成窯跡と同様な縦断面を形成している。構造的に類似した関係にあると言えよう。また、広島大学校内焼成窯跡の特徴として円形状の前庭部形成⁽¹⁹⁾、焼成部における小半円形状平坦面などを挙げができるが、中・四国地方では類例に乏しい。前者については、先行するⅡ型式3・4段階の岡山県木鍋山1号窯跡⁽²⁰⁾に類例があり、後者については、二子御堂奥3号窯跡に類例がある他、山陰地方西部に若干の類例があるようである⁽²¹⁾。また、本遺跡1号窯跡では窯体の両側で溝が検出されている。窯体の上半部（東半）は上部がかなり削平されていることから、溝が上部まで延びていたかどうかは確認することができないが、窯体の途中から溝が形成され排水用の溝としてはやや不自然であることから、上部まで延びていた可能性があり、排煙調整溝の可能性もある。周辺地域では、山陰地方や備後北部の松ヶ迫1号窯跡、大藪窯跡などで確認されている。

九州地方では、福岡県牛頸窯跡群⁽²²⁾、井手ヶ浦窯跡⁽²³⁾、天觀寺窯跡山群⁽²⁴⁾、大分県伊藤田窯跡群⁽²⁵⁾など、筑前・豊前地方を中心に同時期（Ⅱ型式5・6段階～Ⅲ型式1・2段階）の調査例が多く蓄積されている。両地域の様相を概観して見ると、①排煙調整溝を有する、②燃焼部に半円小平坦面を有する（明確な列を成す場合と、ややランダムに配列される場合がある）、③窯体平面において焼成部上半部が窯尻に向かって先細りとなり、窯尻がU字状または放物線状を呈するもの（Ⅱ型式5段階を含むそれ以前）から焼成部・燃焼部幅が

ほとんど同じ寸胴形で、窯尻が隅丸方形を呈するもの（Ⅱ型式5・6段階～Ⅲ型式1・2段階）へと変化するなどの特徴を指摘できる。これらの特徴が全ての窯跡で認められるわけではないが、①については一部筑後地域を含めて北部九州の広い地域に認められる。②については筑後地域でも広く認められ、筑前地域では平面寸胴状の焼成窯跡ではほぼ認めることができる。半円形小平坦面を有するもののうち列状配置を取るものは有段型式の焼成窯と構造的に共通すると言える。③については、豊前地域ではやや様相的ばらつきがあるが、筑前、特に牛頸窯跡群では明確な傾向性を指摘できる。これらの特徴のうち、②については広島大学校内の須恵器焼成窯跡に共通するものであり、③についても本遺跡3号窯跡・山中池南遺跡第2地点から本遺跡1号窯跡の変化に一致している。本遺跡1号窯跡の溝を排煙調整溝の一部と見れば、①についても共通点を認めることができるが、排煙調整溝が焚口部や前庭部まで延びている類例はないことからすると、現状では本遺跡1号窯跡の溝は別の機能を持つものと見ておくほうがよかろう。この他に、広島大学校内の須恵器焼成窯跡の特徴である燃焼部縦断面形状の類例を探ってみると、筑前・豊前を中心とする北部九州地方においても、燃焼部が焚口に向かって緩やかに傾斜するかほぼ平坦であるものが大半である。しかし、天観寺山第I区1号窯跡⁽²⁶⁾、同第I区2号窯跡⁽²⁷⁾などでは燃焼部床面が焚口に向かって緩やかに上っており、広島大学校内の須恵器焼成窯跡に比較的近い縦断面形を認めることができる。また、牛頸中通D-1号窯跡⁽²⁸⁾、同2号窯跡⁽²⁹⁾、牛頸小田浦39-I号窯跡⁽³⁰⁾、伊藤田草場窯跡⁽³¹⁾などでは燃焼部に舟底状の大型土坑が掘り込まれており、中・四国地方の寒田5号窯跡などと同様な構造が認められる。また、前庭部を円形に形成する類例は見当たらないが、井手ヶ浦2号窯跡⁽³²⁾、雉ヶ尾1号窯跡⁽³³⁾では焚口に連続して前庭部中央部が溝状の床面を形成し焚口両側に半円形状の作業場を設けており、本遺跡1号窯跡と同様の構造を示している。また、天観寺山第I区1号窯跡、同第I区2号窯跡、同II区1号窯跡⁽³⁴⁾、同第III区1号窯跡⁽³⁵⁾などではコの字状の前庭部を形成し、焚口に近接した前庭部に平面円形や楕円形の大型土坑を掘り込んでおり、関連性を認めることができるかもしれない。なお、この他にも、焚口近くに円形や楕円形の大型土坑を形成する例は北部九州においてかなりの例がある。

以上見てきたように、山中池南遺跡第2地点を含めた広島大学校内の須恵器焼成窯跡に見られる形態的、構造的特徴は中・四国地方の中でも若干の類例が認められるものの、その多くは北部九州地方に類例を求めるほうが適当と思われる。

次に、生産須恵器の特徴から系統関係を概観してみたい。本遺跡および山中池南遺跡第2地点の生産須恵器を特徴づける器種として、短脚高壺および甕を挙げることができる。

短脚高坏は広島大学校内ではいずれの須恵器焼成窯跡でも主要な生産器種のひとつであるが、西条盆地において前後の時期を含めても、古墳、集落跡いずれでも短脚高坏をまとめて出土する遺跡はない⁽³⁶⁾。形態について見ると、本遺跡の短脚高坏は、第1節で述べたように4型式に分類でき、A類については西条盆地では類例を指摘できず、B～D類についても基本的に類例はないと言えそうである。坏部の形態は、小谷黄幡遺跡S X5⁽³⁷⁾（報告書第1－20図74）、志村遺跡S B5⁽³⁸⁾（報告書第4－17図22）などのように坏部に明瞭な稜を有さない形態や体部～口縁部が直線的に立ち上がる形態が主体である。奥田大池古墳⁽³⁹⁾では短脚高坏が少量出土しており、いずれも坏部の深さが浅く、B類に近い形態（報告書第27図49）を認めることができるもの、現状ではこの程度である。西条盆地周辺では同期の須恵器焼成窯跡が調査されていないことから、須恵器生産の面からその系譜についてこれ以上考察することはできないが、古墳出土の須恵器について見ると、安芸高田市植谷古墳⁽⁴⁰⁾、粒原2号古墳⁽⁴¹⁾など高宮地域の古墳において一定量の短脚高坏を副葬する例が認められる。それらの高坏は本遺跡B類あるいはB類に近いものを主体としている。西条盆地の位置する安芸地域や隣接の周防・備後・出雲・石見地域においても短脚高坏を量産する須恵器焼成窯跡は見当たらないが、中・四国地方全体を概観しても同様の状況である⁽⁴²⁾。しかし、数少ない例として岡山県寒田4号窯跡⁽⁴³⁾を挙げることができ、短脚高坏を主要生産器種の1つとしている。同窯跡は本遺跡3号窯跡、1号窯跡第1操業期と一部並行する時期と思われる。短脚高坏には複数の型式が存在し、本遺跡のA類、C類に類似するものが散見されるが、本遺跡では確認できない坏部が明確な屈曲部を有さない形態や体部～口縁部が直立気味に屈曲する形態などが認められる。全体を復元できる資料が必ずしも多くないことから、どの型式に主体があるのかにわから判断できないが、長脚無蓋高坏の中に筒状の脚部で透かしを有さない形態が認められること、多様な口縁形態の甕を生産していることなど、中・四国地方の中では本遺跡ともっと近い様相を示していると言える。窯構造の面でも燃焼部～焚口部縦断面が皿状を呈することなどの共通性を指摘することができる。中・四国地方の同時期の須恵器焼成窯跡を概観すると、点数は少ないので、短脚高坏の存在を散見することができる。しかし、寒田4号窯跡で見られた坏部に稜を有さない形態や坏部の体部～口縁部が直立気味の形態が多く、本遺跡のB類、C類に類似する資料をわずかに指摘できる程度で、本遺跡A類、D類はまったく認めることはできない。九州地方では短脚高坏を量産している須恵器焼成窯跡を見ることはできず、牛頸窯跡群をはじめとする筑前地域では短脚高坏の生産そのものが少ないが、天觀寺山窯跡群、伊藤田窯跡群をはじめとする豊前地域の同時期の窯跡で短脚高坏を一定量生産している。本遺跡の

短脚高坏と同じ構成を示す遺跡はないが、山田東3号窯跡⁽⁴⁴⁾、伊藤田城山窯跡⁽⁴⁵⁾でA類、天觀寺山Ⅱ区2号窯跡⁽⁴⁶⁾、同Ⅲ区2号窯跡⁽⁴⁷⁾、同Ⅲ区4号窯跡⁽⁴⁸⁾、同Ⅲ区5号窯跡⁽⁴⁹⁾、伊藤田城山窯跡でB類に分類しうる資料が認められる。A類、B類類似の短脚高坏が本地域における主要型式のよう、これに稜を有さない形態が組み合っている。

本遺跡において、甕は大・中・小型⁽⁵⁰⁾の各器種を生産している⁽⁵¹⁾が、口縁部形態と大きさは1対1の関係ではない。口縁形態に基づいて6型式に分類したが、3号窯跡では甕の出土点数が少ないため、1号窯跡を中心になると、B類が小型を主体としている他は、中・大型を主体しながら小型～大型まで認められるようである。中・四国地方の須恵器焼成窯跡では複数の口縁形態の甕を生産しているが、本遺跡1号窯跡のように多様な口縁形態からなる器種構成を持つものは少ない。同時期の須恵器焼成窯跡としては、先にも取り上げた岡山県寒田4号窯跡において多様な口縁形態の甕の生産を認めることができるのみである。口縁形態を比較してみると、本遺跡A類、C類、D類、E類に類似する形態は認めることができるが、B類、F類⁽⁵²⁾は認められない。口縁部が内湾気味に直立する形態は本遺跡では確認できないが、山中池南遺跡第2地点に類似資料が認められる。また、本遺跡に類似する形態も、例えばA類では口縁部をわずかに肥厚させるもの（貼り付けか？）、D類では肥厚幅がかなり広いなど地域的な特徴も見せている。共通性と地域性（若干の時期的特徴を含む）を指摘することができるが、中・四国地方という広い枠の中で見るとかなり類似した様相を見て取ることができよう。九州地方においても多様な口縁形態で構成される遺跡は多くはないようで、福岡県天觀寺山Ⅲ区1号窯跡⁽⁵³⁾などを挙げられる程度である。口縁形態はA類、C類、D類、E類に類似したもののが認められるが、やはりB類、F類については類例を指摘することはできない。同時期の中・四国地方、九州地方の個別の窯跡を概観すると、A類、D類、E類に類似する甕を主としているようであり、基本的にB類、F類に相当する器種を指摘することはできない。ただし、F類については岡山県寒田4号窯跡で指摘した資料の他にも、福岡県天觀寺山Ⅰ区1号窯跡⁽⁵⁴⁾（Ⅱ型式6段階～Ⅲ型式1段階）、同2号窯跡⁽⁵⁵⁾（Ⅲ型式1段階）などで口頸部が緩やかに屈曲する形態が認められる。形態的にはA類およびE類から派生したものと想定される。本遺跡のF類も同様な系譜の中で理解すべきものと思われるが、A類を基本として廻などの別器種からの影響を受けながら本地域で独自に成立した可能性がある。また、B類は小型甕と思われ、本地域に特徴的な器種である可能性があるが、短頸壺などの可能性も考えておく必要があるかもしれない。

本遺跡3号窯跡出土の器種のうち、長脚高坏にも特徴的な形態が存在する。無蓋高坏で

筒状の脚部を有し透かしはない。坏部の体部中央にわずかに突帯状の段が認められるが、底部～口縁部まで緩やかなカーブを描き屈曲部を有さない。同様の形態の資料は西条盆地では古墳出土須恵器を含めて類例がない。脚裾部の状況や坏部の形状を問題としなければ、先にも取り上げた寒田4号窯跡にも認めることができるが、中・四国地方ではほとんど生産していない形態である。一方、九州地方では筑前、豊前を中心に北部九州地方ではⅡ型式5・6段階の須恵器焼成窯跡の資料に散見される。

以上見てきたように、本遺跡に特徴的な高坏、甕を中心に比較すると、中・四国地方においては、寒田4号窯跡と多くの共通点を指摘できるが、同遺跡を除くと、ほとんど対比資料を欠いている。本遺跡と同時期の須恵器焼成窯跡が備中地方を除くと非常に少ないとから今後の資料増加を俟って検討すべき点も多いが、少なくとも高坏の特徴については、中・四国地方の中で系譜を求めるよりも、観寺山窯跡群をはじめとする豊前地域との共通点をもっと多く指摘することができる。周防、長門地方の様相があまり明確ではないが、本遺跡の前後の時期を含めて、北部九州地方との関連が強い地域と見られている。須恵器焼成窯跡の形態や構造的特徴をあわせて勘案すれば、本遺跡における須恵器生産成立の背景には北部九州地方との系譜関係も考慮に入れておく必要があろう。中・四国地方における6世紀後葉～9世紀の須恵器焼成窯跡の様相をまとめた佐藤竜馬によると、本遺跡に後続する7世紀中葉～8世紀の地域圏は窯跡の構造的特徴から、山陰地方・山陽地方西部、山陽地方東部、四国地方北部・東部、四国地方西部・南部の4地域に区分され、山陰地方・山陽地方西部とその他の地域に大きくまとめることができるという⁽⁵⁶⁾。佐藤はこうした明確な地域圏形成の背景として、山陰地方・山陽地方西部におけるC型窯（直立煙道緩斜面窯）を取り上げ、その形態と窯詰め方法などからその成立に北部九州地方（牛頸窯）からの影響があったと見ている。これまでの分析結果とも矛盾しない見解である。

最後に、本遺跡の西条盆地における位置づけについて簡単に見ておきたい。本遺跡は須恵器焼成窯跡、集落跡、古墳から構成される。須恵器焼成窯跡は2基検出され、両窯跡は前後関係を持って操業されている。操業期は出土須恵器から中村編年Ⅱ型式5・6段階に相当し、細分型式では3型式が認識された。操業期間の長さについては明確に述べることはできないが、細分型式数と1号焼成窯跡燃焼部の還元面層の枚数などから15年前後と見積もっておきたい。集落跡については予備調査を行ったのみであることからその性格を十分に明らかにすることはできないが、須恵器焼成窯跡との位置関係、調査部分の内容や集落の想定範囲などから須恵器生産の工人集落と想定している。予備調査で出土した須恵器は3号焼成窯跡および1号焼成窯跡第1操業期に相当し、1号焼成窯跡第2操業期の須恵器は出

土していない。予備調査は集落想定範囲のごく一部であることから1号焼成窯第2操業期と同時期の遺構は別の部分に存在するものと想定される。この他にも、広島大学東広島キャンパス内には須恵器生産に関連した遺跡として山中池南遺跡第2地点、平木池遺跡⁽⁵⁷⁾があり、近接して位置している。山中池南遺跡は須恵器焼成窯跡と、これに関連した住居跡が検出されている。住居跡は2軒検出され、内1軒は鍛冶工房跡と考えられるものである。両住居跡からは多くの須恵器が出土し、隣接の須恵器焼成窯跡で生産された製品、破損品が多く含まれていた。須恵器生産に関連した遺構と思われるが、両住居跡で須恵器製作を行った痕跡は明らかではなく、構成住居跡数から見ても須恵器製作は別の場所で行ったと想定される。平木池遺跡は住居跡（工房などを含む）26軒、土坑16基などが検出され、出土土器は須恵器を主とし、土師器は貧弱な状況であった。須恵器製作を行っていた工人集落と想定できるものである。本章第1節で考察したように、これら広島大学校内の遺跡は時期差を有しており、平木池遺跡が最も古く本遺跡（陣ヶ平西遺跡）は次に位置づけられ、最後に山中池南遺跡第2地点が成立したものと想定され、それぞれ中村編年Ⅱ型式5段階全般、Ⅱ型式5段階後半～6段階、Ⅱ型式5段階後半～6段階初頭に中心をもつものと考えられる。これら3遺跡が同時存在していた時期が若干ある可能性があるが、平木池遺跡の存続期間の終わり頃が他の2遺跡と並行する程度である。本遺跡と山中池南遺跡第2地点については一定期間同時存在していた可能性が高い。いずれにせよ、本遺跡周辺が西条盆地において一時期須恵器生産の拠点のひとつであったものと思われる。

西条盆地における古墳時代須恵器焼成窯跡の調査は広島大学校内以外になく、未調査の窯跡を含めても1例を加えるに過ぎないことから、直接的に須恵器生産の様相を検討することはできない。集落遺跡の調査状況については、第1章でも見たように、あまり進んでおらず、後期についても例外ではない。特に、本遺跡や山中池南遺跡第2地点と同時期の集落の調査はきわめて少ない状況にある。古墳・墳墓についてはかなりの調査例が蓄積されており、須恵器副葬事例も多く認めることができる。しかし、本遺跡や山中池南遺跡第2地点と同時期のⅡ型式5段階後半～6段階やⅢ型式1・2段階の資料は皆無に近い状況であり、集落や古墳・墳墓の分析から本遺跡の位置づけや同期の西条盆地における須恵器生産の様相を窺うことはきわめて困難と言わざるを得ない。西条盆地における横穴式石室の導入はⅡ型式3～4段階と想定されるが、Ⅱ型式5段階に大幅な増加があったものと思われる。現在知られている古墳の半数程度が横穴式石室を内部主体とするもので、Ⅱ型式5・6段階に構築されたものがかなりの数を示すものと思われる。この時期には、西条町助平2号遺跡SK11土壙墓⁽⁵⁸⁾、高屋町西10地点SK土壙墓⁽⁵⁹⁾など墳丘を持つことのできない墳

墓にも須恵器副葬例を確認することができるとともに、集落遺跡においても蓋坏を中心に広く須恵器の使用が認められることから、西条盆地内においても須恵器生産が一定規模で行われていたと想定することができよう。そうした観点からすると、広島大学校内にさらに未知の須恵器窯跡が存在すると仮定しても、この地だけで西条盆地での必要量を賄ったとは到底考えられず、いくつかの生産拠点が西条盆地内にあったと見るべきであろう。

ところで、資料としては少ないものの、西条盆地内における本遺跡と同時期の遺跡について概観してみると、集落跡では、西条町助平3号遺跡⁽⁶⁰⁾、高屋町西7地点遺跡⁽⁶¹⁾、柳原遺跡⁽⁶²⁾、小谷大幡遺跡⁽⁶³⁾などがあるが、本遺跡で特徴的な短脚高坏と同様な型式は確認することができない。古墳では西条町奥田大池古墳⁽⁶⁴⁾、御園宇龍王山古墳⁽⁶⁵⁾、高屋町志村西古墳⁽⁶⁶⁾、志和町塚土2号古墳⁽⁶⁷⁾、蛇追山古墳⁽⁶⁸⁾などが知られているが、高坏の副葬例が少なく、本遺跡と同型式の短脚高坏も認められない。現状では同時期の資料が西条盆地の北半部を中心に検出されていることから、広島大学校内の遺跡で生産された須恵器供給先について西条盆地南部の調査の進展が俟たれるところであるが、本遺跡に比較的近い西条町助平3号遺跡、奥田大池古墳などで関連資料が出土していないことが気がかりである。また、平木池遺跡、山中池南遺跡第2地点を含めた広島大学校内の須恵器生産関連遺跡はⅡ型式5・6段階というきわめて短い存続期間の中で成立・展開・終焉している。成立にあたっては、先に述べたように、地域内における須恵器需要が背景にあるものと思われる。終焉の時期については中央、地方ともに政治的再編期にあたっており、何らかの政治的な意図を持って工人の移動や集落の廃絶が行われた可能性を想定することも可能である。今後、先に指摘した北部九州地方との系譜関係も含めた本遺跡をはじめとする広島大学校内の須恵器生産関連遺跡群の成立・終焉の背景と生産物の需給関係を解明していく必要があろう。

3. 古代の遺構と遺物

調査区西部のC4・5区で奈良時代の須恵器焼成窯跡1基（SY02）を検出した。2号須恵器焼成窯跡SY02は1号・3号須恵器焼成窯跡の西側に隣接して構築されており、地下式窯窓で、窓体、前庭部、灰原からなる。天井部はおおむね崩落していたが、燃焼部付近は比較的良好に残存しており、窓体の形状を推定することができた。しかし、調査途上で天井部～窓体上部の大半が崩落した。前庭部～焚口部付近までは掘り込んで床を形成しており、焚口から前庭部に向かってハの字状に広がっている。

窓体部平面は燃焼部・焼成部の境界付近に最大幅があり、わずかに胴張りの形状で、窓尻、焚口に向かって幅を少しづつ減じており、窓尻付近はU字形を呈している。長さ約5.8m、

幅は中央部で約1.6m、焚口部で約1.3mである。断面形は最大幅が床面のやや上方にあり、蒲鉾形を呈していたと想定され、高さは中央部で約1.0m、焚口部で約70cmと推定される。甕などの大型器種を焼いていたのであれば、焚口部付近は天井を別に作っていた可能性がある。焼成部床面は急傾斜で、ほぼ直線的に傾斜しており、39°の傾斜である。床面の構築に粘土を使用していたと思われ、窯尻近くには本来の床面が残存しており、古墳時代の焼成窯跡同様、半円形小平坦面が形成されている。焼成部全体に同様の小平坦面が形成されていたものと想定される。窯尻では床面が約64°と急傾斜となり、上方でさらに急傾斜となって煙道に向かって直線的に伸びるものと思われる。燃焼部床面はほぼ水平で、焚口まで連続した床面を形成している。窯体構築当初は焚口と燃焼部の境界でわずかに段を形成しているが、初期の操業によって両者の境界は不明瞭となっている。

前庭部は灰原に向かってハの字状に開いており、台形状を呈する。長さ約3m、焚口幅約1.3m、灰原との境界付近で幅約4mの規模である。床面はほぼ平坦で、焚口から約1m離れた南側壁沿いに柱状の直径約60cmの小土坑が掘り込まれている。用途は不明である。

灰原は前庭部に接して斜面部を浅く掘り込んで構築しており、下方は自然地形へと移行しているものと思われる。堆積土は木炭層を主体とし、間層を挟んで大きく2分される。燃焼部の堆積も考慮すると、少なくとも2回の操業が想定されるが、燃焼部や灰原の堆積物、灰原の出土須恵器の量から見て操業期間は短期間であったものと考えられ、須恵器の型式細分もできない。前庭部の構築を含め、古墳時代遺物包含層を掘削したために、灰原を中心に古墳時代の須恵器が混在した形で出土している。

出土須恵器は灰原を中心に出土しており、窯体部内には数点の破片が出土したのみで、前庭部からの出土もわずかである。灰原出土須恵器についても混在する古墳時代須恵器を除くと、個体数は決して多くない。

出土須恵器は、蓋坏、坏、短頸壺、長頸壺、甕などがある。灰原については調査区外に広がっていることから関連資料は今後の調査によって追加されるものと思われるが、元々本遺跡の残された生産物はあまり多くなかったようである。本章第2節で検討したように、時期的には中村編年IV型式2段階⁽⁶⁹⁾（以下、中村編年を略す）に位置づけられるものである。西条盆地における同時期の遺跡はほとんど調査例がなく、本遺跡成立の背景や供給先などについてもほとんど考察できる状況はない。今後の調査の進展を俟って検討したい。

ここで、2号焼成窯跡（以下、2号窯跡と略す）の特徴についてまとめておくと、地下式窯で、古墳時代の1号・3号窯跡と同じ構造であるが、いくつかの相違点が指摘できる。規模は長さ約5.8mとかなり小型である。窯体、前庭部、灰原で構成されるが、前

庭部を除くと、作業場などの付属施設は認められない。1号・3号窯跡に比べると、燃焼部に対する焼成部の割合が小さく、長さが短い。焼成部床面は燃焼部から緩やかに変化し、下底部から約3分の1辺りから傾斜度を増して急傾斜となっている。床面傾斜は最大で約39°と古墳時代の例に比べると急傾斜である。煙道は窯尻からほぼ直立する形（直立煙道型）で形成されているものと思われる。前庭部の途中から焚口部に向かって緩やかに傾斜し、燃焼部と焚口部は段を有するが急激に落込む状況ではなく、前庭部から燃焼部下底面に向けて緩やかに傾斜している。

周辺地域の同時期の須恵器焼成窯跡として、尾道市久井町小林1号窯跡⁽⁷⁰⁾がある。小林1号窯跡は地下式直立煙道型窯で、焚口部以下の大部分を道路工事によって削平されているが、窯体の長さが約6.5mと推定され、規模・構造とも本遺跡2号窯跡によく類似している。小林1号窯跡では煙道部が残存している。煙道出口の平面位置は斜面上方にわずかにずれており、本遺跡2号窯跡も同様な形態が推定できる。焼成部は窯尻に向かって上方に傾斜角を増しており、窯尻側では35~40°と急傾斜である。燃焼部と焼成部の境界に段差があり、燃焼部は幅広の溝状の掘り込みを行って形成されている。床面は焚口に向かって緩やかに下降しているが、焚口付近ではわずかに上方へ傾斜を変化させている。この他に、東広島市高屋町東山窯跡⁽⁷¹⁾があるが、前庭部および灰原の一部を調査しているのみで、窯の基本構造は不明である。

周辺地域で本遺跡と前後する時期の須恵器焼成窯跡をあげると、安芸高田市高宮町明連窯跡⁽⁷²⁾（Ⅲ型式2段階）、矢賀迫1号・2号窯跡⁽⁷³⁾（Ⅲ型式2~3段階）、尾道市御調町熊ヶ迫4号・8号窯跡⁽⁷⁴⁾（Ⅳ型式3段階）、同2号窯跡⁽⁷⁵⁾（Ⅳ型式4段階）などがある。明連窯跡は地下式窯で、煙道は残されていないが、窯尻壁の立ち上がりから直立煙道型に属する可能性が高い。窯体および焚口付近以外は削平されており、付属施設の有無などは不明であるが、窯体の全長7.6m、幅約1.9mの規模である。平面は焼成部・燃焼部境界付近に最大幅があり、焼成部は窯尻に、燃焼部は焚口に向かってわずかに幅を減じている。焼成部は燃焼部側約1/3が約22°程度と傾斜が緩やかであるが、窯尻側の2/3は34°と傾斜が急になっている。燃焼部は焚口に向かって緩やかに下方へ傾斜している。矢賀迫1号窯跡・2号窯跡は非常に良く似た規模、形態、構造で、地下式窯である。2号窯跡は煙道が残存しており、直立煙道型で、1号窯跡も窯尻壁の立ち上がりから見て同型であろう。1号窯跡は燃焼部の半分程度が削平を受けているが、床面については残存しており、焚口付近までほぼ残存しているものと推定される。現存で窯体全長6.9m、幅約1.85mである。平面形は窯体中央部に最大幅を有し、窯尻、焚口に向かって比較的急に幅を減じており、

胴張形を呈する。燃焼部と焼成部の境界は不明瞭で、焚口から約2m付近がもっとも低く、この部分からさらに2m窯尻側は緩やかに上方へ傾斜（約20°）しているが、焼成部の主要部は32°と比較的急傾斜である。矢賀追2号窯跡も前庭部～灰原が削平されており、焚口付近も失われている。窯体は1度大きく改修されており、構築時の床は焼成部窯尻側がかなり失われている。最終操業面での規模は全長7.19m、幅2.05mである。燃焼部・焼成部の境界は不明瞭で、焼成部は窯尻に向かって次第に急傾斜となり、窯尻側の約半分は直線的な傾斜を示し、約35°である。燃焼部断面は皿状で、焚口に向かって上方に緩やかに傾斜している。

熊ヶ迫窯跡群では7基の須恵器窯跡が調査されており、8号・4号・2号窯跡が奈良時代に属し、妹尾周三⁽⁷⁶⁾によると、8号・4号窯跡が8世紀後半古相、2号窯跡が8世紀新相に位置づけられている。いずれも地下式窯で、8号窯跡は直立煙道型、その他も窯尻壁の立ち上がり状況から見て同型式であろう。8号窯跡は前庭部以下が削平されているが、焚口および焚口付近の前庭部は残存している。平面形は窯体中央部付近に最大幅があり、胴張形であるが、窯尻、焚口に向かって幅の通減率は低く、窯尻は幅広のU字状である。また、焚口付近がもっとも幅狭となっている。窯体は全長約6.7m、幅1.9mである。焼成部は窯尻に向かって次第に傾斜が急になるが、全体に緩やかで、窯尻付近で約26°である。燃焼部はほぼ平坦で、そのまま焚口、前庭部へ連続している。4号窯跡もほぼ同様の形態と規模を有する。前庭部は円形状の掘り込みで形成され、狭い平坦面に続いて長径約3.5mの橢円形の土坑が構築されている。平面形がやや左右非対称気味であるため明確にできないが、窯体の最大幅は燃焼部との境界付近にあり、わずかに胴張状を呈する。窯体は全長約7.2m、幅約1.9mの規模で、焼成部床面は窯尻に向かって緩やかに上方に傾斜するが、全体に非常に緩やかで、構築当初の床面傾斜は窯尻付近で約32°である。燃焼部床面はほぼ平坦で、焚口、前庭部にそのまま連続している。2号窯跡は灰原の一部が削平されているが、ほぼ全体が残されている。窯体平面は焼成部中央付近に最大幅があり、焼成部は胴張状を呈するが、燃焼部はほぼ同じ幅で、焚口付近がやや狭い。窯体は全長約7.8m、幅2.3mの規模である。焼成部床面は、他の窯跡同様、窯尻に向かって上方へ次第に傾斜しているが、全体に緩やかで窯尻付近（窯尻はわずかに平坦面を形成）で25°である。燃焼部床はほぼ平坦で、前庭部まで連続している。前庭部は方形の掘り込みを行って構築し、狭い平坦面を形成している。西半部には窯体主軸方向に溝を配置しており、灰原に連続している。灰原では前庭部東半に連続する形で新たに溝が構築されており、西側の溝と合わせて斜面下方まで伸びている。

これまで、本遺跡周辺地域における2号窯跡に前後する時期の須恵器焼成窯跡について概観したが、本遺跡2号窯跡を含め、いずれも地下式無段窯で、直立煙道型と考えられる。前庭部以下を削平されているものも多いことから、付属施設の有無や前庭部の形態などについては十分に比較することができないが、前庭部以外の施設を付設している例はほとんどなく、基本的には、窯体、前庭部、灰原を基本とする単純な構成が主体と思われる。

窯体の平面形状は窯体の中央部付近に最大幅を有するもの（矢賀迫1号・2号、小林1号、熊ヶ迫2号）と焼成部・燃焼部の境界付近に最大幅を有するもの（明連、熊ヶ迫4号・8号）があり、いずれも胴張形である。前者は胴張が強いが、後者は胴張が弱く、寸胴に近い。本遺跡2号窯跡は後者に近いが、現状では時期的な様相とは思われない。窯体の規模は6～8m程度で、本遺跡2号窯跡はもっとも小規模である。Ⅲ型式1段階の窯跡が中国地方全体を含めてもほとんど検出されていないことから明確なことは言えないが、Ⅱ型式5・6段階では全長8～10m程度の規模が一般的であるのに対してⅢ型式2段階以降やや小規模となる傾向が認められ、本遺跡2号窯跡前後の時期では、本遺跡の属するⅣ型式前半段階が6～7m程度ともっとも小規模である。焼成部床面の最大傾斜を比較すると、35°～40°程度の急傾斜のもの（明連、矢賀迫1号・2号、小林1号）と20～25°程度の緩傾斜のもの（熊ヶ迫2号・4号・8号）がある。本遺跡2号窯跡は前者に属し、急傾斜の焼成部はいずれもⅣ型式1・2段階以前である。後者はいずれもⅣ型式3・4段階であり、後続する熊ヶ原3号・7号窯跡、東ガガラ窯跡など平安時代前期の須恵器焼成窯跡でも同様な傾向が認められることから、時期的な特徴を示しているものと思われる。燃焼部床面縦断面は矢賀迫1号・2号窯跡が皿状の形態を示すほかは、焚口に向かって緩やかに下方に傾斜するかほとんど平坦であり、工人の系譜などに関係するのかもしれない。

以上のように、窯体規模の面ではⅡ型式5・6段階と比較するとⅢ型式のある段階からやや小型化している。本遺跡2号窯跡の時期がⅢ～Ⅳ型式では最も小規模となる時期と捉えられる。焼成部の床面傾斜はⅡ型式5・6段階以降急傾斜となる傾向が認められ、Ⅲ型式2段階～Ⅳ型式2段階がもっとも急傾斜であるが、Ⅳ型式3段階以降非常に緩やかとなる。本遺跡2号窯跡や同時期の小林1号窯跡は規模の点ではⅢ型式以降の様相を示し、焼成部床面傾斜ではⅢ型式段階と同様の様相を示している。規模や焼成部床面傾斜の変遷の中ではⅡ型式5・6段階とⅣ型式後半以降と中間的な様相を示していると言えよう。

4. 広島大学統合移転地（東広島キャンパス）の埋蔵文化財調査の成果

広島大学の東広島への統合移転に伴う埋蔵文化財の調査は、1978年の広島大学文学部考

古学研究室の分布調査に始まる。6次にわたる調査が行われ（第1次調査は広島県教育委員会と合同調査），10ヶ所の遺跡が新たに確認された。これらのうち，1979年，1980年に東ガガラ須恵器焼成窯跡，清水奥山遺跡，平木池遺跡，鏡千人塚遺跡の発掘調査が広島県教育委員会によって実施された。その後，1981年からは広島大学内に統合移転地埋蔵文化財調査委員会が設置され，統合移転地（東広島キャンパス）内の埋蔵文化財に関する調査研究については広島大学が独自に実施することとなった。この業務は，その後，1999年からは環境保全委員会に，さらに2004年からは埋蔵文化財調査室に引き継がれ，現在に至っている。この間，新たな遺跡の発見と発掘調査が実施され，現在，統合移転地（東広島キャンパス）内では30遺跡の存在が知られることとなった。そのうち14遺跡の発掘調査が実施され，きわめて多くの成果を得ている。発掘調査の概要については『統合移転地埋蔵文化財調査発掘年報』という形で公にしてきたが，1981年以降，大規模な開発計画が継続して行われたことから，発掘調査報告書については作成することができない状態が続いていた。発掘調査報告書の作成が可能となったのは，大学が独自に調査を開始した1981年から20年以上が経過した2002年からであり，本報告書をもって完了することとなる。

これまでに発掘調査を実施した遺跡を列挙すると，鏡西谷遺跡，鏡東谷遺跡，鏡千人塚遺跡，西ガカラ遺跡第1地点，同第2地点，山中池南遺跡第1地点，同第2地点，同第6地点，陣ヶ平西遺跡，鴻の巣遺跡，鴻の巣北遺跡，鴻の巣南遺跡，ぶどう池南遺跡第1地点，同第2地点の14遺跡である。これらの遺跡は旧石器時代～江戸時代まで各時代の遺跡が含まれており，地域史を構成する重要な資料を提供し，中国地方や日本列島全体など，より広範囲な地域の歴史を解明するために欠くことのできない貴重な資料を含んでいる。

成果の主要なものをまとめておくと，西ガガラ遺跡第1地点，同第2地点，鴻の巣遺跡では旧石器時代，縄文時代の集落跡を検出した。旧石器時代出土石器群は中国地方において編年研究の基準資料となり，西南日本を代表する資料として位置づけられている。また，西ガガラ遺跡第1地点の旧石器時代住居跡をはじめ，旧石器時代および縄文時代の集落分析を行う上で良好な資料が検出された。旧石器時代については，中国地方における集落構造分析の行われた数少ない例であり，当該期の様相を考察する上で貴重な資料と評価されるとともにモデル的な研究となった。縄文時代については，山中池南遺跡第1地点，同第2地点，同第6地点などの調査・分析成果によって，狩猟を中心とする短期的な集落，あるいはキャンプの様相が明らかとなり，これまで概念的であった縄文時代の狩猟活動の研究に対して具体的な姿を提示することとなった。

鏡西谷遺跡，鴻の巣南遺跡では弥生時代の集落跡を良好な形で検出した。鏡西谷遺跡は

中期後葉～後期前葉の集落跡であり、多くの資料が良好な形で出土したが、特にD地区出土の後期初頭の弥生土器は西条盆地の同時期の基準資料となった。鴻の巣南遺跡は後期後葉の集落遺跡で、1号住居跡（竪穴住居跡）で通常検出困難な垂木跡が残されており、住居構造の研究に貴重な資料を提供した。また、鴻の巣遺跡では中期前葉の集落の一部を調査し、西条盆地では数少ない当該期の資料を提供した。

陣ヶ平西遺跡、山中池南遺跡第2地点では古墳時代の須恵器生産に関連する遺構を良好な形で検出した。両遺跡とも古墳時代後期後半に位置づけられるもので、陣ヶ平西遺跡では古墳時代の須恵器焼成窯跡、集落跡、古墳を検出し、同時期の須恵器生産の様相を分析する上で全国的に見ても貴重な資料が明らかとなった。山中池南遺跡第2地点でも、住居跡、須恵器焼成窯跡を検出した。同遺跡では須恵器の製作は行っておらず、須恵器窯操業に関連した住居と思われるが、検出された2軒のうち1軒は工房跡であり、鍛冶作業を行っている。同期の鍛冶炉検出例は広島県では数例に過ぎない。古墳時代の須恵器焼成窯跡の調査例は、本例を除くと広島県内では2例のみであり、両遺跡と同時期に限定すると、中・四国地方においても数例を数えるのみである。古墳時代後期後半の手工業生産の解明に重要な資料を提供したと言えよう。なお、陣ヶ平西遺跡においては奈良時代前半期の須恵器焼成窯跡を検出しており、これについても中・四国地方では同期の須恵器焼成窯跡がわずかで、貴重な例を追加した。

鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡、鏡千人塚遺跡では、中世の居館跡、墓地などを検出した。鏡西谷遺跡では、鎌倉時代～室町時代の居館跡、砦跡、墓地を検出した。とくに、C地区で検出した鎌倉時代前半期に位置づけられる居館跡では中国産青磁や瓦器、東播系須恵器、京都系土師質土器、石鍋など西日本各地の産物が在地産の土師質土器とともに出土しており、1時期のきわめて良好な内容の遺物群が検出され、中・四国地方を代表する編年資料を提供した。同時に、瀬戸内海の水運や京都方面につながりを持った有力者の存在が想定される⁽⁷⁷⁾など、中世前期における地方の政治的・経済的様相を考察する上でも欠くことのできない資料となった。鏡東谷遺跡では室町時代の居館跡を検出し、千人塚遺跡では室町時代の墓地を検出した。これらの遺跡は、大内氏が西方支配の拠点として築いた室町時代の鏡山城跡の麓に位置しており、鏡山城を守護した武士団の居館跡や墓地と想定される。鏡西谷遺跡をはじめとするこれらの中世の遺跡は、鏡山城築城以前からこの地が西条盆地において政治・経済的に重要な場所であったことを明らかにしたことは中世史において大きな成果を加えたといえる。

先に述べたように、統合移転地内における埋蔵文化財の発掘調査は、広島県教育委員会

による1979・80年の調査を含めると、2000年までの22年間で17遺跡の発掘調査を行ったことになる。これらの調査は広島大学の統合移転という開発に伴うものであり、調査の後、遺跡の取り扱いについて協議した結果、多くの場合開発を行い、遺跡は消滅している。しかし、一方では協議の結果、大学当局が学術的価値を十分に認識し、発掘調査後計画変更して部分保存した遺跡も少なくない。具体的には、鏡西谷遺跡では弥生時代集落跡、中世の居館跡、墓地が検出されたA・D・E・G地区（現状保存）、鏡東谷遺跡では横穴式石室（移築保存）、西ガガラ遺跡第1地点では旧石器時代および縄文時代の集落跡（現状保存）、山中池南遺跡第1地点では縄文時代の集落跡および中世の鍛冶炉、炭窯（現状保存）、山中池南遺跡第2地点では古墳時代の住居跡、須恵器焼成窯跡（現状保存）、鴻の巣遺跡では弥生時代の堅穴住居跡（現状保存）、鴻の巣南遺跡では弥生時代の堅穴住居跡（現状保存）を保存した。また、予備調査の結果、開発計画を変更して、陣ヶ平西遺跡の古墳時代集落跡および古墳、山中池南遺跡第2地点の縄文時代集落跡、中世の居館跡、墓地など、山中池南遺跡第3地点、同第4地点の縄文時代集落跡全域、西ガガラ遺跡第2地点の発掘調査範囲以外の地域、新池遺跡の旧石器時代および縄文時代の集落跡、鴻の巣遺跡の発掘調査範囲以外の地域、鴻の巣北遺跡の発掘調査範囲以外の地域について現状保存（緑地保存）することとなった。これらの広島大学における遺跡保存への理解と取り組みは全国的に見ても高く評価されるべきものであろう。保存遺跡の現状は、発掘調査を行った遺跡については説明板を設置し、定期的に草刈を行って、普及活動に供している。また、鏡西谷遺跡については遺跡内の散策道を整備しており、山中池南遺跡第2地点については遺構復元を含めて現在整備計画が進行中である。その他の発掘調査実施遺跡についても、遺構の復元表示も含めて、今後少しずつ整備を行っていくことを計画している。また、予備調査の結果保存した遺跡については緑地保存をしており、今後の活用法を検討中である。今後とも関係者の皆様に一層のご理解とご協力を願い申し上げたい。

（藤野次史）

注

- (1) 道上康仁編『奥田大池遺跡』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1983。
- (2) 藤野次史・増田直人「鏡西谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書I - 農場地区の調査 -』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室, 25~176頁, 2003。
- (3) 藤野次史「西条盆地と広島大学校内の弥生土器」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書IV - アカデミック西部地区の調査 -』広島大学環境保全委員会埋蔵文化

財調査室, 407~448頁, 2007。

- (4) 中村浩『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版, 2001。
- (5) 山中池南遺跡第2地点から南へやや離れて西ガガラ古墳が存在するが, 古墳から陣ヶ平西遺跡, 山中池南遺跡第2地点などを望むことはできず, 山中池南遺跡第2地点とは反対側への眺望が開けていることから, これら3遺跡との直接的な関わりはないものと思われる。
- (6) 佐藤竜馬「中・四国の須恵器窯」『須恵器窯の技術と系譜－豊科, 信濃, そして日本列島－ 窯跡研究会第2回シンポジウム発表要旨』窯跡研究会, 77~84頁, 1999。
- (7) 藤野次史・楳林啓介「山中池南遺跡第2地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室, 91~256頁, 2005。
- (8) 本遺跡1号窯跡の焼成部傾斜がもっとも急なので, 実寸長の対比ではもう少し他の窯跡との差が小さいが, 特徴を考察する上で問題にはならない程度である。
- (9) 中田昭「明連窯跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 広島県教育委員会, 347~357頁, 1979。
- (10) 新谷武夫・向田裕始「矢賀迫遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 広島県教育委員会, 359~391頁, 1979。
- (11) 金井亀喜・小都隆編『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告書－三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1981。
- (12) 古瀬清秀「帝釈長戸遺跡の調査」『帝釈峠遺跡群発掘調査室年報』Ⅲ 広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室, 39~49頁, 1980。
- (13) 注(6)と同じ(佐藤 1999)。
- (14) 藤原好二編『寒田窯跡群4号』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 倉敷市埋蔵文化財センター, 2003。
- (15) 柳瀬昭彦・渋谷秀敏・夏原信義・塩田浩平・川井直人「寒田5号窯址の調査」『黒土窯址・寒田窯址 広域営農団地農道整備事業(備南地区)に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(31) 岡山県教育委員会, 13~27頁, 1979。
- (16) 武田恭彰「山陽の須恵器窯－備前・備中・備後・安芸－」『須恵器窯構造資料集1－出現期～8世紀中頃を中心として－』窯跡研究会, 465~476頁, 1999。
- (17) 葛原克人・池畠耕一「二子御堂奥古窯址群」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 岡山県教育委員会, 255~304頁, 1974。
- (18) 山磨康平編『寒風古窯址群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(27) 岡山県教育委員会, 1978。
- (19) 1号窯跡は作業場を含めて円形状の前庭部を形成しているが, 焚口に接続する主要部は溝状の形状を示し, 厳密に言えば, 本遺跡3号窯跡, 山中池南遺跡第2地点とは異なる。
- (20) 池田善文・亀田修一「山陽(山口, 岡山, 広島)」『須恵器集成図録』第5巻西日本編 雄山閣, 53~73頁, 1996。
- (21) 東広島市教育委員会妹尾周三氏教示。
- (22) 副島邦弘・舟山良一編『牛頸中通遺跡群』福岡県大野城市大字首頸中通所在遺跡調査報

- 告』大野城跡文化財調査報告書第4集大野城市教育委員会, 1980。
- 舟山良一編『牛頸小田浦窯跡群 牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第35集 大野城市教育委員会, 1992。
- 舟山良一編『牛頸小田浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第40集 大野城市教育委員会, 1993。
- 舟山良一編『牛頸月ノ浦窯跡群 牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』大野城市文化財調査報告書第39集 大野城市教育委員会, 1993ほか。
- (23) 舟山良一・副島邦弘・佐藤正義「北部九州(福岡, 大分, 佐賀, 長崎)」『須恵器集成図録 第5卷西日本編』雄山閣出版, 13~38頁, 図版1~80, 1996。
- (24) 小田富士夫編『-北九州市小倉南区-天觀寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会, 1977。
- (25) 小林昭彦編『伊藤田窯跡群3』大分県教育委員会, 1985。
- 小林昭彦編『伊藤田窯跡群 一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』大分県教育委員会, 1992。
- 舟山良一・副島邦弘・佐藤正義「北部九州(福岡, 大分, 佐賀, 長崎)」『須恵器集成図録 第5卷西日本編』雄山閣出版, 13~38頁, 図版1~80, 1996。
- (26) 注(23)と同じ(小田編 1977)。
- (27) 注(23)と同じ(小田編 1977)。
- (28) 注(22)と同じ(副島・舟山編 1980)。
- (29) 舟山良一編『牛頸小田浦窯跡群 牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第35集 大野城市教育委員会, 1992。
- (30) 注(28)と同じ(舟山編 1992)。
- (31) 小林昭彦編『伊藤田窯跡群 一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』大分県教育委員会, 1992。
- (32) 舟山良一・副島邦弘・佐藤正義「北部九州(福岡, 大分, 佐賀, 長崎)」『須恵器集成図録 第5卷西日本編』雄山閣出版, 13~38頁, 図版1~80, 1996。
- (33) 酒井仁夫「雉子ヶ尾窯跡の調査内容」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XIII 福岡県教育委員会, 123~136頁, 1977。
- (34) 注(23)と同じ(小田編 1977)。
- (35) 注(23)と同じ(小田編 1977)。
- (35) ただし、同時期の一一定規模を有する集落跡については小谷黄幡遺跡、柳原遺跡など調査例が少なく、古墳についても同様に同期の須恵器を副葬する例が非常に少ない現状では今後の調査に俟つ部分が多い。
- (37) 錫治益生「小谷黄幡遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 9~64頁, 1992。
- (38) 尾崎光伸「志村遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 88~153頁, 1992。
- (39) 道上康仁編『奥田大池遺跡』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1983。
- (40) 石井哲之「植谷古墳」『植谷遺跡・根野見遺跡・植谷古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文

- 化財調査センター調査報告書第199集（財）広島県埋蔵文化財調査センター、63～86頁、2002。
- (41) 松井和幸・石井哲之編著『拉原第2号・3号古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第194集（財）広島県埋蔵文化財調査センター、2001。
- (42) 長門を含め周防、安芸、備後、石見、出雲においては本遺跡と同期の須恵器焼成窯跡の良好な調査例がないことから現状が当時の情況をどこまで示しているのは定かでない。今後の調査動向に注目したい。
- (43) 注(14)と同じ（藤原編 2003）。
- (44) 注(32)と同じ（舟山・副島・佐藤 1996）。
- (45) 注(32)と同じ（舟山・副島・佐藤 1996）。
- (46) 注(24)と同じ（小田編 1977）。
- (47) 注(24)と同じ（小田編 1977）。
- (48) 注(24)と同じ（小田編 1977）。
- (49) 注(24)と同じ（小田編 1977）。
- (50) 仮に、器高20cm前後未満を小型、器高20～60cm前後を中型、器高60cm前後以上を大型としておく。
- (51) 3号窯跡の甕については中・大型を生産していることは確認できるが、小型については確認できない。同窯跡は操業期が短期間であることや前庭部・灰原を完掘していないことなどから構成器種の一部しか復元できず、小型についても生産している可能性はある。
- (52) 口縁部と頸部の間に段を有し、わずかに複合口縁状となる資料（報告書第26図901）が1点あるが、明確な屈曲を示す個体はない。
- (53) 注(24)と同じ（小田編 1977）。
- (54) 注(24)と同じ（小田編 1977）。
- (55) 注(24)と同じ（小田編 1977）。
- (56) 注(6)と同じ（佐藤 1999）。
- (57) 植田千佳穂編『平木池遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター、1982。
- (58) 植田千佳穂・道上康仁「助平2号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（I）広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター、93～162頁、1983。
- (59) 植田 広「西10地点遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群V－西地区遺跡群の発掘調査報告－』（財）広島県埋蔵文化財調査センター、135～150頁、1993。
- (60) 青山 透「助平3号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書I』東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集 東広島市教育委員会、51～80頁、1992。
佐々木直彦・松村昌彦「助平3号遺跡の調査」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（II）広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第114集（財）広島県埋蔵文化財調査センター、42～169頁、1993。
- (61) 松井和幸「西7地点遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』V 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第107集（財）広島県埋蔵文化財調査センター、67～80頁、1993。

- (62) 錫治益生「柳原遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』IX 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第115集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 66~95頁, 1993。
- (63) 注(37)と同じ(錫治 1992)。
- (64) 注(39)と同じ(道上編 1983)。
- (65) 石井隆博「御蘭宇龍王山古墳」『芸備』第26集, 2~5頁, 1997。
- (66) 錫治益生「志村西古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』VIII (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 76~87頁, 1992
- (67) 河瀬正利編著『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』塚土古墳発掘調査団, 1989。
- (68) 注(67)と同じ(河瀬編著 1989)。
- (69) 注(4)と同じ(中村 2001)。
- (70) 佐々木直彦編『小林1号窯跡発掘調査報告書』(財)広島県埋蔵文化財発掘調査センター, 1984。
- (71) 尾崎光伸「東山窯跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VII』(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 65~75頁, 1992
- (72) 注(9)と同じ(中田 1979)。
- (73) 注(10)と同じ(新谷・向田 1979)。
- (74) 立川敏之「熊ヶ迫第4・7・8号窯跡」『県営かんがい排水事業(三河地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 熊ヶ迫第4・7・8号窯跡, 大蕨第2号窯跡, 高岩遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第197集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 6~67頁, 2002。
- (75) 今村忠彦編『熊ヶ迫第1~3号窯跡 県営かんがい排水事業(三河地区)に係る発掘調査』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第139集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1996。
- (76) 妹尾周三「安芸地域-安芸国分寺出土資料を中心として-」『古代の土器研究会第8回シンポジウム 古代の土器研究 聖武朝の土器様式』古代の土器研究会, 69~83頁, 2005。
- (77) 鈴木康之『平成19年度春の企画展 中世からのメッセージ-遺跡が語るひろしまの歴史-』広島県立歴史博物館, 2007。

付編 自然科学分析

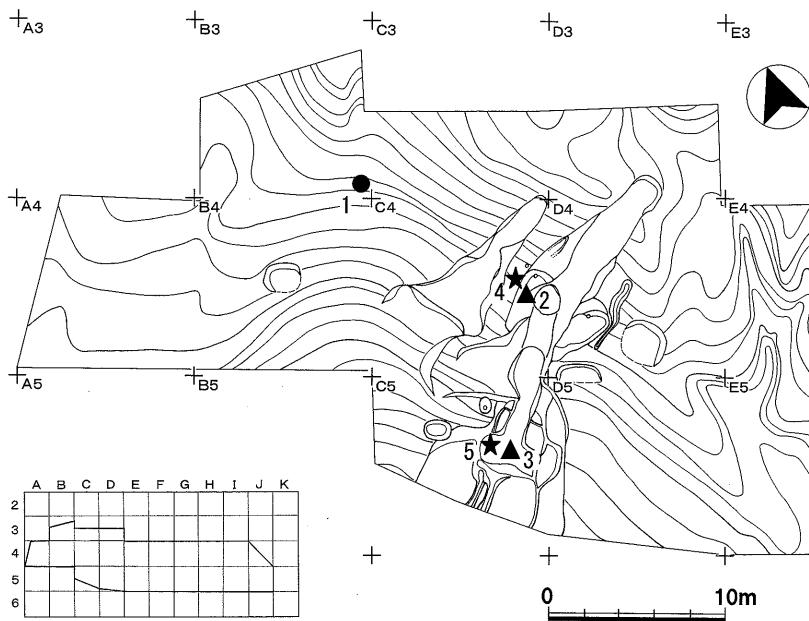
第1節 分析試料の概要

陣ヶ平西遺跡本調査地区採取の試料について、火山灰分析、炭化物の樹種同定分析、炭化物の年代測定の3種類の自然化学分析を行った（第69図）。火山灰分析、炭化物の樹種同定分析は古環境研究所に、炭化物の年代測定は地球科学研究所に依頼した。

火山灰分析は、埋没谷埋土を主体とするB3区東壁の採取資料を対象とした。第Ⅱ層より下層の堆積層を5cmごとに16点採取したが、No.11～16については所在不明のため分析にかけることができなかった。分析の結果、アカホヤ火山灰、始良Tn火山灰が検出され、両者が混在していると判断されている。しかし、これまでの調査を行った遺跡の成果に基づくと、本遺跡第Ⅳ層はこれまでアカホヤ火山灰層起源と判断した堆積層と層相が良く類似している。遺構が集中するC・D区列東側に位置するG区列の埋没谷にも第Ⅳ層が堆積しており、同様の層相をもつ。本遺跡では古墳時代および古代の遺構が集中するC・D区列の大半は第Ⅲ層下が第V層花崗岩バイ乱土（花崗岩地山）であり、遺構内以外の出土遺物は第Ⅱ層下部～第Ⅲ層に包含されている。古墳時代に属する1号土坑SK01は火山灰分析を行ったB4区西端部に位置し、一部埋没谷に重複して構築されており、第Ⅲ層上面～上部が掘り込み面である。G区列では本調査および予備調査で第Ⅲ層を主体に弥生時代遺物が多数出土している。今回はこの地域の火山灰分析を行っていないが、仮に第Ⅳ層がアカホヤ火山灰起源の堆積層であるとするならば、基本的に遺構・遺物の検出状況と堆積状態に大きな矛盾はないと言えるであろう。以上の点を勘案すれば、第Ⅳ層は始良Tn火山灰が混在しているが、アカホヤ火山灰起源の土壤を主体としている可能性（再堆積の可能性を否定しない）がある。

炭化物の樹種同定分析は、1号焼成窯跡前庭部採取試料3点⁽¹⁾（試料番号3～5）と3号焼成窯跡前庭部採取試料2点（試料番号1・2）であり、試料はいずれも肉眼で組織が確認できる炭化木片である。分析結果はいずれもコナラ属クヌギ節である。本遺跡および遺跡周辺では弥生時代中期以降の遺跡が分布しており、本遺跡の古墳時代遺構が営まれた時期の周辺部は広葉樹を中心とする二次林を主体としていたと想定される。遺跡周辺の樹木を須恵器焼成窯操業に利用したことから、分析結果は調和的である。

炭化物の炭素14年代測定は、形状のしっかりした炭化木片4点を分析試料とした。Beta-212369・212370の2点は1号焼成窯跡前庭部付近木炭層、Beta-212371・212372の2点は3



第69図 陣ヶ平西遺跡における自然化学分析用試料採取地点概要図
(●印は火山灰分析試料、▲は樹種同定試料、★印は年代測定試料採取地点を示す。)

号焼成窯跡前庭部に堆積した木炭層から採取したが、前者は1号焼成窯跡検出時の遺構確認用トレンチで採取したもので、2号焼成窯跡起源の試料が混在している可能性がある。それぞれ加速器質量分析法 (Beta-212369・Beta-212371) と液体シンチレーションカウンター法 (Beta-212370・72) による測定を依頼した。前者は 1250 ± 40 yBP (Beta-212369), 1350 ± 60 yBP (Beta-212370), 後者は 1530 ± 40 yBP (Beta-212371), 1420 ± 60 yBP (Beta-212372) の測定値を得ており、いずれも両測定法で約100年の測定結果に開きが認められる。前者が1号焼成窯跡起源であるとすれば中村編年⁽²⁾ II型式5～6段階、後者はII型式5段階に位置づけられ、前者は6世紀後葉～7世紀初頭に、後者は6世紀後葉～末に比定されている。後者については加速器質量分析法が従来の想定年代と調和的といえるが、前者はいずれも従来の年代観とは大きくずれている。先に述べたように、分析試料が2号焼成窯跡起源とすれば、2号焼成窯跡は中村編年IV型式2段階に位置づけられ、8世紀前半に比定されており、加速器質量分析法による年代と調和的である。液体シンチレーションカウンター法の分析結果を含めて、Beta-212369・212370の2点については2号焼成窯跡起源である可能性が高い。

注

- (1) 試料3点のうち、試料番号3は確実に1号焼成窯跡起源の試料であるが、残り2点は2号焼成窯跡起源の可能性もある。
- (2) 中村浩『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版、2001。

第2節 陣ヶ平西遺跡における火山灰分析

早田 勉（古環境研究所）*1

1. はじめに

中国地方に位置する東広島市とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層や土壌の中には、三瓶火山のほか、南九州地方や中九州地方などに位置する火山などから噴出したテフラ（tephra, 火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く堆積している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの関係を求めることにより、地層の堆積年代や土壌の形成年代のみならず、遺構や遺物の層位や年代などについても知ることができるようになっている。

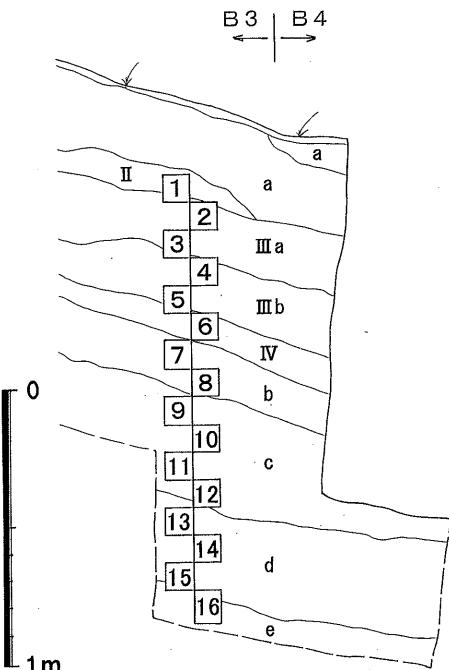
そこで、年代が不明な土層や遺物が検出された東広島市陣ヶ平西遺跡においても、発掘調査担当者により土層断面から採取された火山灰試料を対象に、火山ガラス比分析と屈折率測定を行って指標テフラの降灰層準を明らかにして、土層や遺物の層位および年代に関する資料の収集を行うことになった。

2. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

陣ヶ平西遺跡B3区東壁から採取された10点の試料（第70図）を対象として火山ガラス比分析を行い、火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準の把握を試みた。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を同定し、火山ガラスの形態・色調別比率を求める。



第70図 陣ヶ平西遺跡における試料の層位
(図中の四角部分が試料採取箇所、数字は試料番号を示す。)

*1 現在の所属先：株式会社 火山灰考古学研究所。

(2) 分析結果

陣ヶ平西遺跡B3区東壁における火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムとして第71図に、その内訳を第1表に示す。陣ヶ平西遺跡B3区東壁では、最下位の試料No.10から上位にむかって火山ガラスの比率が増加し、試料No.5でその出現ピークを迎える。この試料No.5には、透明のバブル型(8.8%)のほか、淡褐色のバブル型、褐色のバブル型、分厚い中間型、スポンジ状に発泡した軽石型、纖維束状に発泡した軽石型(各0.4%)が含まれている。褐色や淡褐色など有色のバブル型ガラスは、試料No.7より上位で認められる。その中では、試料7により多くの有色ガラスが認められる(1.6%)。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

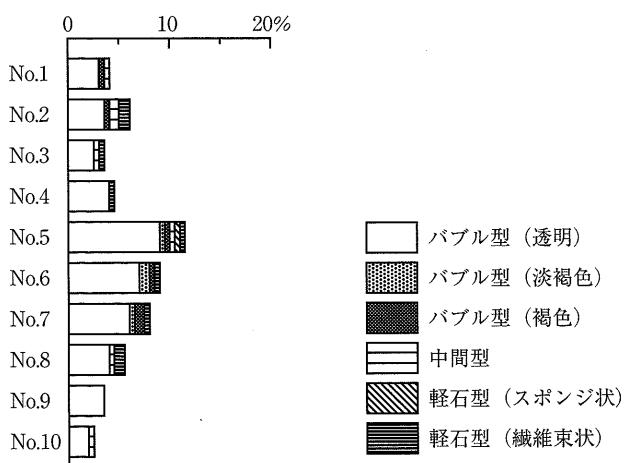
現段階における火山灰編年学における指標テフラとの同定の際、一般的に小規模な噴火に由来するスコリアや岩片に富むテフラを除くものについては、火山ガラスや鉱物などのテフラ粒子の屈折率測定が必須になっている。そこで火山ガラス比分析の対象試料のうち、No.8とNo.5の2試料を対象として、温度変化型屈折率測定装置(MAIOT、古澤地質社製)により、火山ガラスの屈折率(n)の測定を実施した。

第1表 陣ヶ平西遺跡の火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(c1)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
陣ヶ平西遺跡B3区	1	7	0	1	1	0	0	241	250
	2	9	0	1	2	0	2	236	250
	3	6	0	0	1	0	1	242	250
	4	10	0	0	0	0	1	239	250
	5	22	1	1	1	1	1	223	250
	6	18	2	1	0	0	1	228	250
	7	15	1	3	0	0	1	230	250
	8	11	0	0	1	0	2	236	250
	9	9	0	0	0	0	0	241	250
	10	5	0	0	1	0	0	244	250

数字は粒子数。bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, c1:透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:纖維束状。

火山ガラス比



第71図 陣ヶ平西遺跡B 3区の火山ガラス比ダイヤグラム

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第2表に示す。火山ガラスの屈折率は、いずれの試料においても bimodalな組成となっている。陣ヶ平西遺跡B 3区東壁の試料No. 8に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.499–1.501(18粒子)と1.509–1.512(15粒子)である。また、試料No. 5に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.497–1.501(9粒子)と1.507–1.511(26粒子)である。

4. 考察

陣ヶ平西遺跡B 3区東壁の試料No. 8および試料No. 5に含まれる火山ガラスのうち、屈折率(n)が1.497–1.501のものは、約2.6~2.9万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 1992, 2003, 松本ほか, 1987, 村山ほか, 1993, 池田ほか, 1995)に由来すると考えられる。一方、屈折率(n)が1.507–1.512のものについては、約7,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井, 1978, 1992, 2003)に由来すると考えられる。したがって、いずれの試料にも、これらのテフラに由来する火山ガラスが混在していることになる。

火山ガラスの出現ピークが認められることから、試料No. 5付近にK-Ahの降灰層準のある可能性が指摘される。しかしながら、より下位の試料No. 8にもK-Ahの可能性の高い火山ガラスが含まれていることから、その降灰層準についてはより総合的に判断する必要がある。

5. 小結

陣ヶ平西遺跡において採取された試料を対象に、火山ガラス比分析と屈折率測定を実施した。その結果、姶良Tn火山灰(AT, 約2.6~2.9万年前)と鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約7,300年前)に由来する火山ガラスを検出することができた。

第2表 陣ヶ平西遺跡の火山ガラス屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)
陣ヶ平西遺跡・B3区	5	1.497–1.511 (1.497–1.501, 1.507–1.511)
陣ヶ平西遺跡・B3区	8	1.499–1.512 (1.499–1.501, 1.509–1.512)

屈折率測定は、温度変化型屈折率測定装置 (MAIOT) による。

文 献

- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代. 第四紀研究, 34, p.377–379.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰–姶良Tn火山灰の発見とその意義. 科学, 46, p.339–347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ–アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.143–163.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 姶良Tn火山灰 (AT) の¹⁴C年代. 第四紀研究, 26, p.79–83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 (1993) 四国沖ピストンコア 試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討 –タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代. 地質学雑誌, 99, p.787–798.

第3節 陣ヶ平西遺跡における樹種同定

金原 明（古環境研究所）

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、陣ヶ平西遺跡において検出された須恵器焼成窯跡より出土した炭化材5点である。なお、遺構の時期は古墳時代とされている。

3. 方法

試料を割折して、木材の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本的三断面を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を第3表に、主要な分類群の顕微鏡写真を第72図に示す。以下に同定の根拠となつた特徴を記す。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマ

第3表 陣ヶ平西遺跡の樹種同定結果

番号	試料名	試料産出層序	結果（学名／和名）	
1	JW-SY03-1	須恵器窯前庭部	<i>Quercus sect. Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
2	JW-SY03-2	須恵器窯前庭部	<i>Quercus sect. Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
3	JW-C4	須恵器窯関連	<i>Quercus sect. Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
4	JW-C4E-1	須恵器窯関連	<i>Quercus sect. Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節
5	JW-C4E-2	須恵器窯関連	<i>Quercus sect. Aegilops</i>	コナラ属クヌギ節

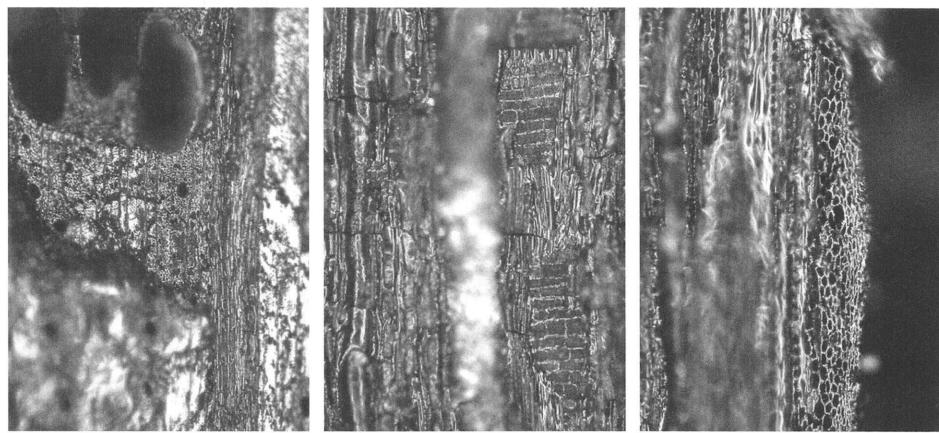
キなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

5. 所見

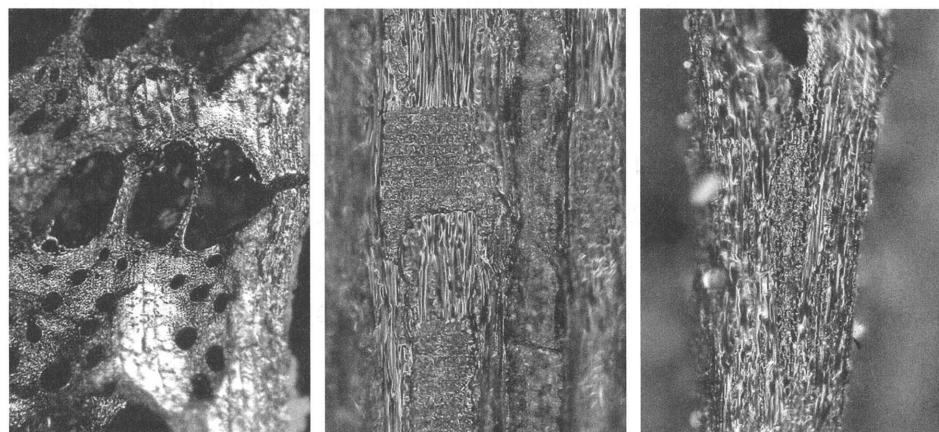
陣ヶ平西遺跡で検出された炭化材の樹種を検討した結果、5点ともすべてコナラ属クヌギ節に同定された。コナラ属クヌギ節は、温帯域に広く分布する落葉広葉樹で山林に生育することから、当時、遺跡の周辺からもたらすことができる樹種であったと考えられる。

文 献

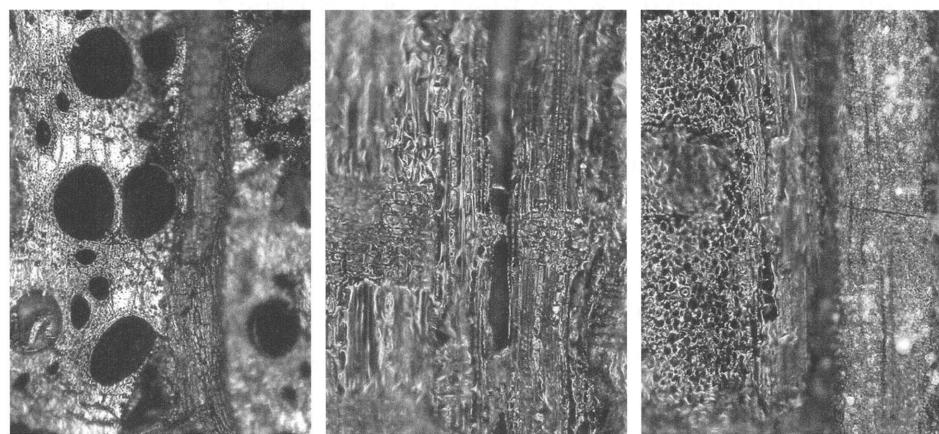
- 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.
 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.
 島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296.
 山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会, p.242.



横断面 ━━━━ : 0.4mm 放射断面 ━━━━ : 0.2mm 接線断面 ━━━━ : 0.2mm
1. JW-SY03-2 須恵器窯前庭部 コナラ属クヌギ節



横断面 ━━━━ : 0.4mm 放射断面 ━━━━ : 0.2mm 接線断面 ━━━━ : 0.2mm
2. JW-C4 須恵器窯関連 コナラ属クヌギ節



横断面 ━━━━ : 0.4mm 放射断面 ━━━━ : 0.2mm 接線断面 ━━━━ : 0.2mm
3. JW-C4E-1 須恵器窯関連 コナラ属クヌギ節

第72図 陣ヶ平西遺跡の炭化材

第4節 陣ヶ平西遺跡出土炭化物の放射性炭素年代について

(株) 地球科学研究所

広島県陣ヶ平西遺跡出土資料の放射性炭素年代測定を行い、その結果について報告するものである。

1. 報告内容の説明

1) 未補正14C年代 (yBP)

(同位体分別未補正) 14C年代 “measured radiocarbon age”

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前(BP)かを計算した年代。

2) 14C年代 (yBP)

(同位体分別補正) 14C年代 “conventional radiocarbon age”

試料の炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で、算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25‰ に基準化することによって得られる値である。(Stuiver,M. and Polach,H.A.(1977) Discussion : Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon, 19を参照のこと) 曆年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

3) $\delta^{13}\text{C}$ (permil)

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比。この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{試料}] - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}]}{([標準]^{13}\text{C}/^{12}\text{C})} \times 1000$$

ここで、 $(^{13}\text{C}/^{12}\text{C}) [\text{標準}] = 0.0112372$ である。

4) 曆年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動に対する補正により、曆年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の測定、サンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、曆年代を算出する。最新のデータベース (“INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al,1998, Radiocarbon 40 (3)) により約19000 y BPまでの換算が可能となった。

※但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨する。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol.40, No.3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol.35, No.2, pg317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

5) 測定方法などに

測定方法

AMS：加速器質量分析

Radiometric：液体シンチレーションカウンタによる β -線計数法

処理・調製・その他：試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid：酸-アルカリ-酸洗浄

分析機関 BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A. 33155

2. C14年代測定結果

試料データ	未補正14C年代 (y BP) (measured radiocarbon age)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	14C年代 (y BP) (Conventional radiocarbon age)
Beta-212369 試料名 (28642) JW-C4E-1 測定方法, 期間AMS-Standard 試料種, 前処理など charred material	1250 ± 40	-27.1	1220 ± 40
Beta-212370 試料名 (28643) JW-C4E-2 測定方法, Radiometric-Standard 試料種, 前処理など charred material	1350 ± 60	-27.5	1310 ± 60
Beta-212371 試料名 (28644) JW-SY03-1 測定方法, AMS-Standard 試料種, 前処理など charred material	1530 ± 40	-27.2	1490 ± 40
Beta-212372 試料名 (28645) JW-SY03-2 測定方法, Radiometric-Standard 試料種, 前処理など charred material	1420 ± 60	-26.9	1390 ± 60

年代値はRCYBP (1950A.D.を0年とする)で表記。モダンリファレンススタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.1:lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-212369

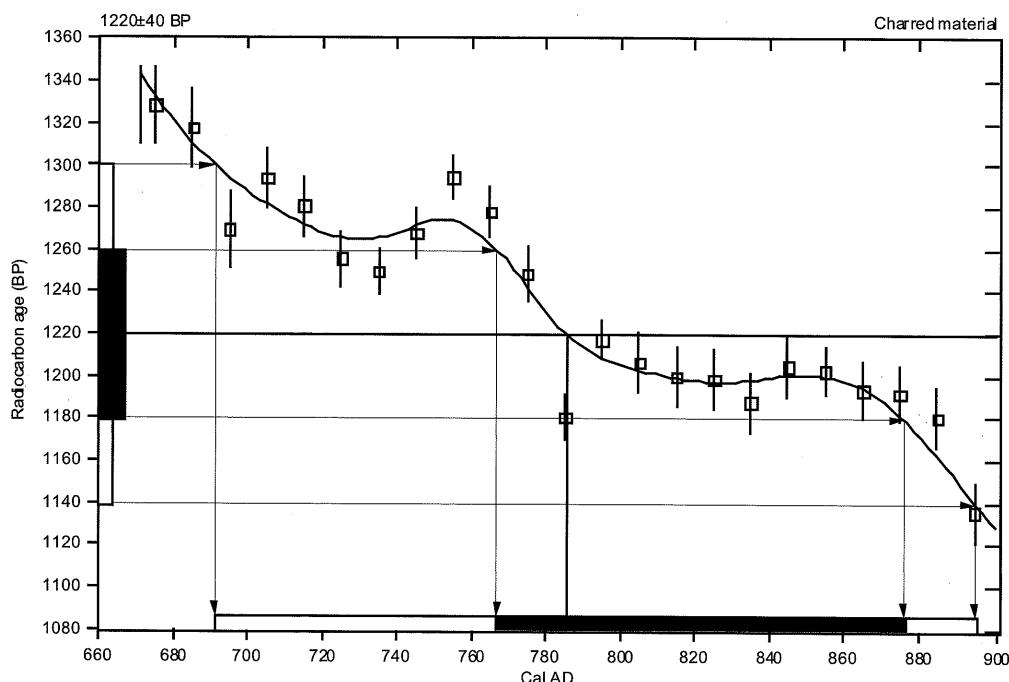
Conventional radiocarbon age: 1220 ± 40 BP

2 Sigma calibrated result: Cal AD 690 to 900 (Cal BP 1260 to 1060)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal AD 790 (Cal BP 1160)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 770 to 880 (Cal BP 1180 to 1070)
(68% probability)



References:

Database used

INTCAL98

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xxii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第73図 14C測定データの暦年較正図（1）

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.5:lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-212370

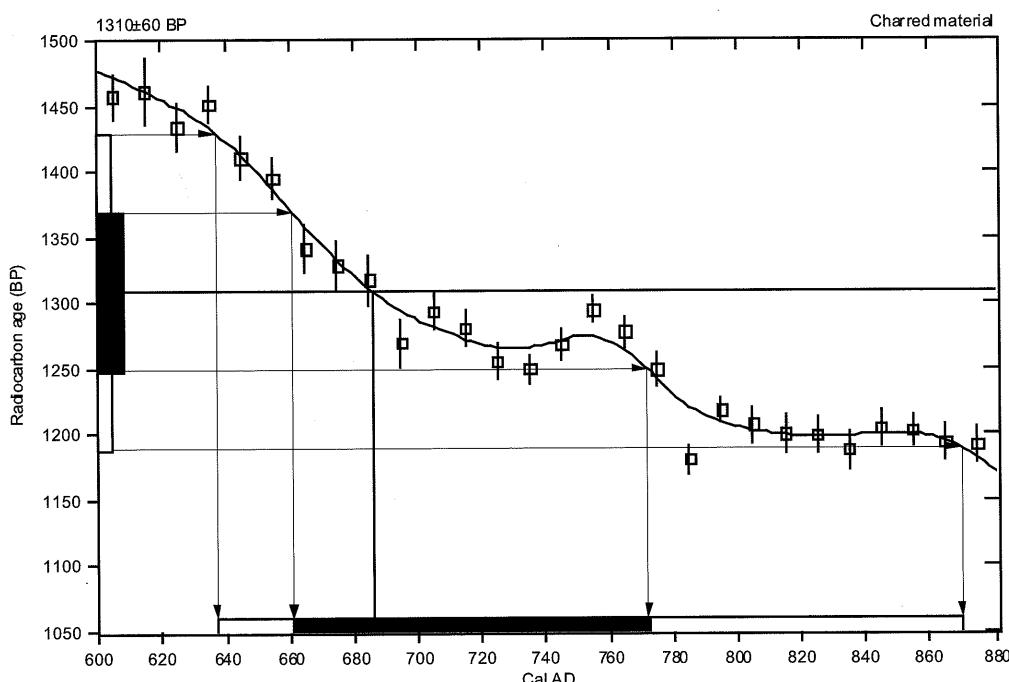
Conventional radiocarbon age: 1310 ± 60 BP

2 Sigma calibrated result: Cal AD 640 to 870 (Cal BP 1310 to 1080)
(95% probability)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal AD 690 (Cal BP 1260)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 660 to 770 (Cal BP 1290 to 1180)
(68% probability)



References:

Database used

INTCAL98

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xii
INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第74図 14C測定データの暦年較正図（2）

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-27.2; lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-212371

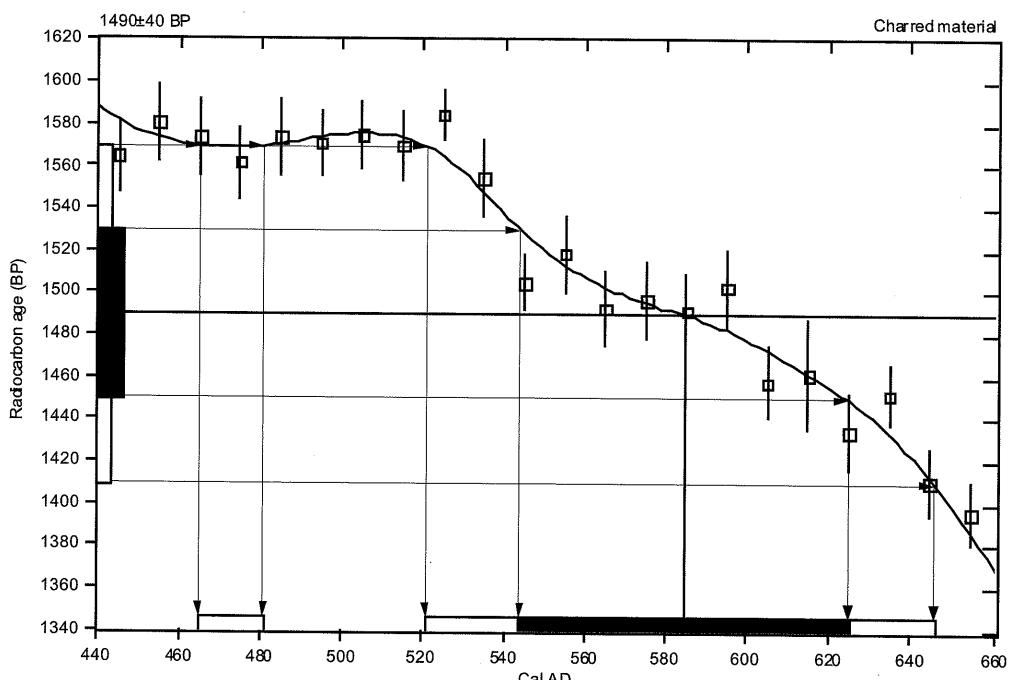
Conventional radiocarbon age: 1490 ± 40 BP

2 Sigma calibrated results: Cal AD 460 to 480 (Cal BP 1480 to 1470) and
(95% probability) Cal AD 520 to 650 (Cal BP 1430 to 1300)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal AD 580 (Cal BP 1360)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 540 to 620 (Cal BP 1410 to 1320)
(68% probability)



References:

Database used

INTCAL 98

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xii
INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第75図 14C測定データの暦年較正図（3）

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.9:lab. mult=1)

Laboratory number: Beta-212372

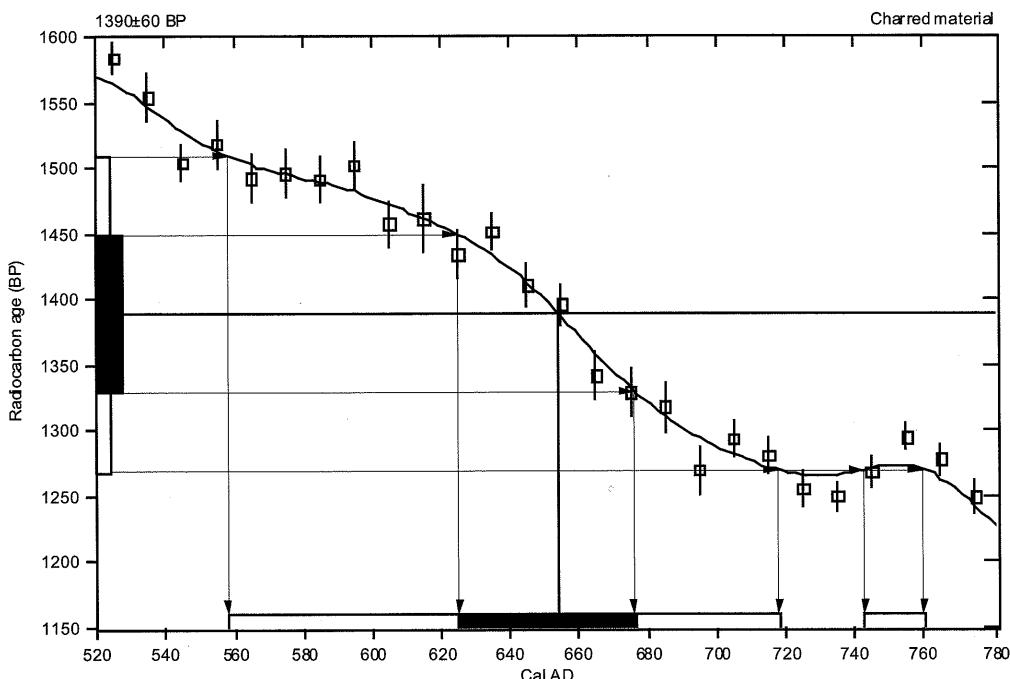
Conventional radiocarbon age: 1390 ± 60 BP

2 Sigma calibrated results: Cal AD 560 to 720 (Cal BP 1390 to 1230) and
(95% probability) Cal AD 740 to 760 (Cal BP 1210 to 1190)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal AD 650 (Cal BP 1300)

1 Sigma calibrated result: Cal AD 620 to 680 (Cal BP 1320 to 1270)
(68% probability)



References:

Database used

INTCAL98

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xxii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

第76図 14C測定データの曆年較正図（4）

第10図の堆積層の色調と土質一覧

層番号	色調・土質	層番号	色調・土質	層番号	色調・土質
1	黒褐色粘質土（木炭層）	18	にぶい黄橙色砂質土	35	にぶい黄褐色粘質土
2	にぶい黄褐色粘質土	19	褐色～赤褐色粘質土	36	褐色粘質土
3	暗黄褐色粘質土（木炭を多量に含む）	20	暗赤褐色砂質土	37	にぶい黄橙色砂質土
4	にぶい黄褐色粘質土	21	淡黄色粘質土	38	褐色粘質土
5	暗黄褐色粘質土	22	黄白色砂質土	39	橙色砂質土
6	黒褐色粘質土（木炭層）	23	淡黄褐色粘質土	a	にぶい黄褐色砂質土
7	黄褐色粘質土	24	赤褐色粘質土	b	灰黄褐色粘質土
8	黒褐色粘質土（木炭層）	25	褐色粘質土	c	褐色粘質土
9	黄褐色粘質土	26	黑褐色粘質土	d	黄褐色粘質土
10	黒褐色粘質土	27	黑色粘質土	e	木炭層
11	灰黄褐色粘質土	28	黑褐色粘質土	f	木炭層
12	橙色砂質土	29	にぶい褐色砂質土	g	木炭層
13	にぶい橙色砂質土	30	黑色粘質土	h	暗褐色粘質土
14	褐色粘質土	31	にぶい黄褐色砂質土	i	明黄褐色粘質土
15	橙色粘質土	32	灰黄褐色粘質土	j	黑色粘質土
16	にぶい黄褐色砂質土	33	にぶい褐色粘質土		
17	明黄褐色粘質土	34	黒褐色粘質土		

第11図の堆積層の色調と土質一覧

層番号	色調・土質	層番号	色調・土質	層番号	色調・土質
1	黄褐色砂礫土	25	にぶい黄褐色砂質土	47	にぶい橙色砂質土
2	にぶい橙色砂質土	26	褐灰色土（木炭層）	48	灰黄色砂質土
3	明黄褐色粘質土	27	黒褐色粘質土（木炭層）	49	にぶい橙色砂質土
4	灰白色砂質土	28	にぶい黄橙色粘質土		明黄褐色砂質土
5	赤橙色砂質土	29	灰黄褐色粘質土	50	にぶい橙色砂質土
6	灰白色砂質土	30	にぶい黄橙色粘質土	51	砂質土
7	明黄褐色粘質土	31	にぶい黄褐色粘質土	52	赤黑色土（木炭層）
8	にぶい橙色砂質土	32	暗灰色粘質土		赤黑色土（木炭層）
9	にぶい橙色砂質土	33	灰白色砂質土	53	にぶい黄橙色粘質土
10	にぶい橙色砂質土	34	黄褐色砂質土	54	黄褐色砂質土
11	黒褐色粘質土（木炭層）	35	にぶい橙色砂質土	55	にぶい褐色粘質土
12	黑色粘質土（木炭層）	36	灰色砂質土		にぶい橙色粘質土
13	灰黄褐色粘質土（木炭層）	37	にぶい赤褐色粘質土（焼土層）	56	にぶい黄褐色土
14	黒褐色粘質土（木炭層）	38	暗褐色砂質土	57	黑色粘質土（木炭層）
15	明黄褐色粘質土	39	橙色粘質土	58	にぶい黄褐色粘質土
16	にぶい黄褐色粘質土		にぶい褐色砂質土	59	黑褐色粘質土（木炭層）
17	にぶい褐色砂質土	40	橙色砂質土	61	黑褐色粘質土（木炭層）
18	黒褐色粘質土（木炭層）	42	橙色砂質土	62	橙色粘質土
19	黒褐色粘質土（木炭層）		にぶい褐色砂質土	64	黑色砂質土
20	黄褐色粘質土	43	橙色粘質土	65	暗赤褐色粘質土
21	灰褐色粘質土	44	明黄褐色粘質土	66	褐色粘質土
22	黃灰色粘質土		にぶい黄褐色砂質土	67	橙色砂質土
23	黄褐色粘質土	45	にぶい黄橙色砂質土	68	暗黄褐色砂質土
24	黒褐色粘質土（木炭層）	46	にぶい橙色砂質土	69	淡黄褐色土

出土遺物観察表・計測表

例　　言

1. ここに収録するのは、陣ヶ平西遺跡出土遺物のうち、本報告書の挿図および図版で報告した資料の観察表、計測表および接合資料一覧表である。
2. 観察表・計測表は、古墳時代、古代、その他の時代順に並べ、さらに出土遺構ごとに収録した。各表は挿図番号順に配列し、その内容は挿図番号、図版番号、分布図番号、計測値のほか、観察表には観察所見、計測表には石材を掲載した。
3. 土器の計測は、口径、器高、底径について0.1cm単位で行った。石器の計測は、大きさ（長さ、幅、厚さ）、重さについて行い、大きさは0.05cm単位、重さは0.1g単位で計測した。なお、欠損しているものは、残存値を括弧付けして示している。
4. 観察表の出土区欄のうち、表番号が記されているものは接合資料であり、第8・9表の接合資料一覧表に一致する。
5. 観察表・接合資料一覧表の出土区欄のうち、1号・3号焼成窯跡内の出土遺物については、第8・35図の調査区設定図に従って表記した。2号焼成窯跡の出土遺物については、窯内・前部・灰原に3区分して表記した。窯跡外の出土遺物については、10m×10mの調査区を1m×1mに100分割したグリッドに対応させ、C4-80, C5-42のように表記した。また出土小グリッドの不明な出土遺物については、C4, C5のように調査区のみを表記した。ほかに、包含層、排土、89年度調査区出土のものについても示している。
6. 1号焼成窯跡内の還元面・整地面からの出土遺物については、調査時の取り上げ区分のまま表記した。なお、最終操業面・No.1整・No.2・No.2整は第2操業期に、No.3・No.3整は第1操業期にそれぞれ対応する。
7. 1号焼成窯跡の土層観察表用セクションベルト内の出土遺物については、以下のようにセクションベルトと層位を簡略して表記した。なお、層位は第11図に対応する。

1～4区の間の主軸ベルト31層からの出土→1-4セ31層
5～8区の間の主軸ベルト14層からの出土→5-8セ14層
6・8区の間の横断ベルト20層からの出土→6-8セ20層
8. 観察表の備考欄のうち、右回り、左回りと表記したものは轆轤の回転方向を示している。
9. 接合資料一覧表の出土区欄は出土区のみを示しており、破片点数を表すものではない。

第4表 陣ヶ平西遺跡古墳時代出土土器観察表

番号	出土遺構	挿図番号	図版番号	分布図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
1	1号窯跡	第26図1	図版第35-1		須恵器	壺蓋	13.0	4.2	
2	1号窯跡	第26図2	図版第35-4	第17図・第23図	須恵器	壺蓋	12.4	4.4	
3	1号窯跡	第26図3	図版第35-2	第21図	須恵器	壺蓋	13.6	3.5	
4	1号窯跡	第26図4	図版第35-3		須恵器	壺蓋	10.6	(3.4)	
5	1号窯跡	第26図5	図版第35-5	第16図・第20図	須恵器	壺蓋	10.8	3.4	
6	1号窯跡	第26図6	図版第36-1		須恵器	壺蓋	10.6	3.2	
7	1号窯跡	第26図7	図版第36-2	第17図・第23図	須恵器	壺蓋	11.0	2.9	
8	1号窯跡	第26図8	図版第36-3	第17図・第22図	須恵器	壺蓋	10.8	3.1	
9	1号窯跡	第26図9	図版第36-4		須恵器	壺蓋	11.4	3.3	
10	1号窯跡	第26図10	図版第37-1	第23図	須恵器	壺蓋	10.3	2.9	
11	1号窯跡	第26図11	図版第39-3		須恵器	壺身	11.4	(3.7)	
12	1号窯跡	第26図12	図版第39-2		須恵器	壺身	12.4	(2.8)	
13	1号窯跡	第26図13	図版第37-2	第17図・第23図	須恵器	壺身	14.0	(3.5)	
14	1号窯跡	第26図14	図版第37-3	第16図・第18図	須恵器	壺身	13.2	(4.2)	
15	1号窯跡	第26図15	図版第39-4	第16図・第18図	須恵器	壺身	11.4	(2.7)	
16	1号窯跡	第26図16	図版第37-4		須恵器	壺身	10.4	2.9	
17	1号窯跡	第26図17	図版第38-1	第17図・第24図	須恵器	壺身	9.6	2.6	
18	1号窯跡	第26図18	図版第38-2	第17図・第23図	須恵器	壺身	10.0	(2.5)	
19	1号窯跡	第26図19	図版第38-3		須恵器	壺身	10.4	2.5	
20	1号窯跡	第26図20	図版第38-4	第17図・第21図	須恵器	壺身	10.0	2.9	
21	1号窯跡	第26図21	図版第39-5	第17図・第23図	須恵器	壺身	10.2	(2.3)	
22	1号窯跡	第26図22	図版第39-6		須恵器	壺身	10.2	(3.0)	
23	1号窯跡	第26図23	図版第39-1		須恵器	壺身	10.8	3.2	
24	1号窯跡	第27図24	図版第40-2		須恵器	高壺	13.4	(7.2)	9.2
25	1号窯跡	第27図25	図版第40-1	第17図・第21図	須恵器	高壺	11.6	(8.6)	9.4
26	1号窯跡	第27図26	図版第40-6	第17図・第22図	須恵器	高壺	12.8	(5.0)	

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1 mm 大の砂粒を多く含む 石英含む	良好	青灰色	褐色	全体2/3	包含層	左回り
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	不良	灰白色	灰白色	口縁部1/5	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	灰白色	灰白色	全体1/3	第8表	左回り
2 ~ 3 mm 大の砂粒を含む	不良	青灰色	灰白色	口縁部1/4	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	不良	暗赤褐色	明褐色～暗褐色	全体1/2	第8表	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む 石英含む	不良	淡赤褐色	灰白色	全体1/2	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を多く含む 石英含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/2	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む 石英含む	良好	青灰色～ 黒灰色	黒灰色	口縁部1/2	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	黒灰色	青灰色	全体1/2	第8表	左回り
2 ~ 3 mm 大の砂粒を含む 石英含む	良好	暗青灰色	暗青灰色	全体1/2	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	青灰色	暗灰色	口縁部1/8	2号窯跡灰原	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	黒灰色	青灰色	口縁部1/8	第8表	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	口縁部1/5	第8表	右回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒をわずかに含む	不良	黒褐色	灰褐色	全体1/4	第8表	右回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良	灰白色	灰白色	口縁部1/5	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を多く含む 石英含む	良好	淡黒褐色	黒褐色	全体2/3	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/2	第8表	右回り
2 ~ 3 mm 大の砂粒を含む 石英含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/2	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む 石英含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/8	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/2	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を多く含む 石英含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/4	第8表	右回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/4	第8表	左回り
2 ~ 3 mm 大の砂粒を含む 石英含む	良好	青灰色～ 黒灰色	青灰色	全体1/2	第8表	左回り
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	坏部1/8 脚部1/8	第8表	左回り
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	ほぼ完形	第8表	左回り
1 mm 以下の砂粒、2 mm 大の砂粒 を含む	良好	暗青灰色	暗青灰色	坏部1/2	第8表	左回り

番号	出土遺構	挿図番号	図版番号	分布図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
27	1号窯跡	第27図27	図版第40-3	第16図	須恵器	高壺	12.6	(4.1)	
28	1号窯跡	第27図28	図版第40-4		須恵器	高壺	13.0	(4.9)	
29	1号窯跡	第27図29	図版第40-5		須恵器	高壺	16.0	(4.0)	
30	1号窯跡	第27図30	図版第40-7		須恵器	高壺	12.6	(5.0)	
31	1号窯跡	第27図31	図版第40-8	第16図・第18図	須恵器	高壺	12.6	(5.1)	
32	1号窯跡	第27図32	図版第40-1		須恵器	高壺		(3.5)	
33	1号窯跡	第27図33	図版第40-9		須恵器	高壺			
34	1号窯跡	第27図34	図版第41-3		須恵器	高壺		(2.5)	9.6
35	1号窯跡	第27図35	図版第41-2		須恵器	高壺		(5.0)	9.2
36	1号窯跡	第27図36	図版第41-4	第16図・第18図	須恵器	高壺		(2.0)	10.2
37	1号窯跡	第27図37	図版第41-5		須恵器	高壺			10.0
38	1号窯跡	第27図38	図版第41-7		須恵器	高壺			9.8
39	1号窯跡	第27図39	図版第41-8		須恵器	高壺			9.4
40	1号窯跡	第27図40	図版第41-6	第17図・第23図	須恵器	高壺		(4.7)	9.0
41	1号窯跡	第27図41	図版第42-1		須恵器	高壺	12.8	7.0	(8.8)
42	1号窯跡	第27図42	図版第42-2	第16図・第20図	須恵器	高壺	12.4	7.3	8.8
43	1号窯跡	第27図43	図版第42-3		須恵器	高壺	12.4	最大7.8 最小6.7	8.8
44	1号窯跡	第27図44	図版第42-4	第17図・第23図	須恵器	高壺	12.8	8.1	9.4
45	1号窯跡	第27図45	図版第42-5	第17図・第21図	須恵器	高壺	12.4	8.0	9.2
46	1号窯跡	第27図46	図版第42-6		須恵器	高壺	12.4	(4.5)	
47	1号窯跡	第28図47	図版第43-1		須恵器	高壺	13.8	7.5	9.0
48	1号窯跡	第28図48	図版第43-2	第20図	須恵器	高壺	11.0	6.7	8.0
49	1号窯跡	第28図49	図版第43-3		須恵器	高壺	13.4	最大 8.0	9.0
50	1号窯跡	第28図50	図版第43-4	第17図・第22図	須恵器	高壺	11.0	(3.6)	
51	1号窯跡	第28図51	図版第43-6		須恵器	高壺		(6.3)	9.8
52	1号窯跡	第28図52	図版第43-7		須恵器	高壺		(5.5)	8.8

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1mm 以下の砂粒を含む	良好	灰色	灰色	坏部1/4	1 - 4 セ55層	
1mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	坏部1/4	5 区	
1~2mm 大の砂粒を多く含む	良	灰白色	灰白色	口縁部1/6	2号窯跡灰原	右回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	灰色	灰白色	坏部1/2	C 4 - 80	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	坏部1/4	1 - 4 セ55層	
1mm 以下の微砂粒を含む	良	灰白色	灰白色	全体1/5	2号窯跡灰原	
1~2mm 大の砂粒を含む	良好	灰白色~ 青灰色	青灰色	全体1/5	包含層	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	脚底部1/2	8 区	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	暗灰白色	暗灰白色	脚部4/5	7 区	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	脚底部1/2	1 - 4 セ55層	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	暗青灰色	暗青灰色	脚部	2号窯跡灰原	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良	灰白色	灰白色	脚部1/6	包含層	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	暗青灰色	青灰色	脚部 1 - 8	2号窯跡灰原	
1~2mm 大の砂粒を含む	不良	暗黄灰色	淡黄灰色	脚部2/3	1 - 4 セ 3 層	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	明灰色	明灰色	全体2/3	包含層	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良	暗灰褐色	灰褐色	ほぼ完形	第8表	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	淡灰色	淡灰色	ほぼ完形	包含層	
1mm 大の砂粒を多く含む	不良	灰褐色	灰褐色	全体3/4	第8表	左回り
1mm 大の砂粒を含む	不良	灰褐色	灰褐色	全体2/3	第8表	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	淡青灰色	淡青灰色	坏部3/4	第8表	右回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	明灰色	明灰色	全体2/3	包含層	左回り
1mm 大の砂粒を多く含む	良好	暗灰色	暗灰色	ほぼ完形	3 区No. 3 整	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	灰白色	灰白色	坏部1/3 脚部9/10	第8表	左回り
2~3mm 大の砂粒を含む 石英含む	良好	淡黒灰色	青灰色	全体1/2	第8表	左回り
1mm 大の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	脚部1/1	第8表	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	坏部1/8 脚部4/5	第8表	左回り

番号	出土遺構	挿図番号	図版番号	分布図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
53	1号窯跡	第28図53	図版第43-5		須恵器	高壺	9.8	(5.0)	
54	1号窯跡	第28図54	図版第43-8		須恵器	高壺		(3.5)	9.8
55	1号窯跡	第28図55	図版第43-9		須恵器	高壺		(4.2)	9.2
56	1号窯跡	第28図56	図版第44-1		須恵器	高壺	13.0	8.2	9.4
57	1号窯跡	第28図57	図版第44-2		須恵器	高壺	12.0	(8.0)	9.0
58	1号窯跡	第28図58	図版第44-3	第17図・第24図	須恵器	高壺	12.4	(7.8)	8.8
59	1号窯跡	第28図59	図版第44-4	第17図・第21図	須恵器	高壺	13.0	(4.0)	
60	1号窯跡	第28図60	図版第44-5		須恵器	高壺	13.0	(4.0)	
61	1号窯跡	第28図61	図版第44-6	第17図・第23図	須恵器	高壺	12.8	(3.8)	
62	1号窯跡	第28図62	図版第45-2		須恵器	高壺	13.0	(4.0)	
63	1号窯跡	第28図63	図版第45-1		須恵器	高壺	12.2	9.6	9.5
64	1号窯跡	第28図64	図版第45-3		須恵器	高壺	12.8	(4.4)	
65	1号窯跡	第28図65	図版第45-5	第17図・第23図	須恵器	高壺	13.2	(4.6)	
66	1号窯跡	第28図66	図版第45-4	第17図・第23図	須恵器	高壺		(5.4)	10.9
67	1号窯跡	第29図67	図版第46-1	第17図・第24図	須恵器	高壺	13.0	(5.1)	
68	1号窯跡	第29図68	図版第46-2		須恵器	高壺	12.3	最大 13.2	11.8
69	1号窯跡	第29図69	図版第46-3	第20図	須恵器	高壺		(5.7)	12.2
70	1号窯跡	第29図70	図版第46-4	第17図	須恵器	高壺		(7.6)	
71	1号窯跡	第29図71	図版第46-8	第16図・第19図	須恵器	壺	6.2	(4.8)	
72	1号窯跡	第29図72	図版第46-7		須恵器	壺	12.0	(2.8)	
73	1号窯跡	第29図73	図版第46-5	第17図・第22図	須恵器	鉢	13.3	6.5	
74	1号窯跡	第29図74	図版第46-6	第16図・第19図	須恵器	鉢	18.3	10.1	
75	1号窯跡	第29図75	図版第47-6		須恵器	壺	15.4	(5.8)	
76	1号窯跡	第29図76	図版第47-5		須恵器	蓋	13.6	2.7	
77	1号窯跡	第29図77	図版第47-1	第16図・第19図	須恵器	平瓶	8.6	(10.6)	
78	1号窯跡	第29図78	図版第47-2・3・ 4	第16図・第19図	須恵器	平瓶		(16.0)	

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1mm以下砂粒を含む	良好	灰色	灰色	坏部1/8	包含層	
1~2mm大の砂粒を含む	良好	淡灰色	淡灰色	脚部1/1	4区No.2	左回り
1mm大の砂粒を含む	良好	淡青灰色	淡青灰色	脚部3/4	第8表	右回り 脚内面 ヘラ記号か?
1mm以下砂粒を含む	不良	黄灰色	黄灰色	全体4/5	第8表	左回り
1mm以下砂粒を含む	不良	淡黒灰色	淡黒灰色	ほぼ完形	第8表	左回り
1mm大の砂粒を含む	良	暗青灰色	暗青灰色	坏部1/4 脚部1/2	第8表	左回り
1~2mm大の砂粒を含む	不良	淡黃灰色	淡黃灰色	坏部2/3	第8表	左回り
1~2mm大の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	坏部1/3	3区最終操業面	左回り
1~2mm大の砂粒を含む	良好	濃青灰色	暗青灰色	坏部1/2	4区No.2	右回り
1~2mm大の砂粒を含む	不良	淡黃灰色	淡黃灰色	坏部2/3	第8表	右回り
1~2mm大の砂粒を含む	良	暗褐色	暗褐色	全体3/4	第8表	左回り
1mm大の砂粒を含む	良好	淡青灰色	淡青灰色	坏部3/4	第8表	
1mm以下の砂粒を含む	不良	淡赤褐色	淡赤褐色	坏部3/4	第8表	右回り
1mm大の砂粒を含む	不良	暗黃灰色	青灰色	脚部1/1	第8表	
1~2mm大の砂粒を含む	良好	暗黃灰色	黑灰色	全体1/4	第8表	
1mm大の砂粒含む 石英含む	良好	灰白色	灰白色	坏部3/4 脚部3/4	第8表	坏部左回り 脚部右回り
1mm以下の砂粒を含む	良好	青灰色 灰白色	青灰色 灰白色	脚部3/4	第8表	右回り
1mm大の砂粒を含む	良好	暗灰褐色	暗灰褐色	脚部1/4	第8表	
1mm大の砂粒を含む	良好	暗青灰色	青灰色	全体2/3	第8表	左回り
1~2mm大の砂粒を含む	良好	灰白色	青灰色	口縁部1/8	第8表	
1~2mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体4/5	第8表	
1~2mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体2/3	第8表	
1mm大の砂粒を含む	不良	淡赤褐色	淡赤褐色	口縁部	第8表	左回り
1~2mm大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/2	第8表	右回り
1~2mmの砂粒を含む	良好	淡青灰色	青灰色	口縁部~ 胴部1/3	第8表	
1~2mm大の砂粒を含む	良好	青灰色~ 黒灰色	青灰色	胴部1/3	第8表	左回り

番号	出土遺構	挿図番号	図版番号	分布図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
79	1号窯跡	第29図79	図版第47-7		須恵器	不明土製品	長6.1	重41.4	
80	1号窯跡	第30図80	図版第48-1		須恵器	甕	12.0	(4.1)	
81	1号窯跡	第30図81	図版第48-3		須恵器	甕	11.6	(4.1)	
82	1号窯跡	第30図82	図版第48-2		須恵器	甕	12.8	(4.0)	
83	1号窯跡	第30図83	図版第48-5	第16図・第18図	須恵器	甕	13.4	(3.2)	
84	1号窯跡	第30図84	図版第48-4		須恵器	甕	11.2	(4.6)	
85	1号窯跡	第30図85	図版第48-7	第17図・第21図	須恵器	甕		(4.5)	
86	1号窯跡	第30図86	図版第48-6		須恵器	甕	27.0	(7.0)	
87	1号窯跡	第30図87	図版第48-8		須恵器	甕	14.8	(4.4)	
88	1号窯跡	第30図88	図版第49-1		須恵器	甕	23.0	(6.0)	
89	1号窯跡	第30図89	図版第49-2		須恵器	甕	20.4	(5.5)	
90	1号窯跡	第30図90	図版第49-4		須恵器	甕	20.4		
91	1号窯跡	第30図91	図版第49-3	第17図・第21図	須恵器	甕		(4.1)	
92	1号窯跡	第30図92	図版第49-5		須恵器	甕	26.0	(5.0)	
93	1号窯跡	第30図93	図版第49-6		須恵器	甕	15.0	(3.7)	
94	1号窯跡	第30図94	図版第49-7		須恵器	甕	20.2	(2.6)	
95	1号窯跡	第31図95	図版第50		須恵器	甕	21.4	39.3	
96	1号窯跡	第32図96	図版第51-1		須恵器	甕	16.0	(7.0)	
97	1号窯跡	第32図97	図版第51-5		須恵器	甕	17.6	(9.0)	
98	1号窯跡	第32図98	図版第51-3		須恵器	甕	19.4	(11.8)	
99	1号窯跡	第32図99	図版第51-4		須恵器	甕	22.6	(7.2)	
100	1号窯跡	第32図100	図版第51-2		須恵器	横瓶	15.8	(9.3)	
101	1号窯跡	第33図101	図版第52-1		須恵器	甕	40.2	(12.1)	
102	1号窯跡	第33図102	図版第52-3		須恵器	甕	36.8	(8.5)	
103	1号窯跡	第33図103	図版第52-2		須恵器	甕	35.2	(8.5)	
104	1号窯跡	第33図104	図版第52-4		須恵器	横瓶		(8.4)	

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色～灰白色	欠損	完形	C 5 - 57	手捏ね
1mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/3	6 区	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	暗青灰色	口縁部1/4	6・8 区	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	不良	淡灰白色	淡灰白色	口縁部2/3	第 8 表	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	口縁部1/8	第 8 表	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	不良	黄白色	黄白色	口縁部1/3	第 8 表	
1～2mm 大の砂粒含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/8	第 8 表	左回り
1～2mm 大の砂粒含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/8	2号窯跡灰原	
1mm 大の砂粒を含む	不良	黄白色	灰白色	口縁部	3 区No. 3 整	
1mm 以下の微砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	口縁部1/8	2号窯跡灰原	右回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部	8 区	左回り
1～2mm の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/5	6 区	
1～2mm 大の砂粒を含む	良好	灰白色	灰白色	口縁部1/20	6 区39層	右回り
1～2mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/10	第 8 表	
1mm 大の砂粒を含む	良好	灰白色	黑灰色	口縁部1/8	第 8 表	
1mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/8	5 区最終操業面	左回り
1～2mm 大の砂粒を含む	良好	灰白色～暗赤褐色	灰白色	肩部1/3	第 8 表	
1mm 以下の砂粒を含む	良好	暗青灰色	暗青灰色	口縁部～胴上部2/3	8 区	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	淡灰色	青灰色	口縁部～胴上部1/2	第 8 表	左回り
1mm 大の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	口縁部～胴部	第 8 表	
1mm 大の砂粒を含む	不良	黄白色	黄白色	口縁部	7 区	左回り
1mm 大の砂粒をわずかに含む	不良	黑灰色	灰白色	口縁部～頸部1/8	包含層	
2～3mm 大の砂粒を多く含む	良好	黑灰色	青灰色	口縁部	第 8 表	
2～3mm 大の砂粒を多く含む	良好	黑褐色	黑褐色	口縁部	第 8 表	
2～3mm 大の砂粒を多く含む	良好	黑褐色	黑褐色	口縁部	第 8 表	
1mm 大の砂粒を含む	良好	黑灰色～淡灰色	青灰色	胴部	C 5 - 84	

番号	出土遺構	挿図番号	図版番号	分布図番号	種別	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
105	1号窯跡	第34図105	図版第53	第25図	須恵器	甕	36.2	82.4	14.0
106	3号窯跡	第43図106	図版第54-1		須恵器	壺蓋	11.8	(3.9)	
107	3号窯跡	第43図107	図版第54-2		須恵器	壺蓋	12.5	4.0	
108	3号窯跡	第43図108	図版第54-3		須恵器	壺蓋	13.4	3.5	
109	3号窯跡	第43図109	図版第54-4		須恵器	壺蓋	12.8	(4.1)	
110	3号窯跡	第43図110	図版第55-2		須恵器	壺蓋	12.0	(3.4)	
111	3号窯跡	第43図111	図版第55-1		須恵器	壺蓋	11.7	3.5	
112	3号窯跡	第43図112	図版第55-3		須恵器	壺身	12.2	3.9	
113	3号窯跡	第43図113	図版第55-4		須恵器	壺身	10.8	3.0	
114	3号窯跡	第43図114	図版第55-5		須恵器	壺身	12.0	(3.1)	
115	3号窯跡	第43図115	図版第55-6		須恵器	壺身	12.0	2.9	
116	3号窯跡	第44図116	図版第56-1		須恵器	高壺	13.2	7.0	8.4
117	3号窯跡	第44図117	図版第56-2		須恵器	高壺	11.6	8.0	8.6
118	3号窯跡	第44図118			須恵器	高壺	11.2	(3.1)	
119	3号窯跡	第44図119			須恵器	高壺	13.6		
120	3号窯跡	第44図120	図版第56-4		須恵器	高壺	10.6	6.4	9.0
121	3号窯跡	第44図121	図版第56-3		須恵器	高壺	12.4	約6	8.8
122	3号窯跡	第44図122	図版第56-5		須恵器	高壺		(4.0)	8.8
123	3号窯跡	第44図123			須恵器	高壺			
124	3号窯跡	第44図124	図版第56-6		須恵器	高壺		(3.3)	7.6
125	3号窯跡	第44図125			須恵器	高壺		(0.7)	10.8
126	3号窯跡	第44図126	図版第56-7		須恵器	高壺	12.8	7.1	8.1
127	3号窯跡	第44図127	図版第56-8		須恵器	高壺	10.5	7.0	8.0
128	3号窯跡	第44図128	図版第57-2		須恵器	高壺		(4.4)	7.6
129	3号窯跡	第44図129	図版第57-4		須恵器	高壺		(4.1)	8.2
130	3号窯跡	第44図130	図版第57-3		須恵器	高壺		(2.1)	8.6

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1~2mm 大の砂粒を含む	良好	淡青灰色 ~黒灰色	灰白色・青灰色 ~黒灰色	全体3/4	第8表	
1mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/3	最終操業面	左回り
1~2mm 大の砂粒を多く含む	良好	青灰色	明灰色	全体2/3	第8表	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	灰色	灰褐色	完形	第8表	右回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	灰褐色	全体1/3	第8表	右回り
2~3mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/4	3・4区	左回り
1~2mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/4	第8表	左回り
1~2mm 大の砂粒を多く含む 石英含む	良好	淡黒灰色	青灰色	ほぼ完形	第8表	
1mm 大の砂粒を含む	良好	灰白色	灰白色	全体1/3	第8表	右回り
1~2mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/2	C 5-67・68・ 77・78	
1~2mm 大の砂粒を含む	良好	淡青灰色	淡青灰色	全体1/3	第8表	
1mm 以下の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	暗青灰色	ほぼ完形	第8表	
1~2mm 大の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	全体3/4	第8表	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	坏部1/2	第8表	右回り
1~2mm 大の砂粒多く含む	良好	青灰色	灰白色	口縁部1/10	包含層	
1~2mm 大の砂粒を含む	良好	淡黒灰色	淡灰褐色	全体2/3	第8表	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良	淡青灰色	淡黄灰色	ほぼ完形	第8表	右回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	灰褐色	灰褐色	脚部1/1	第8表	右回り
1~2mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	脚部	第8表	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	不良	灰白色	淡灰色	脚部1/1	3・4区	左回り
1mm 以下の砂粒を含む 金雲母を含む	不良	黄褐色	黄褐色	脚部1/3	3・4区	
1~2mm 大の砂粒を含む	良好	暗灰色	暗灰色	全体2/3	第8表	左回り
1mm 以下の砂粒を含む	良好	淡青灰色	淡青灰色	口縁~ 底部1/2	第8表	
1mm 以下の砂粒を含む	良	灰色	灰色	脚部1/1	C 5-65・66・ 75・76	右回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	灰白色	灰白色	脚部1/1	最終操業面	左回り
1mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	脚部1/2	3区	左回り

番号	出土遺構	挿図番号	図版番号	分布図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
131	3号窯跡	第44図131	図版第57-6		須恵器	高壺		(3.2)	8.0
132	3号窯跡	第44図132			須恵器	高壺	12.8	(3.3)	
133	3号窯跡	第44図133	図版第57-1		須恵器	高壺	13.8	14.1	10.8
134	3号窯跡	第44図134			須恵器	高壺	13.4	(3.2)	
135	3号窯跡	第44図135			須恵器	高壺		(2.0)	11.0
136	3号窯跡	第44図136	図版第57-5		須恵器	高壺		(2.4)	10.2
137	3号窯跡	第45図137	図版第58-1		須恵器	蓋	12.0	4.9	
138	3号窯跡	第45図138	図版第58-2		須恵器	蓋	9.8	(2.6)	
139	3号窯跡	第45図139	図版第58-3		須恵器	蓋	11.2	3.9	
140	3号窯跡	第45図140	図版第58-4		須恵器	蓋	9.8	3.9	
141	3号窯跡	第45図141	図版第59-1		須恵器	壺	13.6	4.3	
142	3号窯跡	第45図142	図版第59-4		須恵器	壺	14.2	(6.3)	
143	3号窯跡	第45図143	図版第59-5		須恵器	埴	10	7.4	
144	3号窯跡	第45図144	図版第59-6		須恵器	短頸壺	11.2	10.3	
145	3号窯跡	第45図145	図版第59-2		須恵器	不明土製品	長さ 5.4	重さ 21.1	
146	3号窯跡	第45図146	図版第60-3		須恵器	不明土製品	長さ 4.4	重さ 12.7	
147	3号窯跡	第46図147	図版第60-1		須恵器	甕	33	(4.9)	
148	3号窯跡	第46図148	図版第60-2		須恵器	甕	33	(7.6)	
149	3号窯跡	第46図149	図版第60-3		須恵器	甕		(8.6)	
150	3号窯跡	第46図150	図版第60-4		須恵器	甕		(6.3)	
151	3号窯跡	第46図151	図版第60-5		須恵器	甕		(4.4)	
152	1号土坑	第48図152	図版第61-1		須恵器	甕	18.2	(4.7)	
153	包含層	第48図153	図版第61-2		須恵器	横瓶	11.8	(7.5)	
154	包含層	第48図154	図版第61-3		須恵器	甕or壺			
155	包含層	第48図155	図版第61-4		須恵器	甕or壺			
156	包含層	第48図156	図版第61-5		土師器	甕	21.6	(6.0)	

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	暗青灰色	暗青灰色	脚部2/3	3 区	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良	灰白色	灰白色	坏部2/3	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色~淡灰褐色	淡青灰色	全体3/4	第8表	右回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	灰褐色	青灰色	坏部1/4	灰原	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	淡黄褐色	暗黄褐色	脚部1/8	3・4 区	
1 mm 以下の砂粒を含む	不良	灰褐色	灰褐色	脚部1/4	第8表	左回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	暗灰色	暗灰色	全体1/2	第8表	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	黒灰色	黒灰色	全体2/3	第8表	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	灰褐色	青灰色	蓋1/3	包含層	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	黒灰色	全体3/4	第8表	右回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	青灰色	青灰色	ほぼ完形	第8表	左回り
1 mm 大の砂粒を含む	不良	青灰色	青灰色	坏1/8	包含層	右回り
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色~明灰色	全体1/2	第8表	左回り
1 mm 以下の砂粒を含む	良	黄褐色	黄褐色	全体1/4	第8表	
1 ~ 2 mm 大の砂粒含む	良好	青灰色	-	全体2/3	C 5 - 65・66・75・76	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	-	全体2/3	C 5 - 65・66・75・76	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	淡褐色	暗褐色	口縁部1/10	3・4 区	
1 mm 大の微砂粒を含む	良好	黒灰色	黒灰色	口縁部1/10	最終操業面	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	頸部~肩部1/8	最終操業面	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	暗灰色	暗青灰色	頸部~肩部1/16	第8表	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	灰褐色	青灰色	肩部(把手)	C 5 - 87	
2 ~ 3 mm 大の砂粒含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/4	B 4 - 59・B 4 - 70	
1 ~ 2 mm 大の砂粒含む	良好	黒灰色~青灰色	黒灰色~暗灰色	口縁部~肩部	89年度調査区	
1 ~ 2 mm 大の砂粒含む	良好	青灰色	淡青灰色	胴部	89年度調査区	
1 ~ 2 mm 大の砂粒含む	良好	青灰色	暗灰褐色	胴部	89年度調査区	
1 ~ 2 mm 大の砂粒含む 金雲母含む	良好	橙褐色	橙褐色	口縁部~頸部3/4	2号窯跡灰原・C 4 - 20・C 5	

番号	出土遺構	挿図番号	図版番号	分布図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
157	包含層	第48図157	図版第61-6		土師器	甕			
158	1号 住居跡	第49図158	図版第62-1		須恵器	高壺		5.3	9.8
159	包含層	第49図159	図版第62-2		須恵器	平瓶	6.0	(4.3)	
160	包含層	第49図160	図版第62-4		須恵器	甕		(6.5)	
161	包含層	第49図161	図版第62-3		須恵器	甕		(4.4)	
162	包含層	第49図162	図版第62-5		須恵器	甕		(4.5)	
163	包含層	第49図163	図版第62-7		須恵器	甕		(13.5)	
164	包含層	第49図164	図版第62-6		須恵器	甕		(9.0)	
165	2号 住居跡	第49図165	図版第62-9		土師器	甕		(3.5)	
166	包含層	第49図166	図版第62-8		土師器	甕		(5.3)	
167	3号 住居跡	第50図167	図版第63-3		須恵器	壺蓋	14.0	(3.7)	
168	3号 住居跡	第50図168	図版第63-1		須恵器	壺蓋	11.4	4.4	
169	3号 住居跡	第50図169	図版第63-2		須恵器	壺身	11.6	3.2	
170	3号 住居跡	第50図170	図版第63-4		須恵器	壺身	11.0	3.4	
171	3号 住居跡	第50図171	図版第63-5		須恵器	壺身	11.8	(2.1)	
172	3号 住居跡	第50図172	図版第63-8		須恵器	高壺	14.0	(4.0)	
173	3号 住居跡	第50図173	図版第63-6		須恵器	高壺	12.0	(3.7)	
174	3号 住居跡	第50図174	図版第63-7		須恵器	高壺	12.7	(3.7)	
175	3号 住居跡	第50図175	図版第64-2		須恵器	高壺		(4.2)	10.4
176	3号 住居跡	第50図176	図版第64-3		須恵器	高壺		(4.6)	9.6
177	3号 住居跡	第50図177	図版第64-4		須恵器	高壺		(5.3)	9.7
178	3号 住居跡	第50図178	図版第64-1		須恵器	高壺	15.0	(4.6)	
179	3号 住居跡	第50図179	図版第64-5		須恵器	蓋	9.8	(1.4)	
180	3号 住居跡	第50図180	図版第64-6		須恵器	壺	13.0	(12.4)	
181	3号 住居跡	第50図181	図版第65-3		土師器	甕		(3.5)	
182	3号 住居跡	第50図182	図版第65-5		土師器	甕	20.2	(4.8)	

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1~2 mm 大の砂粒含む	良好	暗赤褐色	赤褐色	胴部	89年度調査区	
1~2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	青灰色	脚部	89年度調査区	左回り
1 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/4	83年度調査区	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	胴部	83年度調査区	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	胴部	83年度調査区	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	胴部	83年度調査区	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	胴部	83年度調査区	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	赤褐色	赤褐色	胴部	89年度調査区	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部1/8	83年度調査区	
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/8	89年度調査区	左回り
1 mm 大の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	全体3/5	89年度調査区	右回り
1~2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体4/5	89年度調査区	
1~2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/8	89年度調査区	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	全体1/6	89年度調査区	
1~2 mm 大の砂粒を多く含む	不良	黒灰色	黒灰色	坏部	89年度調査区	
1~2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	淡灰色	淡灰色~青灰色	坏部	89年度調査区	左回り
1~2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	淡青灰色	坏部	89年度調査区	
1~2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	脚部	89年度調査区	
1~2 mm 大の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	脚部	89年度調査区	
1~2 mm 大の砂粒を多く含む	不良	灰白色	灰白色	脚部	89年度調査区	
1~2 mm 大の砂粒を含む	良	淡黄褐色 ~青灰色	淡黄褐色 ~青灰色	坏部	89年度調査区	左回り
1 mm 大の砂粒を含む	良好	淡褐色~青灰色	青灰色	全体1/2	89年度調査区	左回り
1~2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	淡青灰色~青灰色	全体1/3	89年度調査区	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部	89年度調査区	
1~3 mm 大の砂粒を含む	良好	赤褐色	赤褐色	口縁部	89年度調査区	

番号	出土遺構	捕図番号	図版番号	分布図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
183	3号 住居跡	第50図183	図版第65-1		須恵器	甕	26.0	(3.3)	
184	3号 住居跡	第50図184	図版第65-6		土師器	甌			
185	3号 住居跡	第50図185	図版第65-5		土師器	甕			
186	3号 住居跡	第51図186	図版第65-2		須恵器	甕			
187	古墳周辺	第53図187	図版第66-1		須恵器	壺蓋	10.0	(3.1)	
188	古墳周辺	第53図188	図版第66-2		須恵器	壺身	10.0	(2.2)	
189	古墳周辺	第53図189	図版第66-3		須恵器	壺身	9.0	(2.0)	
190	古墳周辺	第53図190			須恵器	高壺	9.4	(6.4)	7.4
191	古墳周辺	第53図191			須恵器	壺	12.6	(4.8)	
192	古墳周辺	第53図192			須恵器	壺		(1.3)	
193	古墳	第53図193	図版第66-5		須恵器	壺		(3.5)	
194	古墳	第53図194	図版第66-4		須恵器	壺		(5.7)	
195	古墳周辺	第53図195	図版第66-7		須恵器	甕or横瓶		(9.0)	
196	古墳周辺	第53図196	図版第66-8		須恵器	甕or横瓶		(10.6)	
197	古墳周辺	第53図197	図版第66-6		須恵器	甕or横瓶		8.2	
198	古墳周辺	第53図198	図版第66-9		須恵器	甕or横瓶		(6.2)	

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	淡赤褐色	青灰色	口縁部	89年度調査区	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	-	把手	89年度調査区	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	赤褐色	暗黄褐色	胴部	89年度調査区	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	胴部	89年度調査区	
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部	90年度調査区	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部	90年度調査区	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部	90年度調査区	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	青灰色	青灰色	全体	90年度調査区	
1 ~ 2 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部	90年度調査区	右回り
砂粒をほとんど含まない 石英 含む	良好	青灰色	青灰色	坏部	90年度調査区	
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	黒灰色	黒灰色	頸部~肩部	古墳埋土	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	頸部~肩部	古墳埋土	
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	黒灰色~ 灰白色	黒灰色	胴部	90年度調査区	
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	黒灰色	黒灰色	胴部	90年度調査区	
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	黒灰色	黒灰色	胴部	90年度調査区	
1 mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	黒灰色	黒灰色	底部?	90年度調査区	

第5表 陣ヶ平西遺跡古代出土土器観察表

番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
1	第55図1	図版第67-1	須恵器	壺蓋	17.4	(1.2)	
2	第55図2	図版第67-4	須恵器	蓋	16.0	(2.3)	
3	第55図3	図版第67-2	須恵器	蓋	(17.4)	(3.3)	
4	第55図4	図版第67-3	須恵器	蓋			
5	第55図5	図版第68-7	須恵器	壺	17.3	4.7	
6	第55図6	図版第68-6	須恵器	壺	(14.0)	4.5	7.8
7	第55図7	図版第69-1	須恵器	壺	13.2	4.1	
8	第55図8	図版第69-2	須恵器	壺	12.2	4.2	6.8
9	第55図9	図版第69-3	須恵器	壺		(2.3)	7.0
10	第55図10	図版第69-4	須恵器	壺		(1.2)	6.6
11	第55図11	図版第67-5	須恵器	壺	(15.8)	(4.4)	10.2
12	第55図12	図版第67-6	須恵器	壺		(0.7)	8.8
13	第55図13	図版第68-1	須恵器	壺		(1.5)	9.0
14	第55図14	図版第68-2	須恵器	壺		(1.7)	10.4
15	第55図15	図版第68-3	須恵器	壺		(1.1)	10.8
16	第55図16	図版第68-4	須恵器	壺		(0.8)	10.0
17	第55図17		須恵器	壺		(1.1)	
18	第55図18	図版第68-5	須恵器	壺		(1.2)	10.4
19	第56図19	図版第70-5・6	須恵器	長頸壺		(5.7)	
20	第56図20	図版第70-4	須恵器	長頸壺		(4.2)	
21	第56図21	図版第70-1	須恵器	甕	12.4		
22	第56図22	図版第70-2	須恵器	甕	10.6	(5.7)	
23	第56図23	図版第70-3	須恵器	短頸壺	9.8	(8.1)	

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1 mm 以下の砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	淡赤褐色	口縁部1/4	第9表	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	口縁部1/4	第9表	右回り
1 mm 大の砂粒を含む	良好	暗青灰色	青灰色	2/5	第9表	右回り
1 mm 以下の砂粒を含む	良	暗青灰色	暗青灰色	天井部	前庭部	
1 mm 以下の砂粒を含む	良	灰白色	灰白色	全体3/4	前庭部	右回り
1 mm 大の砂粒を含む	良好	淡青灰色	淡青灰色	口縁～底部	第9表	
1 mm 大の砂粒を含む	不良	淡褐色	暗褐色	全体4/5	第9表	右回り
1～2 mm 大の砂粒を含む	不良	灰白色	灰白色	口縁部～底部1/6	第9表	右回り
1～2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	灰白色	灰白色	底部完形	前庭部	右回り
1 mm 大の砂粒を含む	不良	淡黄白色	淡黄白色	天井部	前庭部	
1 mm 大の砂粒を含む	良	淡青灰色	淡灰色	口縁部～底部	第9表	右回り
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	暗青灰色	暗青灰色	高台	第9表	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	灰色	灰色	高台	第9表	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	灰色	灰色	高台	第9表	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	青灰色	高台	C 4-28	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	淡灰色	淡灰色	高台	C 4-26	
1 mm 大の砂粒を含む	良	灰色	灰色	底部	C 5-16	
1 mm 以下の砂粒を含む	良好	青灰色	淡灰色	高台	第9表	
1 mm 大の砂粒を含む	良好	緑灰色	淡灰色～黒灰色	頸部～肩部	第9表	自然釉あり
1～2 mm 大の砂粒を含む	良好	黄灰白色	黄灰白色	肩部1/3	C 5-11	右回り
1 mm 大の砂粒を含む	良好	淡灰色	淡灰色	口縁部1/2	第9表	
1～2 mm 大の砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	淡青灰色	口縁部1/4	包含層	左回り
2～3 mm 大の砂粒を含む	良好	黄灰白色	黄灰白色	口縁部～胴部1/8	第9表	右回り

第6表 陣ヶ平西遺跡弥生時代・近世ほか出土土器観察表

番号	挿図番号	図版番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
1	第57図1	図版第71-1	弥生土器	壺形土器	16.0	(3.0)	
2	第57図2	図版第71-2	弥生土器	壺形土器		(3.5)	
3	第57図3	図版第71-3	弥生土器	甕形土器	29.0	(3.8)	
4	第57図4	図版第71-4	弥生土器	甕形土器	29.6	(7.2)	
5	第57図5	図版第71-7	弥生土器	甕形土器		(8.0)	
6	第57図6	図版第71-6	弥生土器	甕形土器	16.6	(3.7)	
7	第57図7	図版第71-5	弥生土器	甕形土器	17.0	(3.3)	
8	第57図8	図版第71-13	弥生土器	甕形土器		(2.0)	5.8
9	第57図9	図版第75-14	弥生土器	甕形土器		(4.7)	5.2
10	第57図10	図版第71-15	弥生土器	壺形土器		(3.5)	8.0
11	第57図11	図版第71-8	弥生土器	壺形土器		(4.0)	
12	第57図12	図版第71-9	弥生土器	甕形土器		(3.4)	
13	第57図13	図版第71-10	弥生土器	甕形土器		(3.5)	
14	第57図14	図版第71-11	弥生土器	甕形土器		(3.0)	
15	第57図15	図版第71-12	弥生土器	壺形土器		(4.4)	
16	第57図16	図版第74-4	瓦質土器	火舍	15.5	7.5	13.4
17	第57図17	図版第74-3	磁器	碗		(1.5)	
18	第57図18	図版第74-2	磁器	徳利		(3.3)	4.6

胎土	焼成	色調(外面)	色調(内面)	遺存部分	出土区	備考
1mm以下砂粒を多く含む	良	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部	90年度調査区	
1mm以下砂粒を多く含む 金雲母を含む	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	頸部	90年度調査区	
1mm大の砂粒を多く含む	良	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部	90年度調査区	
1mm大の砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部	90年度調査区	
1~2mm大の砂粒を多く含む	良	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部~胴部	90年度調査区	
1mm以下砂粒を多く含む	良	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部	90年度調査区	
1mm以下砂粒を多く含む	良好	淡黄色	淡黄褐色	口縁部	90年度調査区	
1~2mm大の砂粒を多く含む	良	黄褐色	黑灰色	底部	90年度調査区	鉢形土器?
1~2mm大の砂粒を多く含む	良	黄褐色	黑灰色	底部	90年度調査区	
1mm以下砂粒を多く含む	良好	淡黄褐色	淡黄褐色	底部	90年度調査区	
1mm以下砂粒を多く含む	良	黄褐色	黄褐色	肩部	90年度調査区	
1~2mm大の砂粒を多く含む	良	橙褐色	淡黄褐色	肩部	90年度調査区	
1~2mm大の砂粒を多く含む	良	淡黄褐色	淡黄褐色	肩部	90年度調査区	
1~2mm大の砂粒を多く含む	良好	淡黑褐色	黄褐色	肩部	90年度調査区	
1~2mm大の砂粒を多く含む	良	淡黄褐色	暗灰褐色	肩部	90年度調査区	
1mm以下の砂粒を含む	良好	灰白色	灰白色	全体	89年度調査区	
精緻	良好	淡青白色	淡青白色	底部	89年度調査区	
精緻	良好	淡青白色	淡灰色	胴部	90年度調査区	

第7表 陣ヶ平西遺跡弥生時代出土石器計測表

番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	出土区	備考
1	図版第72-1	石鎌	1.70	1.30	0.30	0.5	安山岩	B 4 - 89	
2	図版第72-2	石鎌	(2.20)	1.65	0.30	1.0	安山岩	C 4 - 67	
3	図版第72-3	石鎌	2.75	1.65	0.30	1.0	安山岩	C 4 - 39	
4	図版第72-4	石鎌	2.80	1.60	0.30	1.1	安山岩	C 4 - 25	
5	図版第72-5	石鎌	2.75	1.55	0.30	1.2	安山岩	C 3 - 19	
6	図版第72-6	石鎌	(3.20)	1.95	0.30	1.9	安山岩	D 5 - 65	
7	図版第72-7	石鎌	(3.80)	2.25	0.40	3.3	安山岩	F 4 - 92	
8	図版第73-1	石鎌	(2.20)	2.00	0.40	1.1	安山岩	90年度調査区	
9	図版第73-2	石鎌	(2.65)	1.70	0.35	1.5	安山岩	90年度調査区	
10	図版第73-3	石鎌	(2.30)	2.05	0.40	1.8	安山岩	89年度調査区	
11	図版第73-4	石鎌	3.75	2.20	0.40	3.0	安山岩	89年度調査区	
12	図版第73-5	石鎌	1.80	1.80	0.70	2.6	水晶	90年度調査区	未製品
13	図版第73-6	剥片	1.45	1.30	0.40	0.5	安山岩	89年度調査区	使用痕有り
14	図版第74-1	砥石	8.70	5.30	3.40	187.1	花崗岩	90年度調査区	

第8表 陣ヶ平西遺跡古墳時代出土土器接合資料一覧表

番号	出土遺構	種別	器種	挿図番号	図版番号	分布図番号	觀察表番号	出土区
1	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図2	図版第35-4	第17図・第23図	第4表2	8区13層, 8区
2	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図3	図版第35-2	第21図	第4表3	8区13・26層, 8区
3	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図4	図版第35-3		第4表4	最終操業面
4	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図5	図版第35-5	第16図・第20図	第4表5	1-4セ33層, 3区No.2整, 3区No.3整, 4区No.1整～No.2整, 8区
5	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図6	図版第36-1		第4表6	4区No.2
6	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図7	図版第36-2	第17図・第23図	第4表7	5-8セ12層, 7区, C 4 - 88
7	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図8	図版第36-3	第17図・第22図	第4表8	最終操業面, 3-6セ7・28層, 5-8セ27層, 7区11・12層, 8区, C 4 - 45, 包含層
8	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図9	図版第36-4		第4表9	最終操業面, 5-8セ12層, 1-4区No.1整, C 5 - 89
9	1号窯跡	須恵器	壺蓋	第26図10	図版第37-1	第23図	第4表10	C 5 - 35, C 5 - 55, C 5 - 65
10	1号窯跡	須恵器	壺身	第26図12	図版第39-2		第4表12	2号窯跡埋土, 2号窯跡灰原
11	1号窯跡	須恵器	壺身	第26図13	図版第37-2	第17図・第23図	第4表13	5-8セ13層, 6区
12	1号窯跡	須恵器	壺身	第26図14	図版第37-3	第16図・第18図	第4表14	5-8セ27層, 5-8セ61層, 8区13・26層

番号	出土遺構	種別	器種	挿図番号	図版番号	分布図番号	観察表番号	出土区
13	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図15	図版第39-4	第16図・第18図	第4表15	5-8セ27・61層, 8区
14	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図16	図版第37-4		第4表16	3区No.1整, 4区No.2
15	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図17	図版第38-1	第17図・第24図	第4表17	最終操業面, 5-8セ13層, 3区No.1整, 8区
16	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図18	図版第38-2	第17図・第23図	第4表18	6区最終操業面, 7区12層, 8区
17	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図19	図版第38-3		第4表19	7区, 2号窯跡灰原, C4・C5排土
18	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図20	図版第38-4	第17図・第21図	第4表20	最終操業面, 1-4セ32層, 3-6セ5層, 4区No.1整~No.2整
19	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図21	図版第39-5	第17図・第23図	第4表21	5-8セ13層, 6区
20	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図22	図版第39-6		第4表22	5区, C4-99
21	1号窯跡	須恵器	坏身	第26図23	図版第39-1		第4表23	最終操業面, 4区No.1整~No.2整, 4区No.2, 6区最終操業面
22	1号窯跡	須恵器	高坏	第27図24	図版第40-2		第4表24	C4-80, C5-56
23	1号窯跡	須恵器	高坏	第27図25	図版第40-1	第17図・第21図	第4表25	6区33層, 6区
24	1号窯跡	須恵器	高坏	第27図26	図版第40-6	第17図・第22図	第4表26	6区33層, C5-55, C5-63, C5-64, C4-80
25	1号窯跡	須恵器	高坏	第27図42	図版第42-2	第16図・第20図	第4表42	1-4セ35層, 3区No.2整, 3区No.3整
26	1号窯跡	須恵器	高坏	第27図44	図版第42-4	第17図・第23図	第4表44	最終操業面, 1-4セ8層, 3区No.1整, 3区No.2整
27	1号窯跡	須恵器	高坏	第27図45	図版第42-5	第17図・第21図	第4表45	1-4セ30層, 3区No.1整, 3区No.2整
28	1号窯跡	須恵器	高坏	第27図46	図版第42-6		第4表46	最終操業面
29	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図49	図版第43-3		第4表49	C5-65, C5-66, C5-73, C5-75, C5-76, C4・C5排土
30	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図50	図版第43-4	第17図・第22図	第4表50	最終操業面, 1-4セ32層, 4区No.2, 包含層
31	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図51	図版第43-6		第4表51	4区No.2
32	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図52	図版第43-7		第4表52	C5-41, C5-43, C5-85
33	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図55	図版第43-9		第4表55	C5-44, C5-45
34	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図56	図版第44-1		第4表56	最終操業面, 4区No.1整~No.2整, 4区No.2, 4区, 包含層
35	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図57	図版第44-2		第4表57	最終操業面, 4区No.2
36	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図58	図版第44-3	第17図・第24図	第4表58	1-4セ7層, 3区No.1整, 4区No.2
37	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図59	図版第44-4	第17図・第21図	第4表59	1-4セ31層, 3区No.1整
38	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図62	図版第45-2		第4表62	4区No.1整~No.2整, 4区
39	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図63	図版第45-1		第4表63	1-4セ4層, 1-4セ8層, 1-4セ9層, 3区No.2整, 4区No.1整~No.2整
40	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図64	図版第45-3		第4表64	最終操業面
41	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図65	図版第45-5	第17図・第23図	第4表65	1-4セ10層, 3区No.1整
42	1号窯跡	須恵器	高坏	第28図66	図版第45-4	第17図・第23図	第4表66	1-4セ5層, 3区No.2整

番号	出土遺構	種別	器種	挿図番号	図版番号	分布図番号	観察表番号	出土区
43	1号窯跡	須恵器	高坏	第29図67	図版第46-1	第17図・第24図	第4表67	5-8セ18層, 7区, 8区, C5-1, C5-72, C5, 2号窯跡灰原, 包含層, 89年度調査区
44	1号窯跡	須恵器	高坏	第29図68	図版第46-2		第4表68	C5-44, C5-53, C5-56
45	1号窯跡	須恵器	高坏	第29図69	図版第46-3	第20図	第4表69	3区No.3整
46	1号窯跡	須恵器	高坏	第29図70	図版第46-4	第17図	第4表70	5-8セ14層, 5-8セ18層, 6区, C5-87・88
47	1号窯跡	須恵器	埴	第29図71	図版第46-8	第16図・第19図	第4表71	3-6セ57層, 3-6セ58層, 5-8セ14層, 5-8セ18層, 5-8セ51層, 6区, C4-4, C5-26
48	1号窯跡	須恵器	坏	第29図72	図版第46-7		第4表72	最終操業面, D4-58
49	1号窯跡	須恵器	鉢	第29図73	図版第46-5	第17図・第22図	第4表73	5-7セ63層, 7区12層, 7区11・12層, 6区, C4-58, C4-80, C5-96・86・D5-6, C4, 2号窯跡灰原, C4・C5排土
50	1号窯跡	須恵器	鉢	第29図74	図版第46-6	第16図・第19図	第4表74	1-4セ55層, 3-6セ38層, 3-6セ57層, 6区, C4-50, C4-70, C4-80, C5-42, C5-51, C5-83, C5-98, 89年度調査区
51	1号窯跡	須恵器	壺	第29図75	図版第47-6		第4表75	C5-35, C5-63, 89年度調査区
52	1号窯跡	須恵器	蓋	第29図76	図版第47-5		第4表76	8区13・26層, 8区18層
53	1号窯跡	須恵器	平瓶	第29図77	図版第47-1	第16図・第19図	第4表77	最終操業面, 5-8セ61層, 8区13・26層, 8区61層, 8区, C5-45, C5-71, D4-58, 包含層, 89年度調査区
54	1号窯跡	須恵器	平瓶	第29図78	図版第47-2・3・4	第16図・第19図	第4表78	5-8セ63層, 7区セ61層, 8区セ61層, 5・6区, 6区, 7区, C4, C5-66, C5-73
55	1号窯跡	須恵器	甕	第30図82	図版第48-2		第4表82	5区, 6区
56	1号窯跡	須恵器	甕	第30図83	図版第48-5	第16図・第18図	第4表83	3-6セ55層
57	1号窯跡	須恵器	甕	第30図84	図版第48-4		第4表84	最終操業面, 4区No.2
58	1号窯跡	須恵器	甕	第30図85	図版第48-7	第17図・第21図	第4表85	6区セ27層・6区セ39層
59	1号窯跡	須恵器	甕	第30図92	図版第49-5		第4表92	5区最終操業面, 5区, 2号窯跡前庭部
60	1号窯跡	須恵器	甕	第30図93	図版第49-6		第4表93	C4-24・34・35, 2号窯跡灰原
61	1号窯跡	須恵器	甕	第31図95	図版第50		第4表95	最終操業面, 1-4セ3層, 1-4セ7層, 4区, 8区, C4-46, C5-23, D4-48, D4-69, D5-5, 89年度調査区
62	1号窯跡	須恵器	甕	第32図97	図版第51-5		第4表97	6区, D4-58
63	1号窯跡	須恵器	甕	第32図98	図版第51-3		第4表98	C5-64, C5-76
64	1号窯跡	須恵器	甕	第33図101	図版第52-1		第4表101	6区最終操業面, 包含層, 2号窯跡前庭部

番号	出土遺構	種別	器種	挿図番号	図版番号	分布図番号	観察表番号	出土区
65	1号窯跡	須恵器	甕	第33図102	図版第52-3		第4表102	6区最終操業面, 8区
66	1号窯跡	須恵器	甕	第33図103	図版第52-2		第4表103	最終操業面, 1-4・7・8層
67	1号窯跡	須恵器	甕	第34図105	図版第53		第4表105	最終操業面, 3~8区, C4区, C5区, D5区, 89年度調査区(接合破片数260点以上)
68	3号窯跡	須恵器	坏蓋	第43図107	図版第54-2		第4表107	3号窯跡最終操業面, 3区
69	3号窯跡	須恵器	坏蓋	第43図108	図版第54-3		第4表108	3号窯跡最終操業面, 3・4区, 包含層
70	3号窯跡	須恵器	坏蓋	第43図109	図版第54-4		第4表109	3号窯跡最終操業面
71	3号窯跡	須恵器	坏蓋	第43図111	図版第55-1		第4表111	C5-65・66・75・76
72	3号窯跡	須恵器	坏身	第43図112	図版第55-3		第4表112	3号窯跡最終操業面, 3区, 5・6区
73	3号窯跡	須恵器	坏身	第43図113	図版第55-4		第4表113	C5-65・66・75・76
74	3号窯跡	須恵器	坏身	第43図115	図版第55-6		第4表115	3号窯跡灰原, C5-87
75	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図116	図版第56-1		第4表116	3号窯跡最終操業面, 3・4区
76	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図117	図版第56-2		第4表117	3号窯跡最終操業面, 3・4区
77	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図118			第4表118	3号窯跡最終操業面
78	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図120	図版第56-4		第4表120	3号窯跡最終操業面
79	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図121	図版第56-3		第4表121	3区, 3・4区, 5・6区
80	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図122	図版第56-5		第4表122	3号窯跡最終操業面, 3・4区
81	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図123			第4表123	2号窯跡灰原
82	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図126	図版第56-7		第4表126	3号窯跡最終操業面, 3区
83	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図127	図版第56-8		第4表127	3号窯跡最終操業面, 1-4区, 3・4区
84	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図132			第4表132	3号窯跡最終操業面
85	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図133	図版第57-1		第4表133	3号窯跡最終操業面, 1・2区, 3・4区, 4区
86	3号窯跡	須恵器	高坏	第44図136	図版第57-5		第4表136	3・4区, C5-67・68・77・78
87	3号窯跡	須恵器	蓋	第45図137	図版第58-1		第4表137	3号窯跡最終操業面, 3区, 4区, 3・4区
88	3号窯跡	須恵器	蓋	第45図138			第4表138	3号窯跡最終操業面, 3区, 3・4区
89	3号窯跡	須恵器	蓋	第45図140	図版第58-4		第4表140	3・4区
90	3号窯跡	須恵器	坏	第45図141	図版第59-1		第4表141	3号窯跡最終操業面, 1-4区
91	3号窯跡	須恵器	坏	第45図143	図版第59-5		第4表143	3号窯跡最終操業面, 3区, 3・4区
92	3号窯跡	須恵器	短頸壺	第45図144	図版第59-6		第4表144	C5-65・66・75・76, C5-76
93	3号窯跡	須恵器	甕	第46図150	図版第60-4		第4表150	3号窯跡最終操業面, 89年度調査区

第9表 陣ヶ平西遺跡古代出土土器接合資料一覧表

番号	挿図番号	図版番号	観察表番号	種別	器種	出土区
1	第55図1	図版第67-1	第5表1	須恵器	壺蓋	前庭部, C 4-16, C 5-13
2	第55図2	図版第67-4	第5表2	須恵器	蓋	C 4-19, C 4-30, C 5
3	第55図3	図版第67-2	第5表3	須恵器	蓋	窯内, 前庭部, C 4-45・46・55・56, C 4-46, C 5-86, C 4・C 5 排土
4	第55図6	図版第68-6	第5表6	須恵器	壺	C 5-55, C 5-76, C 5-98, 89年度調査区
5	第55図7	図版第69-1	第5表7	須恵器	壺	C 5-1, C 5-2, C 5-11, C 5-13, C 5-24, C 5-28, C 5
6	第55図8	図版第69-2	第5表8	須恵器	壺	灰原, C 4-7, C 5-1
7	第55図11	図版第67-5	第5表11	須恵器	壺	灰原, C 4-9, C 5-12
8	第55図12	図版第67-6	第5表12	須恵器	壺	C 4-38, C 5-12
9	第55図13	図版第68-1	第5表13	須恵器	壺	窯内, 灰原, B 4-99, C 5-24, C 4・C 5 排土
10	第55図14	図版第68-2	第5表14	須恵器	壺	C 5-24, C 5-26, C 5
11	第55図18	図版第68-5	第5表18	須恵器	壺	C 4-7, C 5-1
12	第56図19	図版第70-5・6	第5表19	須恵器	長頸壺	灰原, C 5-45
13	第56図21	図版第70-1	第5表21	須恵器	甕	灰原, C 4-38, C 5-11
14	第56図23	図版第70-3	第5表23	須恵器	短頸壺	灰原, C 4-20, C 5-11, C 5

図版

図版第1 陣ヶ平西遺跡

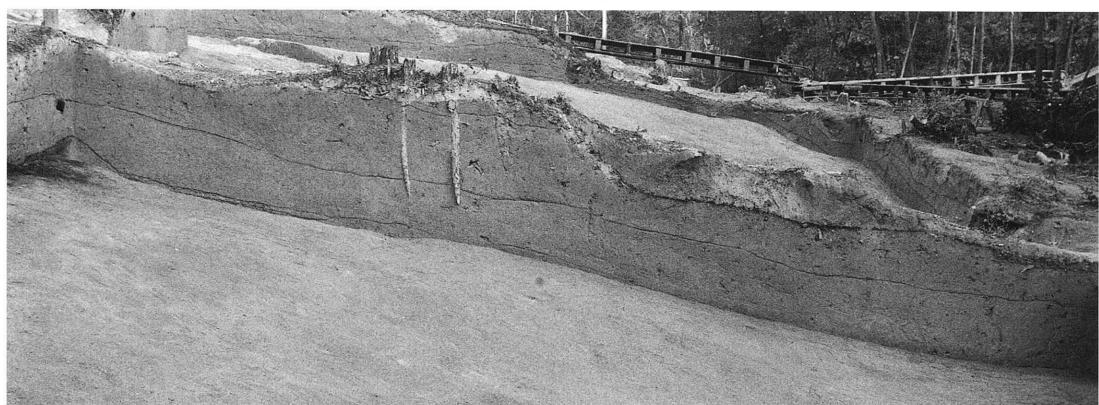
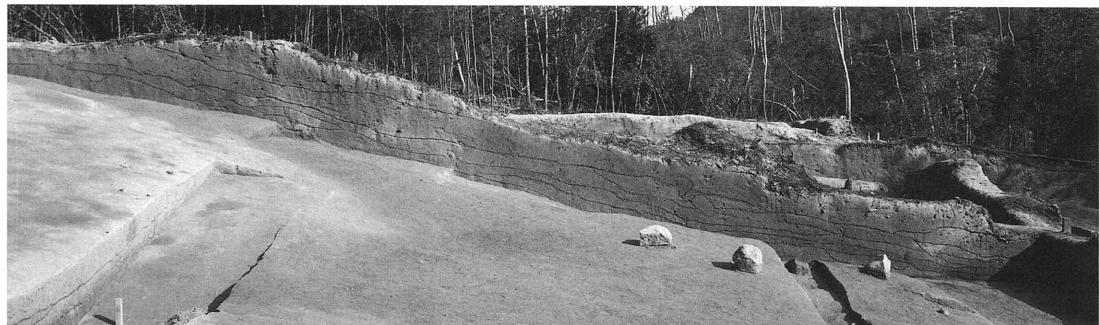


a. 遺跡遠景



b. 須恵器焼成窯跡SY01・02・03完堀状況

図版第2 陣ヶ平西遺跡土層断面（1）



(上からB3区・C3～4区・C5区・G4区東壁)